
PENALTY ニンゲンがキミでポケモンがボクで

ウージの使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PENALTY ニンゲンがキミでポケモンがボクで

【Nコード】

N4618P

【作者名】

ウージの使い

【あらすじ】

元ギンガ団のマーキュリーはかつてギンガ団がした悪事の罰を受け、自分ポケモン？そして手持ちが擬人化だって？

とにかく人間の姿を取り戻すため、マーキュリーは手掛かりを集め始める……！！

(設定は逢魔ヶ刻動物園を参考にしています。)

第1話 事の起り(前書き)

こんにちは、ウージの使いと申します。

この小説は、説明でも書いたとおり逢魔ヶ刻動物園のポケモンバー
ジヨンのようなものです。

擬人化が多数出てきますので、そういうものが苦手な方はご遠慮し
てください。

第1話 事の起り

僕の名前はマーキュリー。

ここ、シンオウ地方で暮らしている。

で、実は……ギンガ団でした。

え？ギンガ団知らない？……なんかショックだなあ。

僕たちギンガ団は「新たな未来を！ギンガ団！」みたいな感じでボスのアカギさんのもといろんな悪いことしてきました。

まあ僕はしたつぱだったんですけどね。

大きな事件はあれかなあ、リッシ湖爆破したりしてリッシ湖を含む三つの湖から

その湖にいたポケモンを捕まえ、「あかいくさり」って言うのを作った事件。

いや、むしろそのあと起こったほうが事件だよな？

僕はテンガン山の内部で警備を任されたからじかに見たわけじゃないんだけど……

ボス達はそのあかいくさりで伝説のポケモンを捕まえようとした。

しかし、そこへ一人の少年が現れ、僕達を倒してなんとアカギさんにまで勝ち、

さらには伝説のポケモンをゲットしちゃいました……。

おかげで組織壊滅、晴れて僕も無職です。

まあ、そこから頑張ろうと思っていたのに……

こんなことになるとはね……

気がついたらぼくは真っ白な空間にいた。

「へ？あれ？」

寝ぼけているのかとも思ったけど、

「お？やっと起きた」

そんな声が出て、ただの夢ではないことを教えてくれた。
体を起こすと、そこには3つの光が三角形に並んで浮いていた。

「どうも もとギンガ団のマーキュリーさんですよ？」

「はい……」

光から聞こえて来た声は僕の名前知っているし、いったい何なのか
な？

「突然ですが、あなたには罰を受けてもらいます」

……は？

「いやちょっと、何ですか！どういふことですか！」

そこへ今度は別の声が答える。

「何でといつても、あなた方ギンガ団には結構な迷惑をかけられましたよ。」

私たちは3人ともあなた達につかまって苦しい思いをしたし、私は

湖を爆破されましたしね……」

「そうそう、あれは本当に苦しかったなあ……」

「どうやら、僕たちにも非はあるらしい。

いや、ちよつと待て……」

「その言い方……もしかして、あなた達は……」

おそろおそろ聞いてみると、3つの光はそついえばというふうに名前を教えてくれた。

「これは失礼、ユクシーといいます」

「私はアグノムです」

「そしてエムリットです」

……なんてこつた、夢なら早く覚めてくれ。
しかし、僕の願いは現実に押しつぶされた。

「信じられないでしょうが、これは現実です。正確には、眠っているあなたの頭の中へ直接交信しているんですけどね」

「それじゃあ、本題に入りますよ」

ユクシー、そしてアグノムの声がゆつくりと僕に“罪”を宣告する。

「先ほどから言っているように、あなた方は私達ポケモンに大きな被害を与えました。

よつてギンガ団を代表してあなたに罰として……」

「いやいやいや、ちよつと待つてよ!」

思わず僕は口を挟んでしまった。ユクシーの声が不思議そうに尋ね

てくる。

「どうしたのですか？」

「なんで僕が代表なの！？僕はただのしたっばなのに……」

その問いにはアグノムの声が答えてくれた。

「本来ならばボスのアカギなんですが、彼は行方をくらませてしまいました。」

とすると次は幹部になるわけですが、マーズとジユピターはアカギを追ってやはり行方をくらませてしまいました……。プルートという輩は国際警察に捕まったそうだし、サターンはギンガ団の残党をよい方向へと導こうと奮闘しているよ。うなので

罰を与えるわけにはいかないですよ。」

そして声はエムリットへとバトンタッチする。

「んで、実は君はただのしたっばじゃなかったんだなこれが。」

「え？」

それは僕には身の覚えがない話だ。

しかし、ユクシーの声がそれを教えてくれた。

「あなた、有力な次期幹部候補だったんですよ。知らなかったんですか？」

「初めて聞きましたよ！！」

僕が幹部候補！？

初耳だよ！？

……組織が壊滅する前に、なりたかったなあ幹部……。

「まあそういうわけで、ボス、幹部、と来て次はあなたになるんですよ」

「……あ」

ようやくつかめてきた……

この恐ろしい先が。

「わかっていただきましたか？」

では、具体的なことはエムリットに聞いてくださいね」

「よろしくね」

なんでエムリットだけこんなキャラなんだ？

とか考えていたら次の瞬間白い空間に穴が開いた。

……僕の真下に。

「うわああああああああああつ！！」

当然、僕は落ちていった……。

第1話 事の起り(後書き)

いかがだったでしょうか？

まずは第3話まで掲載し、それから少しずつ更新していきます。

更新が遅くなることも多々あると思いますが

どうぞよろしくお願いいたします。

第2話 変化

「いったあ……」

僕は身を起こす。

どうやらここは洞窟のようだ。

あちこちに水たまりがある。よく見ると、その水たまりはやたら横か縦に長い。

何かの模様なのかな？

後ろを振り向いてみると出口のような光が見える。

とりあえず、出ようかな……

「あ、ちよつとちよつと出ていくにはまだ早いよ？」

声が出た方を見ると、そこには一人の女の子がいた。

まだ一桁の年齢かもしれない。その割にはしっかりした表情をしているんだけど

髪の毛がピンクだった。

まあ、僕も髪の毛は水色だから何も言えないんだけど……

そう思っていたら、女の子はおかしそうにくすくすと笑う。

「あれ、私のこと分かんない？ 忘れたんだとしたら悲しいなあ……」

そう言っつてめそめそし始めるが僕にはわかる。

……どうみてもうそなきだ。

「ほらほら、早く思い出してよ、」の声をきく

声？

確かにあったことがない顔だけど、だったら声分かるはずが……
……あ？

「おっ、気づいたようだね？」

「まさか……」

そんなはずはない、と頭の中で何度も言いながらおそるおそる尋ねてみた。

「……エムリット？」

「正解ッ！！」

グツと親指を突き出してその女の子……エムリットは笑顔で言った。
おいおい、ポケモンじゃなかったっけ？

いや、それとも人間の女の子が遊びで言っているのか……？

「私は真正銘ポケモンのエムリットだけど？」

「ええっ!？」

心を見透かしたようにいったエムリット（もはや信じるしかあるまい）は

僕の姿を見るとまったくすくすくと笑い始める。

そして僕を指さすと笑いをこらえながら言った。

「ねえ、自分のことはいいの？」

自分？

何を言っているのかわからないまま何気なく右手を持ち上げて……
一気に硬直する。

「はあああああああああああああああああああああ」

大きいため息をついた僕を見てエムリットは不思議そうな顔をした。その表情に僕も不思議そうな表情になる。

「どうかしたの？」

「いや、そこで大きなため息が出てくるとは思わなかったなーって。普通、そこは驚きの大絶叫じゃないかな？」

いや、驚きましたよ十分……。

「でもさ、なんかもうわけわかんないから逆に驚きようがないって感じかな？」

説明してくれるんならそれが一番なんだけど……」

僕が言うと、エムリットは大きく頷いて言った。

「それもそうだね。もともと説明するためにここに飛ばしたんだしね。」

いいよ、ちゃんと説明してあげる」

そしてエムリットの説明が始まった……。

第3話 罰

「簡単に言つと、これが罰だよ」
「へ？」

エムリットの第一声がそれだった。

「ゴルダックになるのが罰なの？」

「というか、ようは“ポケモンになること”が私達の言う“罰”なんだよ。

別にゴルダック限定、ってわけじゃないんだ」

エムリットの説明に、ひとまずは納得。

あの真っ白な空間で僕が罰を受ける、ということは話してくれていた。

これがその罰、ということだ。

「わかった、反省した。だからもう元の姿に戻してくれないかな？」
「無理」

ダメもと言ってみただけど、即答されてしまった……。
そこへエムリットはさらにダメ押しをしてくれた。

「そもそも、私にはどうすることもできないんだー。
だから、私には君をここで元通りにすることはできない」

え、そうなの？
ということとは……

「僕、一生このままなの……?」

考えるだけで恐ろしい。

それは嫌だ!!

まだ彼女もできていないんだぞ!

なのにポケモンになつてたまるかあ!!

「ちょっと落ち着いてよ」

エムリットがパニックで暴走しかけていた僕を止める。

そしてまたゆつくりと口を開いた。

「戻るかどうかは君次第だよ。一生そのままかもしれないし、すぐに元に戻るかもしれない」

「本当!？」

僕の目の前に希望の光が輝き始めた。

よかった、元に戻る方法はあるのか……。

僕はわくわくしながらエムリットの次の言葉を待つ。

「……何？」

「何って、元に戻る方法は？」

「あー、それはね……」

少し困つたようにほほをかくとエムリットは言った。

「はっきりとは分かっていないんだ」

……

「マジで？」
「マジです」

それは……いくらなんでもひどくはないか？

「それじゃあ、元に戻るって保証もないじゃないか！！」
「あるよ？」

僕の叫びにエムリットはあっけらかんと答えた。
「いったいどういふことなんだろう？」

「じゃあ何？」

「実際に一度ポケモンになってから人間に戻ることが出来た人がいるんだよ。」

4年前かなあ、酒におぼれてポケモン虐待して、まあ罰を受けてもらったんだけど

彼、相当落ち込んで反省してね。

2、3年くらいして元に戻ったんだ」

「そうなんだ……って2、3年もかかったの！？」

いくらなんでもそれはひどいだろう！！

しかし、エムリットは問題ないよとでも言うように手を横に振った。

「いや、でも一気に戻ったんじゃないなくて手とか顔とか少しずつ、部分的に戻っていったんだよ。全体すべてが完全に戻ったのが2、3年後っていうこと」

そっかあ……

「じゃあ、そろそろ本題に入るよ？」

「まだ入ってなかったの!？」

「いや、一応入ってはいるけど……。ここからがなんと言うか、醍醐味なんだよ」

そう言っつてエムリットは僕の目の前に一つのモンスターボールを置いた。

「何これ？」

「君のだよ？ 私からのささいなプレゼント」

僕の、ということとは……

僕はそのボールを持つと思いつきり投げた。
中から出て来たのは……

「おおっ！ やっぱりお前かエテぼう!!」

「エイッ」

僕にすり寄ってきたのはエイパムのエテぼう。

僕の大事なパートナーだ。ゴルダックになっていたのに、ちゃんとわかってくれてよかった……。それに、ゴルダックになった時点で二度とエテぼうに会えないのかと絶望していたから本当に良かった……。

「はいそれじゃひとまずボールに戻ってねー」

せつかくの感動の再会をエムリットはエテぼうを戻し台無しにしました。

「な、何するんだよ!」

「まあまあ。それより、このモンスターボール、ぎゅっと握ってみ

て？」

「へ？なんで？」

「いいから！大事なことなんだよ！！」

よくわからないけれど、エムリットは一番まじめな顔をしてこつちを見る。

それだから、とりあえず、ぎゅっと握ってみた。

そうすると、なんか握ったモンスターボールが暖かくなってきて……

「うわっ！！！」

「わあっ！！！」

いきなりモンスターボールが弾けて僕は思わず声をあげた。

いや、正確にはモンスターボールが壊れたわけじゃない。何か僕の手から飛び出したようなこの感覚……。

飛び出したその何かのほうを見ると……。

「え？」

そこにいたのは男の子。

肌色のシャツに紫色の上着を着ている。首には細いマフラーが巻かれていて、片方の先についている飾りはまるで……

エイパムの尻尾の先にそっくりだった。

「いたた……」

男の子を2、3度瞬きをすると僕を見て、それから自分の手を見た。そしてそのまま飛び上がる。

「な、何これ！！オイラ、なんでこんな格好になってるの？」

え？

そこで僕ははたと思い当たることがあった。

横にいたエムリットを見ると、僕の視線に気がついたエムリットは笑顔で答えた。

ひよつとして、ひよつとして……

僕はその男の子に尋ねてみる。

「もしかして……エテぼう？」

男の子が驚いたような顔でこっちを見たのが、すべての答えだった。

第3話 罰（後書き）

いかがだったでしょうか？

これからどんどん更新していく予定です。

感想などなど、お待ちしております！！

第4話 能力

オホン、とエムリットが咳払いをする。

その前ではゴルダックの僕と人間になったエテぼうが正座している。

「まあ……これが能力です」

いや、それだけですか？

「もうちよつと詳しく説明してよ！」

なんでエイパムのエテぼうが人間になったの!？」

僕の問いにエムリットは少し考えながら話してくれた。

「この罰なんだけどね、まあポケモンになった、これが罰があつて最初はみんな驚くけど」

何もしないとポケモンにした人間が何も変わってくれなかったのよ。野生のポケモンから食料奪つたり、住処を奪つて領地にしたり……それじゃあこの罰を与える意味がないのよ。

だから、とりあえず人間社会で生活してもらつて野生のポケモンたちに被害を与えてほしくなかったんだけど、ポケモンになったからそれは難しいことが分かったの。

実はその姿だと人間とポケモンの両方と会話が出来るんだけどね……。

で、人間として生活するにはどうしようかなーって考えるとユクシーがいいこと思いついたのよ。

『そうだ、ポケモンを人間に変える能力があればいいんですよ』って

エムリットの話がすごく難しいけどようするにこついうことなのかな？

「ようするにポケモンになった人間が人間の生活でもできるようにポケモンを人間にする能力を与えたってこと？」

「まあそうなるのかな？ただ、それだけじゃないよ？」

ユクシーはね、ポケモンになることで人間にポケモンを大事にする気持ちを持ってほしかった。けどそれだけじゃなくて、今まで自分が人間だったのに逆に人間がポケモンに、ポケモンが人間になって立場が変われば少しはわかってくれるんじゃないかって思ったのよ。さすがユクシーだよね」

なるほど……さすがはちしきポケモン、か……。

その時、エテぼうが口を開いた。

「それじゃ、オイラもマークが元に戻るまで人間のままなの？」

え、マーク？

驚いた顔でエテぼうを見るとエテぼうは笑顔で言った。

「だって、オイラにもエテぼうっていうニックネームをつけてくれたからね。」

オイラも何か新しい呼び方で呼びたいなーって……」

コイツ……

なんてかわいらしいやつなんだ……。

嬉しくて本当に涙が出そうになる。

「ほら、少しはこの罰の意義が分かってもらえたかな？」

エムリツトの言葉に僕は頷く。

確かに、自分がポケモンになったのには驚いたけどそのおかげでもっとポケモンとわかりあえるのならば、この罰はポケモンにひどいことをした人間に
ポケモンの気持ちを考えてもらういいきっかけになる。

「そしてエテぼう君。

実を言うと、擬人化したポケモンは自分の意思で戻れるんだよ。そして、それからはもう

自由に擬人化したり戻ったりが出来るよ？」

「へえ……」

エテぼうはとてもわくわくした顔で聞いていた。

「まあ、話を戻すけど

この能力はどんなポケモンでも擬人化できるわけじゃない。あくまでも自分の手持ちだけ。

ただ、ポケモンの姿をしているから会話はオールオツケーだよ」

そしてエムリツトはじつと僕を見た。

「これで、だいたいの説明は終わったかな？」

あ、そうだ少し元に戻ったトレーナーの話しておくね」

「あ、うん頼む」

実際に戻った人がいるなら、その人が何をしたのか知ることは大事だろう。

僕が元に戻るのにも役立つはずだ。

「その人にも私が説明したんだけど、彼は話を聞いてこう言ったの。

『まるでこの罰はトレーナーとは何かを私達に問いかけているみたいだな』って。

そして彼はポケモンを連れてここを出ると、人間のふりをして（まあもともと人間だけだね）ポケモンジムに挑んだ。

そして8個のバッジを集めて、四天王に挑んで。

殿堂入りはできたらしいんだけど彼はそのあとチャンピオンを辞退して旅に出て、

旅を続ける中で“何か”を得た。その何かを得ることが元に戻る方法じゃないかって

人間の姿で再会した彼は言っていたわ」

「そうなんだ……」

それを聞いて僕は立ち上がる。

とりあえず、僕も同じ道をたどってみよう。

それからのことは、それからだ。

「あと、もしもつと彼について聞きたかったら、ソノオタウンのフラワーショップにいる

ブーケさんのところへ行ってみて。私の紹介があったっていえばきつといろいろ教えてくれるよ」

エムリットはさらに情報をくれた。

僕はエムリットに頭を下げてお礼を言った。

「ありがとう。それじゃあ僕はもう行くよ。

いろいろと教えてもらえて助かったよ」

そして僕はエテぼつと出口まで歩いて言った……。

「あ、ちょっと待って」

ここで止めるんですか？

せっかくいい感じの旅立ち！っていうシーンだったのに。

「本来なら引きとめないんだけどね。私は君が気にいったから特別サービスだよ」

え？

疑問に思っけて口を開こうとしたが、口から質問は出なかった。

というのもエムリットが目を閉じた途端彼女が光に包まれたからだ。しばらくして光が消えるとエムリットは目を開ける。

「いま、“みらいよち”でちょっと先を見て来た。

どうやら、ここから歩いてじゃ最高の出会いには間に合いそうにな
いんだよね……」

次の瞬間、今度は僕達が光に包まれる。

「うわっ!」

「え?え?」

エムリットを見るとエムリットは僕たちに笑いかけて言った。

「これから出会うポケモンは、君の力強い味方になってくれると思
うよ?」

それじゃあ、がんばってね!」

第4話 能力（後書き）

少し、説明が長いかもしれませんが。
次から、やっと本当の冒険が始まる……予感です

第5話 今度は洞窟の湖で

ドサツ！

「いつてえー！」

思い切り落ちた僕は思わず悲鳴を上げた。

ピチャーン、ピチャーンと水が垂れる音がする。

周りを見てみると、どうやらここはどこかの洞窟のようだ。

「いたたた……」

僕の横で人間の姿のエテぼうが起き上がった。

自分達がどこにいるのかを何となく理解するとエテぼうは僕を見た。

「ここどこかなあ？」

「さあね。まったく、エムリットはいつたい何を考えて……」

その時だった。

『来ないで！』

甲高い悲鳴のような声が聞こえた。

僕の足はいつの間にか声のほうへ駆けだしていた。

「待ってよー！」

エテぼうが後ろから追いかけて来たが待っている暇などない。そんな気がした。

足を止めたのは少し走った後。

そこは深い霧におおわれた湖だった。

「洞窟にこんな場所があつたなんて……」

だが、そんな場合ではなかった。

ここから湖に2体のポケモンがいるのが見えたのだ。

「あれは……ギャラドスと、ミロカロス!？」

野生のミロカロスなんて初めて見た。

そこへ声が聞こえた。

『おとなしくしゃがめ!お前は俺の言いなりになればいいんだよ!』

『そんなの絶対嫌!』

なんか、昼のドラマによくありそうな光景だな……。

のんきに考えていた時、ギャラドスが怒って吠えた。

『いいかげんにしろ!』

『ぎゃあっ!』

ギャラドスのアクアテールがミロカロスを襲う。タイプを考えると効果はいまひとつなんだけど、ギャラドスの攻撃はもともと高いうえにあたりどころも悪かったみたいだ。

もう、僕は見ていられなかった。

「やめろお!!!」

湖に飛び込み、ギャラドスに向かってクロール。水かきのおかげで、人間だった時より数段早い。

『ああん?』

「とりあえず、攻撃やめろオ!」

その勢いでとりあえず体当たり。

しかし不意を突いたようでギャラドスの体が大きく揺らいだ。

『ぐわっ……………』

しかし、ギャラドスの目を見た途端今度はパンチを食らわせようとした僕の手が止まった。

そっだ、ギャラドスの特性は確か“いかく”……

『何邪魔してくれてんだお前は!』

吠えるギャラドスの口に何か光が集まっている。

まさか……

「はかいこうせん!?!」

『くたばれえ!!!』

もうだめだ。

さっきのいかくで完全に戦意を失ってしまった僕は動くことが出来ない。

せまりくるはかいこうせんに僕は思わず目をつぶった。

『ええい!』

『んなつ!?!』

その声にうつすらと目を開けた途端、すぐ横をはかいこうせんが通過していった。

こわっ……。この恐怖は顔の横をナイフが横切った感じを100倍した感じといえはわかるだろうか？

前を見ると、そこではギャラドスにミロカロスが巻きついていて。

どうやらギャラドスがそれを振り払おうとした狙いがそれらしい。でもこれからどうすればいいんだ？

その時、陸からエテぼうの声がした。

「マーク！君も今はゴルダックなら、ゴルダックの技で戦えばいいんだよ！」

……わざ？

思いつかなかった……。ナイスエテぼう。

だけど、その使い方がわからない。

そうこうしているうちにギャラドスはミロカロスにかみつこうと口を開いた。

ミロカロスは必死に巻きついておさえようとして気づいていない。

「ああもう、なんとかなれ！」

そう言って手をギャラドスに向ける。

「止まれえええッ!！」

……叫びは通じた。

『!?!』

急にギャラドスの動きが止まったのだ。

僕は自分の手を見て、そして今手に流れているようなこの感覚から自分が何をしたのかが分かった。

「これ……かなしばり、か！」

信じられないけど、この瞬間何となくコツがわかった。

そのままギャラドスにクロールで突進し、その間に手に流れたあの感覚を今度は頭に集中する。

「おおおおおおおおおおおおっ！っ！っ！」

そして、その勢いから……僕はしねんのずつきを放った。

それは見事ギャラドスに命中する。

『ぐあああああっ!?!』

力尽きたのだろう、気絶したギャラドスはそのまま湖に沈んでいった。

「あー、疲れた……」

『大丈夫?』

陸でぐったりした僕のところにもロカロスがやってきた。

『あの……ありがとう』

「いや、いいよ」

そういえば、なんでぼくはミロカロスが襲われているのを見たときあんなに必死になって助けようとしたんだろう？

「お疲れ様、マーク」

僕の横にエテぼうが来て僕をねぎらってくれた。そしてエテぼうはそうだ、といった顔で言った。

「ひよつとして、これがエムリットの言っていた出会いじゃない？」

「え？」

『なんのことですか？』

僕はミロカロスにすべてを話した。

自分が本当はゴルダックではなく人間であること、ユクシー、アグノム、エムリットによって“罰”をうけることになったこと、エムリットに聞いたポケモンになる罰とポケモンを擬人化する能力のこと、そして最後にエムリットが言った“出会い”のこと……。全てを聞いたミロカロスはうんうんと頷いた。

『……信じられない話ですが、簡単に証明することはできそうです。

そのキミ、もし今の話が本当なら元のエイパムに戻ってみて？』

「いいよ？よつと」

エテぼうがエイパムの姿になったのを見るとミロカロスは今度は僕

に言った。

『うん、決めました。……私、あなたについていきます!!』
「……へ？」

僕は思わず間抜けな声を出す。

「あ、でも……モンスターボールがエテぼうの分しか……」
『それが、問題ないんだよね』

エテぼうのぼうを見ると、エテぼうの手にモンスターボールが5個あった。

『こんなメモがあったよ』

僕達が覗き込むと、そこには

ごめん、渡すの忘れてた!
レポートで近くに置いておくから、使ってね!
それじゃ、ミロカロスと仲良くね
エムリット

と書かれていた。

……
なるほど、すべてお見通しってわけか……。

『決まりだね!』

ミロカロスがうれしそうに言った

第6話 とりあえず家に帰ろう

僕はミロカロスが入った真新しいモンスターボールを握り締めた。

「そろそろかなー」

「わあっ！」

モンスターボールが弾け、目の前にびっくりした顔で座り込んでいたのは

……なんとというか、その。

それはそれはかわいらしい女の子だった。

「あ、足がある！手がある！」

手や足を興味深そうにしげしげと眺め何度も手を閉じたり開いたりをしているミロカロスを見て僕は思わず口元が緩んだ。

擬人化したミロカロスは長く真っ赤な髪がさらりと流れており

前髪の一部が後ろにハート型に曲がっていた。

服装は白いワンピースで、スカートの部分にミロカロスの尻尾のよう
うな

優雅な青と赤の刺繍がある。

その顔はとてもかわいらしい。さすがは、世界一美しいポケモンといわれるだけあるなあ。

「ん？どうしたの？」

「え、あ、いやいやなんでもないよ」

首をかしげるミロカロスに僕は質問した。

「ところで、ここはどこなんだい？」

「え、わからないの？」

まあ、エムリットにテレポートで飛ばされたからなあ……。

『エムリットにテレポートで飛ばされたからなあ……』

今はエイパムの姿で僕の肩に乗るエテぼうが僕の考えと同じことを言った。

それを聞いてミロカロスが答える。

「ここはテンガン山の地下だよ？」

「『テンガン山！？』」

僕とエテぼうは驚いた声をあげた。

当然だ、シンジ湖からかなり離れているのだから。

ふと、僕はあることを思い出した。

テンガン山、ということは……

「ねえ、ミロカロス、ハクタイシティまでの道はわかる？」

「え？なんで？」

ミロカロスに僕はちょっと照れ笑いを浮かべ答えた。

「説明したとおり、僕はこれから旅に出るつもりなんだけど……。

その、さすがにゴルダックのままだと、ちょっと町とか歩けないから服がほしいんだよ。

それに、旅に出るとなるとやっぱり用意がいるから……。」

「いるから？」

僕はゆっくりと言った。

「僕の家は、一度戻ろうかと思ったんだ」

しばらくそれを聞いて何も反応がなかったが、ふと我に返ったミロカロス

「え、あ、そうね、用意するから家に行くんだよね、そうだよね！」

かなり慌てた様子で言った。

あれ、なんかおかしいこと言ったかな？
考えていると

「いいけど、そのかわりさ……」

「え？」

ミロカロスが上目使いで僕を見る。

「私にも、名前つけてくれないかな？」

「名前？」

『ほら、オイラにエテぼうってつけたみたいだよ。鈍いなあ』

あ、なるほどね……。

少し考えてから、ポンと手を打つ。

「ミラ、なんてどうかな？」

「ミラ？」

ミラ、ミラと繰り返すと、その顔が次第に笑顔になる。

「気に入った！あるがとうー！」

「喜んでもらえたならよかったよ」

「えいつー！」

「んなっ！？」

なんとミロカロス、いやミラは突然僕の腕に抱きついてきた。
ちよっとちよっと、これはいつたい……

「あ、え、その、ちよっと、ま、待っていやその何がつまりえつと
それで」

「〜」

まったく文として成立していない僕の言葉は聞かずただミラは嬉し
そうに

ギュッと僕の腕に抱きついていた。

「……ま、いいか」

いや、いいのか本当はわからなかったんだけども……。
もう気にしても頭がこんがりそうだったから考えるのはやめた。
そして、ミラの案内のもと僕たちはハクタイシティへと向かって行
った。

「あれ？こっちだっけ？」

大丈夫かな……ミラ。

第6話 とりあえず家に帰ろう(後書き)

新たな仲間、ミラの登場です。

次回はついに、ポケモンバトルです!!

第7話 Let's ポケモンバトル!!

「や、やっと出れた……」

テンガン山から無事であることが出来たのは2、3時間もたってからのことだった。
もう僕はくたくただ。

「え、えつと……結果オーライ？」

「全然良くない！」

ミラに思わずつつこんでしまった僕は大きいため息をついた。

「まあ、いいや……。それより、早く家に行こう」

「ちよつと待った！」

その時、こつちを見る少年が大声を出した。
いわゆるたんぱんこぞうだ。

少年はこつちを指さすと大きな声で言った。

「俺と勝負しろ！その姉ちゃん!!」

あゝ、めんどくさ……。つて、え？

「私？」

「他に誰がいるんだよ？」

やれやれと言った感じで首を振る少年。

ミラはえーと……。というような顔で僕を見るが、僕にはどうしよう

もない。

だって、僕今ゴルダックだからね……。

「私、手持ちがないんだけど？」

「何言ってるのさ、横にゴルダックとエイパムがいるじゃん」

「うーん……」

ミラは困ったように僕を見る。

仕方がないから僕は少年に聞こえないようこっそりと言った。

「僕がどうすればいいか指示を出すから、ミラはそれをエテぼうに伝えて。」

僕が行くときは何か適当にやって。難しかったら僕が自分でやるから」

「わかった！じゃあ、行け！エテぼう！」

ノリノリだな……。

そんな感じで、ポケモンバトルが始まった。

「そういえば言っただけじゃなかったね、俺はマサヤ！将来ポケモンリーグでチャンピオンになる男だ！」

「ふーん」

ものすごくそっけなく返すミラ。

ちよっと少年……マサヤがかわいそうだった。

「なんだよ、そのつれない返事は！」

まあいいや、俺が勝ったら、おねえさん俺と付き合ってくれよ」

「あ、無理」

またもや即答で拒否するミラ。

さすがにこれは効いたようで、マサヤはしばし呆然としていたがモンスターボールを握った。

「ちくしょー！俺の実力を見ても同じことが言えるか！絶対後悔するぞ！

いけ、コリンク！」

『ルー！』

現れたのはコリンク。ミラがちらつと僕を見たので、僕はさりげなくエテぼうを指さす。

「いけ、エテぼう！」

『おう！』

お、なんかいい感じ。

ミラもだいぶトレーナーのふりが身についたらしい。

ここは先手必勝かな。

「スピードスター」

「エテぼう、スピードスター！」

エテぼうが尻尾を振るとそこから星が飛んでいく。

スピードスターは回避不可能なので攻撃は外れることなくコリンクに命中する。

「あぁっ、コリンク！」

「このままみだれひっかき」

「エテぼう、このままみだれひっかき！」

エテぼうが爪を光らせてコリンクに飛びかかる。

しかし、相手もただくらっているわけではなかった。

「コリンク、フラッシュュ！」

ピカッ！

『うわっ！』

その眩しい光にエテぼうは思わず目をつぶる。

そのためみだれひっかきも外してしまふ。それをマサヤは見逃さなかった。

「たいあたり！」

『ルー！』

『うわっ！』

まずいな……。

エテぼうはさっきのフラッシュュで相手がどこにいるかつかめてない

……。

これはまず素早さをあげないと。

「ミラ、こっすくいどっをさせて」

「エテぼう、こっすくいどっー！」

その言葉にエテぼうは体の力を抜いて素早さをあげる。

「そのまま僕とバトンタッチだ」

「マークとバトンタッチ！」

エテぼうの尻尾が俺の手とハイタッチする。

『ゴメン………』

「大丈夫、エテぼうはよくやった」

そう、エテぼうのスピードスターはしっかりとコリンクのダメージになっている。

僕はエテぼうから引き継いだ素早さでコリンクとの距離を一気に詰める。

「コリンク、フラッシュ………」

遅い！

「てい！」

『わあ！』

とりあえずチョップを振りおろす。なんかコリンクの悲鳴が聞こえたけど……

バトルだし、まあいつか。

「な………かわらわり？」

いや、ただのチョップです。

マサヤは戦闘不能になったコリンクを戻すと次のポケモンを出した。

「これが最後……頼むよ、ビツパ！」

ビツパか……。

そうだ、せっかくだから他の技もやってみよう。

確か、ハイドロポンプとか使えたよね……。

そう思った僕はあの感じを腹に集中する。お、来た来たこのなんとも言えない感じ！

そのままそれを口から放出する。

ハイドロポンプ！

……と、思ったがなんか違う、思ったより水が出ていない。

どうやら、僕はまだ水を出す能力が高くないようだ。これじゃあみずでっぼうレベルだな。

『ビ！？』

それでも、このビツパには結構効いたらしい。

ビツパがふらふらした所へミラの声援が聞こえた。

「マーク、もう一発！」

仕方ない、ご注文とあらば……。

僕はもう一度ハイドロポンプ（というかむしろみずでっぼう）をビツパにおみまいした。

「うう……負けちゃったよ」

そう言ってマサヤはミラに何か渡すとポケモンセンターへ走って行った。

僕はミラに近寄る。

「何もらったの？」

「賞金だって！やったよマーク！」

嬉しそうにミラが見せた賞金は300円だった。

……やっぱり、子供ってお金ないんだね……。

それでも、ミラがうれしそうだったから黙っておいた。

第7話 L e t ' s ポケモンバトル!! (後書き)

せっかくのポケモンバトルだというのに、うまくかけた自信がありません……

そして次には、家に帰れるかと思っています。

第8話 ただいま

「やっと、着いたよ」

ハクタイシティのアパ・トのある部屋のドアの前で僕たちは立ち止まった。

「あ、でも鍵は？」

僕のほうを見たミラに僕は微笑み返した。

「大丈夫、鍵はいつもソツに預けているんだ」

「ソツ？」

首を傾げたミラ。

僕はドアの前にある木をトントンと優しくたたく。

「ソツ、今帰ったよ」

『ん？』

急に木がもぞもぞと動き始めたのを見てミラは驚いた声をあげた。

「ええっ！！な、何？」

『うるさいお嬢さんだな』

人間の姿をしているミラの前でその木……いや、ウソツキーのソツはポケモンとわかる姿に戻る。

ソツがポケモンとわかりミラは胸をなでおろした。

「な、なんだポケモンかあ……」

『ふん、そりゃ木のふりをしていたのだからそう簡単にはれては困る。』

しかし、マーキュリーはどこだ？』

「あー、ここだよ」

ゴルダックの姿をした僕が手をあげると、ソツは目を見開いた。

『なんとまあ、お前がマーキュリーか？』

信じられんが、その声は間違いない。しかも、私の言葉が分かっているのも不思議だな……。何があつたんだ？』

「家の中で説明するよ」

家に入ると、僕は今までの経緯をソツに話した。話を聞いたソツはううむと唸る。

『信じられんが、エムリット殿にあつたのか……。』

話を聞く限り、私がかつて会ったエムリット殿だ』

『えー！？ソツさん、エムリットにあつたことがあるの！』

身を乗り出したのはエテぼうだ。家の中なのでエテぼうもミラも元のポケモンの姿に戻っている。

ソツは頷いて昔のことを話してくれた。

『まだ私がマーキュリーと出会う前の、私がウソハチだったころだ。私はエムリット殿に偶然湖のほとりで出会ったのだ。』

リッシ湖の洞窟はどこか？と聞くから教えたのだが、その時もなんというか

自由奔放な感じを受けた』

「うん、間違いなく僕が出会ったエムリットだ」

あのエムリットにはまさに自由奔放という言葉がふさわしい。
そして僕は本題に入った。

「それでさ。僕は、これからしばらく旅に出ようと思うんだ。
だからしばらくこの家には帰らない」

『そうか』

それだけ言ってソツは黙ったまま。

「だから……」

『ソツさんも一緒に行こうよ！』

僕のセリフを途中からエテぼうが引き継いだ。
確かに、僕もそう言おうと思っていただけだね。
しかし、ソツはゆっくりと首を横に振った。

『悪いが、私は遠慮させてもらおうよ』

え？

『どうしてですか？』

『そうだよ、一緒に行こうよ』

ミラとエテぼうがまだ食い下がるがソツは顔がなかった。

『私はそんなに体力があるわけでもないし、トレーナーの手持ちは
6匹と決まっているだろう？私の分は空けてマーキュリーには新
な仲間を作ってほしいんだ。それに』

そこで一度区切ってソツは僕のほうを見た。

『長い旅だろう。ならば家の留守を預かる者が必要ではないのか？』
「そ、それはそうだけど……」

僕は正直ソツを連れていきたかったのだが、ここまでじっくり考えた上ならば僕は
何も言うことが出来ない。

『ただ、その代わりに私を擬人化してくれないか？私はマーキュリーのポケモンだから
できるのだろうか？長期の間留守を守るとなると人間のほうが都合が
いい』

「……わかった」

僕は頷くと立ち上がって机の上にあるモンスターボール ソツの
モンスターボール を手に取った。

「戻れ、ソツ」

ソツをモンスターボールに戻すと、僕は擬人化するためモンスターボールを握る、この行動ももう3度目だ。

やがて、モンスターボールが弾け擬人化したソツが現れた。
緑色の手袋をしており、茶色い服を着た30代のおじさん。
服と同じく茶色い髪をガシガシとかくと擬人化したソツは言った。

「旅をするということはおまえの服装はどうする？」

「え？そうだなあ、とりあえず人のふりをして行動したいから……」
「だったらいろいろと隠す必要があるな。来い」

ソツはクローゼットからいろいろと服をとり出しては考え、しばらくするとそのいくつかを僕に着せた。

「こんな感じでどうだ」

ジーンズに青いジャケット、そして頭にかぶる白と赤が基調の帽子。うん、なかなかいい組み合わせじゃないか。

「そのくちばしが問題だな……」

そう言ってしばらく考えると、ソツは

「なら、こんな感じか……?」

そう言って僕の口の周りに紺色のマフラーを巻いた。少し口が苦しいんだけど、鏡を見るとぱっと見は確かに人間だった。

『似合ってるよ!マーク!』

ミロカロスが僕の近くに着てそう言う。

うん、女の子からもお墨付きがあれば大丈夫だろう。手の水かきは白い手袋で隠し、足は当然靴をはく。

「こんな感じだろうな」

「ありがとう、ソツ。これで旅に出ても人間として街を歩けるよ!」

お礼を言うと、ソツはなんだかさびしげな笑顔でうなずいた。

第8話 ただいま(後書き)

最近、執筆が少ししかできない……
もうひとつの連載もしなきゃいけないのに……

頼む

宿題出すなら休みをくれ……

(という少々ヤバい状態です)

第9話 旅

「そういえば、マーキュリー」

だいぶ旅支度を終えた僕に、ソツが話しかけて来た。

「あのミロカロスとは、どこで会ったんだ？」

「ああ、ミラか……。エムリットにテレポートで飛ばされた、テンガン山の洞窟の湖だよ？」

「そうか……」

ふと笑顔になったソツは一度後ろを振り返る。

そこでは擬人化したエテばつとミラがキャッキヤとはしゃぎながらテレビを見ていた。

ミラが聞いていないのを確認すると、再び僕のほうを見てソツが言った。

「あのお嬢さん、お前に気があるぞ？ 喧嘩するなよ」

「んなつ!?!」

予期しない言葉に僕は驚いた声をあげる。

その声が聞こえたのだらう、ミラが声をかけて来た。

「どうしたのマーク？」

「い、いやなんでもないよ……」

僕の顔が赤くなったのには気づかれなかっただろうか？

そんなことを考えていると今度は真面目な顔をしたソツが言った。

「これからお前は新しいポケモンと共に過ごすことになるのだろう……。
どんなポケモンを手持ちに入れるつもりだ？自分がゴルダックだということ踏まえたとえで少しは考えておいた方がいいぞ」
「そうだね……」

すでにエテぼうとミラは確定。
そして、あともう一匹……

「こいつも、僕のパーティーに加えるつもりなんだ」

そして僕は机の引き出しから、一つのハイパーボールを取り出した。
それを見てソツは眉間にしわを寄せた。

「……ギルティ、か」
「うん」

ギルティというのは僕がつけたニックネームだ。

「だが、そのボールは……」
「わかってるって」

そう、このボールは実はからっぽだ。ギルティは今は自分の世界に戻っている。

しかし、このボールを投げて呼んだら地の底からでも必ず現れると約束してくれた。

それ以来、僕はこのボールを大切に保管していたのだ。

思いつきのハイパーボールを他のモンスターボールと共に腰につけると僕はずっとテレビを見ていた2匹を呼んだ。

「ほら、行くよ！」

『あ、待って今いく！』

ポケモンに戻ったミラをボールに入れると僕は荷物を持って玄関に立った。

振り返ると、人間の姿をしたソツが僕の目を見ていた。

「留守は任せておけ」

「それじゃ……行ってきます！」

『行ってくるよソツさん！』

僕と肩に乗ったエテぼうが手を振ると、ソツはさびしげな表情で手を振り返してくれた。

『これからどうするの？』

エイパムの姿で肩に乗ったエテぼうは聞いた。

エテぼうの質問に僕はすぐ答える。すでに、まず何をするかは決めていたからだ。

「まずは、ソノオタウンに向かおう」

『なんで？』

頭に疑問符を浮かべるエテぼうに僕は笑って答えた。

「エムリットが言ってただろ。ソノオタウンのブーケっていう人を

訪ねてみるって」

『あ、そういえば言ってたねー』

笑いながら僕はタウンマップを取り出す。

これはソツが僕に用意してくれたものの一つだ。使うだけですぐにソツが思い浮かぶのは、やっぱりさびしいからかな……？
だけど、そんなこと旅立ってすぐ考えていたら元も子もない。

「ソノオタウンは……ハクタイの森を抜けたらすぐだね」

森にはいろんなポケモンがいるけど、とりあえずはゲットせずにエテぼうとミラだけで頑張ってみよう。ギルティに頼るほどの機会が来るかはまだ分からない。

僕はそんなことを考えながらカバンをあさる。そして取り出したのは折れたたみの自転車。

「よっし……行くぞー!!」

僕は自転車にまたがるとソノオタウンに向かってペダルをこぎ始めた。

元に戻るか保証はない。

でも、元に戻った人のことを聞いたら、きっと何か手掛かりが得られるだろう……。

第10話 神殿の奥

マーキュリーたちが期待を胸に旅に出た頃。

「とうとう、この時が来ましたか……」

そこはエイチ湖の近くに位置する町、キツサキシティにある神殿。その神殿の階段をゆっくりと降りている者がいた。

「この階段を下りるのも、5年ぶりです」

階段を下りているのは金髪で薄目の少年。

身なりはきちんと整えられており、整然とした様子がその性格を感じさせる。

少年はランプなど明かりを手に持つてはいないが、少年の周りにはぼんやりと光っていた。

やがて、少年は一つの石像の前に立つ。

「ここでしたね」

ちらりと後ろを振り返ると、氷に囲まれたその場所には石像と同じ形をしてはいるが、石像と違って色があるものが動かず静止している。

しかし、ちらりと見ただけで少年は石像のほうへと視線を戻した。

「さてと」

少年が石像に手を触れると、一瞬石像の目の部分が赤く光り石像がゆっくり横へとスライドした。その後ろにはぼっかりと口を開けた

洞窟があつた。

「いよいよですね……緊張しますよ」

ポケットに入ったモンスターボールを手でいじると、少年はそのまま奥へと進んでいった。

クリスタルが輝く洞窟の奥には、先ほどいたものと同じものがあった。

しかし、目の前のものからは禍々しいオーラを感じる。

少年はゆっくりとカウントダウンを始めた。

「5……4……3……2……1……今」

今、という言葉が少年の口から洩れた途端、辺りがぐらぐらと揺れ始め

前にあつたものがゆっくりと動き出す。

「……………」

少年が沈黙する中、目の前にいたレジギガスはついに眠りから覚めた。

「……………お久しぶりです。5年がたったので、約束どおり来ましたよ」

「……………ああ」

少年の朗らかな声にレジギガスは答える。

レジギガスの意識がはつきりするのを待って、少年はまた口を開いた。

「私のことを覚えていますか？」

「当たり前だ、こんな忌々しい体にしゃがったのはお前達なんだからな、ユクシー」

「そうですね」

少年　ユクシーは苦笑する。

「俺は5年も待った。とつとと俺を元の人間に戻せ」

「落ち着いてくださいよ、レイガさん」

ユクシーはレジギガスをレイガと呼んでなだめる。

「5年前にも言いましたが、元に戻る方法はこれといったものが見つかっていません。

しかし、2、3年前でしたかあなたが眠っている間に元に戻ったものが現れましたよ」

その言葉にレイガは反応した。

「本当か！」

「はい。あなたはレジギガスというとてもパワーのあるポケモンの姿になったので

その分自由に動き回れるまで5年の歳月をかけ力を蓄えてもらいましたから、もう旅に出ても大丈夫でしょう」

そうやってユクシーはポケットに入れていたモンスターボールをレイガに渡す。

「これは何だ？」

「あなたのモンスターボールですよ。ですが、ポケモンを出す前に

そのモンスターボールを手の中で転がしてみてください」
「ケツ」

舌打ちをするが言われたとおりレイガがモンスターボールを手中で転がすと

急にそのモンスターボールが弾け中から何かが出て来た。

「なんだ!？」

レイガの前でゆっくりと立ち上がったのは一人の少女。

いや、少女というには少し大人びている。

緑色のショートカットの髪をしており白いコートを身にまとっている。

その胸には赤いペンダントが下がっている。

「あなたのポケモン、サーナイトのサリーですよ」

「……お久しぶりです、レイガ様」

サリーは深々とレイガに頭を下げる。

レイガはそれを見てキツとユクシーのほうを見た。

「どういうことだ!!説明しろ!!」

ユクシーに詰め寄るレイガにユクシーはにっこりとして答える。

「あなたがその姿になったのは、ホウエン地方から来たあなたがシンオウ地方のポケモンをやたらに攻撃したり自然を破壊してシンオウ地方の生態系に影響を与えようとした罰だというのは説明しましたよね?それに加え、その姿になると自分の手持ちのポケモンを擬人化することが出来ます」

「だけどこいつが人間になったら、ポケモンバトルが出来ないじゃねえか!!」

憤るレイガだが、サリーはそこで手を前に出すと手からビームを放った。

ビームは壁にあたり、当たった箇所は氷漬けになっていた。

「冷凍ビームを撃ってみたのですが……出来ましたね」

「ええ、擬人化しても、ある程度なら技を使うことが出来ます。

それに、一度擬人化するとポケモンの意思で擬人化したりポケモンに戻ったりすることが可能になります」

ユクシーが説明すると、レイガはまたもや舌打ちをした。

「チツ、そうかよ。俺は元に戻らないのにな」

そんなレイガにユクシーはある提案をした。

「とりあえず、かつて元に戻った者がしたように、このシンオウ地方を旅してみたらどうでしょう?」

「そのために、手持ちを一度故郷で揃えてはどうですか?レイガ様」

ユクシーに続いて提案したサリーにレイガは頷いた。

「そうだな……それでこのジムでも突破するか。

幸い、俺はもう考えがあるから……サリー、レポートで俺をホウエン地方まで送れ」

「かしこまりました」

サリーがレジギガスとなったレイガの大きな腕をつかむと、二人は

そのまま消えてしまった。

あとに残ったユクシーは少し困った顔をした。

「レジギガスになったレイガさん、そして彼の出身はハウエン地方……。」

厄介な組み合わせになりましたね。まさか、考えというのは……」

その不安は的中することとなる。

第10話 神殿の奥（後書き）

せっかく登場したレイガですが、しばらく出番はありません。思いがけないころにまた登場させようかと思えます。

感想お待ちしております!!

第11話 僕のもは僕のもの 余りものは……僕のもの？

エテぼうが少しあきれた顔で僕に言った。

『旅に出るっていうのに、忘れ物はどうかと思っよ？』

「面目ない……や、でも、忘れ物っていうより思いっきりという方が正しいんだけどな」

僕は木立を抜けながら答える。

「ほら、着いた」

木立を抜けた先にそびえていたのは一つのビル。

青っぽい色に、ビルの横にはとげらしきものが付いている。

そう、僕のかつての“職場”だ。

「ギンガハクタイビル。久しぶりだなあ」

『……………』

そう、それはギンガ団のビルだ。

もつとも、かつてここに一人の少年が侵入して大騒ぎになり、それ以来無人だ。

だからこそ、入りやすいんだけど

『ここで何をやる気？まさか、盗みとかしないよね？』

「冗談言っなって」

その言葉にエテぼうがほっとした表情になるが

「僕が置いて言ったものは僕のものだし、まあ誰も来ないから少しくらいならいいんじゃない?」

という言葉で茫然とした表情に一瞬で変わった。

『マークってさ』

「ん?」

肩に乗ったエテぼうを見て僕は首をかしげた。

『たまに、悪者に見える時があるよ……』

「ははっ、それはどうも」

『ほめてないっ!!!』

肩でエテぼうがキーキー騒いでいたが、僕は気にせずビルに入るとさっそくいろんなものを調達していった。

「キズぐすり、げんきのかけら、なんでもなおし……」

やっぱりいろいろ残ってるなあ」

エテぼうが何か言いたげな目で僕を見るが、とりあえず無視だ。

さて、次は……。

僕はかつて自分が使っていた机に近づくと、ポケットから鍵を取り出した。

「やっぱり、あれも持って行ったほうがいいよね……」

引き出しの鍵をあけて、引き出しを引く。

その中には二つのものが入っていた。

『何これ？』

少し興味があったのか、エテぼうが上から覗き込む。

「まあ、エテぼうには必要のないものさ」

引き出しに入っていた物のうち、きらきらと輝く片方を右手に持って言う。

「こいつは、お前じゃなくて……あいつのだよ」

言いながら無意識のうちに、僕の左手は腰のハイパーボールをいじっていた。

じゃあじゃあ、とエテぼうがまた質問してくる。

『もう片方は？』

「誰でもないさ。しいて言うなら……僕のかな？」

見た目はそこら辺にある石ころのようなそれを、僕はゆっくりと持ち上げる。

「これ、前までは周りの目が厳しくて持ち出すことが出来なかったんだよね〜。

でも、今なら大丈夫そうだな」

そして右手に持っていた物と一緒にカバンの中へ入れた。

「さ、もらえるものはもらったし今度こそ出発しようか」

『やっとかよー』

もう不満げな表情は消え、いつものにこにこしたエテぼうに戻っていた。
再び木立を抜け、自転車を置いてあった場所に戻る。

「さて、今度こそソノオタウンに行こうか」

『うん。あ、そうだ』

エテぼうが思い出したように言った。

『マーク、ハクタイジムに行かなくていいの？』

「ジム？」

きよとんとした僕にエテぼうは続けた。

『だって、ほら、前に元に戻ったっていう人はジム戦をこなしてバツジを集めたんでしょ？』

「まあ、そうなんだけども」

僕は昨日のうちから考えていた予定を話す。

「ここ、ハクタイシティのジムリーダーのナタネさんは草タイプのエキスパートなんだ。

だから、僕とミラじゃ相性が悪いし、かといってエテぼう一人に負担はかけられない」

そう、僕が戦うっていう手も最初は考えたけど僕はゴルダック。水タイプじゃあ、ミロカロスのミラと同じで草タイプとは相性が悪い。

「だから、ジム戦はまずクロガネシティへ行く。
クロガネシティからはサイクリングロードを通ればここまですぐだ」
『ソノオタウンからクロガネシティへ行くってこと？』

僕はエテぼうの言葉に頷いた。

「うん、そしてその間に草タイプに対抗できる仲間が見つかったらいいね」

『なるほどね。じゃ、行こうよ！！』

「ああ、そうだな！！」

ギアをあげると、思いつき僕は自転車をこぐ。
そして一気にハクタイシティを出た。

第11話 僕のは僕のもの 余りものは……僕のもの？（後書き）

あけましておめでとございませう。

全然進みませんが、これからもPENALTYをよろしく願います！

第12話 フー？

何とか僕たちは無事にハクタイの森を抜けた。

途中コケに覆われた岩を見つけたんだけど、あれはいったい何だったんだろう？

まあそんなわけで、僕たちはもう少しでソノオタウンというところに来ていたのだが……。

「へえ、これは初めて見たなあ」

『ホントだねえ……』

僕たちは一つのプロペラのようなものをジイーっとみていた。

他にもいくつか周りにあり、みな風を受けくるくと回っている。

『でも、こんなもの、なんに使うのかな？』

「確かに、用途がよくわかんないな……」

「それはねー」

首を傾げた僕達に話しかけて来た者がいた。

「ビューってなって、くるくるってなって、電気がびりびりってなるんだよー」

楽しそうに説明してくれたのは小さな女の子だった。

まあ、説明してくれたのはうれしいんだけど……

『えっと……ようするにどういいうことかな？』

「……………」

さすがにこつも抽象的すぎては、何を言っているのかさっぱり分からなかった。

そこへ、一人の男性がやってきた。

「コラコラ、それじゃあその人わからないよ？」

「そーなの？」

そーなんです。

やってきた男性は女の子を抱っこすると僕に一礼した。

「こんにちは、旅の方ですか？」

「え、ええ……」

「僕はこの発電所で働いているトクイといいます。この子は僕の娘です」

なるほど、発電所か。

さっきの女の子の「電気がびりびり」っていうのは発電のことだろう。

しかし、そうなるとますますわからない。

「ここが発電所なら……あのプロペラみたいなものっていったい何なんですか？」

僕が聞くとトクイさんは胸を張って答えてくれた。

「あれが、風を受けることで回っているのはわかりますよね？」

そして、発電の仕組みってご存知ですか？」

「はい、確か電磁誘導とかタービンがどうとか……」

あいにく、僕には少し本で読んだ程度の知識しかない。

しかし、とにかく回ることで発電するというのはわかっているつもりだ。

「まあ、そういうことです。

そしてこのプロペラもまた、同じようなものなんですよ」

「ということは、これが発電機だ、と？」

そんな発電方法は初めて聞いた。

いや、たんに僕が一般常識に疎いだけなのか？

「この谷間の発電所は吹き下ろす山風を利用して電気を生み出しているんですよ。

自然の力で生み出すエネルギー！なんかいいでしょう？」

そこまで聞いて、やっと僕は思い当たることがあった。

確か……風力発電といったっけ。

すぐに出てこないとは、なんか恥ずかしいな……。

そう考えていると、女の子が急に口を開いた。

「今日はぴゅーって飛んでくるかなあー」

「？」

やっぱりというかなんというか、よくわからない。

そのことに気付いたのか、トクイさんが助け船を出してくれた。

「ここ、風が強いでしょ？だからたまにポケモンが飛んでくるんですよ。

毎週金曜日に来るんですが、今日はその金曜日なので……」

そこでトクイさんは空を見上げた。

「ひよつとすると、飛んでくるかもしれないねえ」

へえ〜。

どこかの地方にある洞窟では毎週金曜日に珍しいポケモンが迷い込んでくるって聞いたけど……ここも同じようなものかな？

『どんなポケモンかなあ？』

肩のエテぼうがわくわくした様子であたりをキョロキョロし始める。

「さあね、どんなポケモンだろうね？」

「あー！」

急に女の子が声をあげて僕の後ろを指さした。後ろからは確かに風が吹いてくるのを感じた。僕は慌てて振り向いたのだが

「え、ど……へぶっ!？」

「え、どこ？」と言おうとした僕の顔に、何か紫色のものがクリーンヒット。

しかし、よくよく考えると意外と痛くはない。

「いったい何なんだよ……」

そう言っつて僕は顔に激突したものを手に持った。

『フー？』

「うーん？」

僕が両手に持っていたのはポケモンだった。
丸い顔に黄色の×印があり、手が長いのに対して体がとても小さかった。

頭には雲のようなものがある。

「わーフワンテだー」

フワンテっていうのか……。

僕が手を離すと、フワンテはぶかぶかと宙に浮かんだ。
さて、珍しいポケモンも見れたしそろそろ行くか。

「ありがとうございますトクイさん」

「うん、どういたしまして」

一礼すると僕はソノオタウンに歩き始めた。

『フー？』

しかし、なんとフワンテが後ろからついてきた。
とりあえずもう少し歩く。

『フー』

『ねえ、フワンテついてきてるよ』

「そうだな……」

振り返ると僕はフワンテに尋ねた。

「ついてくるのかい？」

『フーフー』

いつもと違って何を言ってるのかわからないけど……
僕がからのモンスターボールを取り出すと、フワんテは自分からそ
の中に入ってしまった。

「君の名前は……やっぱりフリーだね」

『擬人化しないの?』

そのままモンスターボールを腰に付けた僕にエテぼうが聞いた。

「うん。だってさ……」

僕はフリーの入ったモンスターボールを見る。

「どんな人間になるのか、あまりに予想がつかないからね……」

第12話 フー？（後書き）

思ったより早く3体目の仲間、フーの登場です。

しかし……今のところ、擬人化させる予定はありません。

理由はマーキュリーも言った通り、どんな人間に擬人化するのか分からないからです。イメージが固まらないんですよこの子は……（汗）

第13話 花屋のブーケ（前書き）

今回から、少し違った手法で書いています。

読めばわかると思うのですが、最初はマーキュリー視点ではなく第3者視点です。

視点が変わるときは間をあけていますが、たまに視点が変わらなくてもあけることがあります。

見づらいかもしれませんが、なにとぞよろしく願います。

マーキュリー視点の時は、必ずマーキュリーが「僕」となっています。

第13話 花屋のプーケ

「いらっしやいませ！」

「こんにちはお姉ちゃん！」

「あら、偉いわねお使い？」

「うん！」

ここはソノオタウンのフラワーショップ、「いろとりどり」。
その店先で会話していたのは女の子と一人の店員だった。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

店員が花の種やきのみが入った袋を渡すと、女の子はお金を払って
とても笑顔になった。

そんな女の子に店員はポケットからモモンの実を取り出した。

「はい、これはプレゼント」

「いいの!？」

目を輝かせる女の子に店員は微笑んだ。

「もちろん。ポケモンにあげてもいいよ。」

このモモンの実は毒を直す効果があるから、その時使ってもいいか
もね

「わかった！バイバイお姉ちゃん！」

「ありがとうございます！」

手を振って女の子が帰って行くのを見届けると、その様子を見てい

た同僚が
にやにやした顔で言った。

「さっすが、ブーケさん子供に人気がありますねー」
「ちよつと、からかわないでよ」

金髪と同僚に胸を小突かれてブーケは困ったように笑った。
銀髪で緑色のカーディガンを羽織った彼女は20代後半くらいだろ
うか。

右手には赤、左手には青のバラの花の形をしたブレスレットをして
おり
その笑顔はどこか人懐っこかった。

「どうしたらそんなに子供に人気が出るんですか？」
「子どもと楽しく話せるからよ」

仕事の合間でできる大人のブレイクタイム。
しかし、次の来客はすぐだった。

「いらつしゃいませ！」
「……えーと、ソノオタウンのフラワーショップってここですよね
？」
「は、はい……」

ブーケ達の口調が少し遅くなったのは仕方がない。
というのも、その客は少し服装がおかしかったのだ。
ジーンズに青いジャケット、白と赤の帽子をかぶっているのはまだ
いい。

しかし、紺色のマフラーは口元を完全に覆って隠しているし手袋ま
でしている。

厚着をしているようだが服自体はそうでもない、というこの客はいつたい何者なのだろうか。

そんなことを考えていると、客は再び口を開いた。

「ブーケさん、という方はいらっしゃいますか？」

「え？」

同僚がブーケのほうを見る。

「えーと、私ですが……」

おそろおそろ手をあげると、客はほっとした顔（正確には口元が見えないので

目で判断したのだが）をした。

よく見ると、肩にはエイパムが尻尾でつかまっていた。

「少し、お話したいのですがよろしいですか？」

「え、えーとどちらさまでしょうか？」

一応相手がだれかは把握する必要がある。

そう思って尋ねた質問への返答は驚くべきものだった。

『エムリットに言われてきたんだ』

「!？」

「どうかしたの？ブーケさん」

同僚が不思議そうな顔をする。

そう、同僚には返答が聞こえていない。

なぜなら……返事をしたのは客の肩に乗っていたエイパムだったからだ。

おまけに、エムリットに言われてきたというその内容にも驚かされた。

……なるほど、そういうことか。

「わかりました。すみません、奥の部屋を使ってもいいですか？あとできれば人払いもお願いたいんですけど……」

「え？あ、ああいいですよ」

同僚はなぜブーケが驚いた顔をしたのが不思議そうではあったが、頼まれたとおり行動した。

「では、話は中でしまししょうか」

「はい……」

部屋に客を入れ、自らも部屋に入るとブーケは部屋の鍵を閉めた。

「さて、話というのはなんででしょう？」

僕の前に座ったブーケは聞いた。

「だいたいの予想は付いているのですが……」。

とりあえず人払いはしました、マフラーをとっても大丈夫かと思えますよ」

「やっぱり、わかりましたか……」

苦笑して僕は口元を隠していたマフラーをとって帽子を脱いだ。

現れたゴルダックの顔にブーケはあまり驚いた顔をしなかった。

「やっぱり、あなたはもと人間のポケモン、でしたか」

「はい」

僕は頷くと、今度はこちらから話し始めた。

「僕はエムリットからあるトレーナーの話を聞きました。

その人は一度ポケモンになったが2、3年で完全に元の姿に戻ったと。

そして、エムリットは詳しくはあなたに聞けと僕に言ったんです」

「そういうことでしたか……」

少し考え込んだような素振りを見せるが、一度ちらつと僕のほうを見ると

ブーケはまあいいか、と呟いた。

「エムリットが教えたのですから、罰を受けた人とはいえ話しても大丈夫でしょうね。」

あのエムリット、一見適当ですが人を見抜く目は確かですし悪い人間にあっさりこんな情報を流したりはしませんから」

「はあ……」

えっと……一応合格、なのかな？

そう考えていると再びブーケは話し始めた。

「元に戻ったというそのトレーナー……名前を、ツユクサといいます。」

そして私は、彼と共に旅をしていました。実際に彼と共に戦ったりもしました」

「戦う……?」

この女の人はどう戦ったんだろう……この人もポケモントレーナーなのかな?

少し黙っていたその時、

ヒュッ

「わあああつ!?!」

僕の左肩をかすめ何か振りおろされた。

よく見るとそれは、とげがたくさんはえたつるのムチ。

どこからとり出したのか、その先はブーケが握っていた。

「私が戦えないように見えましたか?」

ニッコリして聞くブーケ。

こ、怖い……怖すぎる……。

でも、あれ?

何かに気がついたような僕にブーケは笑顔で言った。

「見ての通り、私はポケモンですよ。ツククサの力で擬人化した、ポケモンです」

「ツククサの手持ちだった……ってことですか?」

僕の質問にブーケは口元に浮かべた微笑で答えた。

第13話 花屋のブーケ（後書き）

ブーケ、登場です。

そして罰を乗り越えポケモンから人間の姿に戻った人物、ツユクサ。

まだまだこの物語は始まったばかりです。

第14話 罰の詳細

ブーケが実はポケモンだということを知った後、僕たちは一度外に出て町を歩いてみた。

行き先はソノオタウンの花畑のさらに奥の森だ。

「一体、なんでこんなところまで……」

そういう僕は外なのでマフラーと帽子をつけている。

「これから先の話はあまり人の聞こえるところでしたくはないのよ……。」

その点、ここから先は私の友人の許可がないと入れないわ」

「は？」

僕がそう言った途端、辺りのいたるところからザザ……と音がする。
次の瞬間……

『久しぶりであるな、ブーケよ』

「ええ、久しぶりねビー」

現れたのはビークインとたくさんのミツハニー。

ビーと呼ばれたビークインの周りには何か小さいものがいっぱい飛んでいた。

『それで、妾に何の用か？それでもあまいミツを集めるので忙しいのだ』

「ちよつと空き地に行かせてくれないかしら？」

『なぜだ？』

依然として動かずにビーはブーケをじっと見ている。
その女王たる威厳にも臆することなく、ブーケは堂々と立って続けた。

「ツクサのことは知っているわね？」

「そこにいる……えっと」

そこでブーケは僕の方を振り返った。

「そつえば、あなたの名前聞いたっけ？」

……おいおい、忘れていたとかそついうノリですか？

「……マーキュリー、です」

『長い名前であるな』

ビーという僕的にはかなり名前の短いポケモンから駄目だしされた……。
うう、すつごくショックだ。

そんな僕の様子にはかまわず、ブーケは話をどんどん先へと進めていった。

「そう、マーキュリーもツクサと同じで罰を受けた人間なのよ。
もっとも、彼は属していた組織の責任をなすりつけられたみたいなんだけどね」

『なんか、情けない話であるな……。責任を押し付けられるほどその人物の無力さを際立たせるものはそうそつないであろうな』

ビーの言うことがいちいちしゃくにさわる。

言い返そうと思ったその時、ビーはゆっくりと道を開けた。

『まあ、人間達に聞かせたくないのは理解できた。通るがよい』
「ありがとう」

すました顔でブーケはビーの横を通り過ぎたが、その際

「あ、もしかしたらバトルもするかもだから」

あっさりとなんな言葉を残していった。

『……マーキュリーとやら』

一人残っていた僕にビーが話しかけてきた。
その顔がややひきつっている。

『ブーケに伝えておいてくれ。何があるうとも森を壊すな、どくどくなどもつてのほかだ、
とな。そちもできるだけ控えてほしい』
「わ、わかりました……」

僕が答えるとビーは『すまん』と言い残してまた森の中に消えていった。

「わっ、と」

森の中にあつたひとときわ大きな空き地で、ブーケはそばにあつた倒木に腰をおろした。

「罰について、あなたが知らないことを話しておくわね」

「え、なんですか？」

エムリットの説明でも十分だと思つたんだけど、まだ話していないことがあつたのかな？

そんなことを考えていると、急にブーケの姿が光に包まれて……

「えっ!？」

『これが、本当の私』

光はすぐに消えたが、人間の姿をしたブーケがいたところには一体のロズレイドがいた。

なるほど、ブーケは擬人化したロズレイドだったというわけだ。

だが、僕はそこである一つの疑問があつた。

「あれ?でも、ツユクサつて確か……」

『元の姿に戻つたから罰は終わっているんじゃないか、でしょ?』

「はい」

僕の疑問をすぐに見破つてブーケは教えてくれた。

『罰というのは……そうね、自分の体が不思議な力によっておおわれているのをイメージしてみてください』

そう言いながら地面に簡単な人をかいて、その周りを線で囲む。

『この力が人間をポケモンに変えているの。そして、この力が手か

らポケモンに伝わると……』

絵には手から光線みたいなものがでてポケモンらしき絵がその光線に包まれる図が追加される。

『ポケモンに擬人化の能力が備わる。ただし、もうわかると思うけどこれはもともとは

人間に植えつけられた強大な力の、ほんの一部がくつついたようなものの。だから、自分でコントロールして擬人化したりポケモンになったり出来るようになるわけ』

正直、僕は驚いていた。

あんなわけのわからない罰のプロセスがここまで解明されているなんて。

これ、科学技術でも可能になったら大事件だな……とか僕はついのもきなことを考えてしまった。まだまだブーケの解説は続く。

『そして、この人間の体を覆う力は、何かの条件を満たすことでだんだんと人間の内部に入って行く』

図の一部が消され新たに線が体内へとはいつて行く様子が描かれる。

『そうすると、ほら一部線におおわれていないところが出てくるでしょ？

ここがいわゆる“元の姿に戻った”部分ね』

「なるほど……」

僕が頷くとブーケはにっこりした。

『それでね、この内部に入った力は本人の意思でポケモンが擬人化をコントロールできるように自分で制御できるようになる。つまり、自分でポケモンに戻ることはできるようになるわ。実際、ツユクサも途中でポケモンになっては人間に戻ってを繰り返しているし。そして、この力は人間が死んでもポケモンにはその擬人化の力は残るの。』

一度切り離された以上、独立したものということになるのかしら』
長い説明だったが、僕はいろいろなことを知ることが出来た。
僕はブーケに頭を下げる。

「ありがとうございます。いろいろと教えてもらって……」
『あ、気にしないで。その代わり……』

けらけらと笑った顔が真剣な顔に変わる。

『バトルしましょう』
「は？」

驚く僕にブーケはその真剣な表情を崩すことなく言った。

『軽い特訓ぐらいだと思ってくれていいわ。できればあなたの手持ちも。』

あなたがどれくらいのレベルか自分達でも知っておきたいでしょうっ？』
「ハア……」

バトルについては割愛する。

というか、語りたくない。もういやだ。

だってブーケがタイプの相性がいいからって必要以上に僕をほこほこにしたんだから。

もっとも、意外なこともわかったけど。

『ブー』

『何よそのフワンデ…』

……ブーは意外と強かった。いくらエテぼつやミラと戦った後といえど

ブーケが吹き飛ばされて木に撃ちつけられるくらい。

第14話 罰の詳細（後書き）

今回は、罰についてももう少し詳しく解説した話です。

罰を克服したツユクサの手持ちだったブーケならもっと詳しく解説できるんじゃない？

と思ったので。

しばらくしたら新キャラおよびバトルです。

第15話 マサヤとクナイ

「おつきいね……」

「うん……」

ブーケに見送られてソノオタウンを出発してから数日たって。

「ここがコトブキタウンか……」

僕は今、擬人化したミラと一緒にコトブキテレビジョンの前にいた。え、なんでミラが擬人化しているのかって？ それは昨日のことなんだけど……

『私も擬人化したい！』

そう言っただけで急にボールから出てきたミラは、すでに擬人化した姿だった。

「どうしたの急に!？」

「だってまた街に行くのにこの前みたいにボールに入ったままじゃつまんない！」

もっとマークといろいろな所へ行きたいんだよ！」

「でも旅しているからいろんな所へ行くことになるから……」

「そうじゃなくて!もう、マークは鈍感なんだよ……」

とまあ、そんなことがあったわけです。でも、最後のミラの言葉は一体どういうことなんだろう……。その時、急にミラが僕の袖を引っ張った。

「ねえねえ、これなんて書いてあるの？」

当然、もとポケモンだったミラはあまり人間の文字を読むことが出来ない。

ましてや書くことなんてできない。そもそも、ミロカロスというポケモンに手はなかったのでミラは手で細かいことをすることが出来ないのだ。

「えーとね……」

“トレーナーズスクール体験授業実施中！”

あなたの来校をぜひ待っています。“だってさ”

トレーナーズスクールか……。

一応、僕はそんなに悪い成績ではなかった。ただ、僕はバトルがどちらかといえはあまりうまくないほうで、それは少し悔しかったというのもあるのだが……。

「ねえ行ってみようよー！」

「……」

ミラの目がすっごく輝いている。

くっ、それがとてもかわいらしくてとても嫌だとは言い切れない……

…。
しょうがないだろ、僕だって仮にも男なんだ。

「わかったよ……」

「ホント？ やったーっ！」

嬉しそうに言っただけでミラは僕の腕にギュッと抱きついてくる。

昨日ミラが擬人化してからずっとこれだ。（もっと前からだった気もするんだけど……）

まあそんなわけで、僕たちはトレーナーズスクールへと歩き出した。

「……そろそろ腕を放してくれないかな？」

「んー？ ダメ」

一方、トレーナーズスクールで。

「何をやってたのですかあなたは！！」

（ヒィ……）

一人の女性が男の子を怒鳴りつけていた。

「勝手に家を抜け出してトレーナーにバトルを挑んだくせにぼこぼこに負けるなんて……」。

恥を知りなさい！ 仮にも我がイリイ家において、学者となるには成績が良くないから

せめて立派なトレーナーになるようにと教育されている身なのに…

…」

説教を続ける女性をうんざりした顔で見る少年。

「姉ちゃん、でもあのお姉さんが強くて……げふっ!？」

言い訳をした少年に容赦ない正拳突きが女性から繰り出された。

「ここでは先生と呼べと言っているでしょう。」

それに、言い訳などもつてのほかよマサヤ」

「うう……ひどいよクナイ姉さ……先生」

ここで気付いた方がいるだろうか。

そう、この少年はかつて擬人化したミラにポケモンバトルを挑んで負けた少年、マサヤである。

そしてマサヤを怒鳴りつけていた女性はマサヤの姉、クナイ。

黒髪を長く伸ばす彼女は成績優秀の才女。

クナイはトレーナーズスクールの最終学年で学会に議論を巻き起すほどの論文を書き、

卒業後2、3年でトレーナーズスクールの教師になったのだ。

まさに、天才である。

「さて、ではこの辺で小言は終えて、授業の続きを……」

「すみませーん」

その時、トレーナーズスクールの教室に入ってきた者たちがいた。聞こえてきた声にマサヤがハツとして顔をあげる。

「あの、体験授業というものはここですか？」

ひょこつと顔を見せたのはミラ。

「あーっ！」

思わずミラを指さして大声をあげたマサヤに

「なんですか急に！」

「あの人だよ！僕がバトルしたのは！！！」

最初は再びこぶしを握ったクナイだったがマサヤの言葉にその手が止まる。

「？」

何が何だかわかっていない様子のミラ。

（あんな、頭の悪そうな子に……イリイ家の名が汚されたのですか！）

「ねえ、あの人どうしたのかな？」

「さあ……」

一方で、マサヤはミラの隣にいたマーキュリーの存在に気付く。

（な、なんだよあいつ。お姉さんと……腕組んでやがる！！）

ここへ来るまでに何度マーキュリーが腕をふりほどこうと努力したのか彼は全く知らない。

しかし、イリイ家の姉弟は共に怒りの炎が目に宿った。

（許さん！！！！）

僕たちが教室に入ったとたん、先生らしき女性とその前にいた少年がものすごい形相でこっちをにらんでいた。そういえば、あの少年どこかで会ったような……。その時、ずんずんとまず女性のほうが近付いてきた。

「こんにちはは、私はここの教師のクナイといいます。体験授業を希望されますか？」

「は、はい」

口調は丁寧だが、目が全く笑っていない。

勢いに押されミラがやや引くなか、クナイは続けた。

「ではまず、試験を受けてもらいます。こちらへ……」

「あ、ちょっと待ってください」

クナイが手で示す方には机と筆記用具が乗っていた。

だから僕は思わず呼びとめた。

ミラはもとポケモンだったのだ、まして細かいことが手でできないから

筆記試験なんて到底無理だ。

そのことを少しぼかして、「事情は言えないが彼女は字が書けない」と伝えると

クナイは少し考えた後こう言った。

「では、別室で口頭試問を受けてもらいましょう」

そして横にいたやはり先生らしき男性2名を呼び寄せ、持っていた教科書を開いて問題の指示をする。

でも、なんであるの二人はとても驚いた顔をしているんだろう……？

「じゃあ、がんばるねー！」

ミラがマーキュリーに手を振って試験官の二人についていく。その様子を見ながらクナイは内心でほくそ笑んでいた。

（そううまくはいかないわ……。彼らには特別に難しい部分を問題に出すよう

指示しておいたから、彼女がいい成績をとれるはずがない。

イリイ家の名に泥を塗った罪、思い知るがいい！）

なんともずるいことを考えていたものだ。

「あー、終わった終わった」

晴れやかな顔をして部屋に戻ってきたミラ。

しかし、試験官の二人がやや困った顔でクナイを手で呼んだ。

クナイが試験官達と廊下に出たのを見て、僕はミラに話しかけた。

「どうだった？」

「うーん、一応答えるには答えたんだけど……少し言い過ぎたかな、人間が出した問題だっていうのを忘れてさ。」

舌を出して困った表情を浮かべるミラに僕はにっこりとほほ笑んだ。

「それにしても、どうしたのかな？」

僕は廊下の方を見ていった。

「何が？」

「さっきクナイっていう人が呼ばれたでしょ？何かあったのかなーって。」

「わかんない。何だろうね？」

そう言って肩をすくめるミラだったのだが。

実は、確かに“何か”あったのだ。

それを知ったのは後になってからだった……。

第15話 マサヤとクナイ（後書き）

マサヤとのバトルは第7話をどうぞ。
そして次から、波乱の展開です

第16話 結婚しなさい！

廊下にて。

試験官に呼び出されたクナイはやや不満げな顔で廊下にいた。しかし、対する試験官は真つ青な顔をしていた。

「一体なんですか？」

クナイの問いに試験官の一人が真つ青な顔のまま口を開いた。

「……先ほど、あの女の子に口頭試問をしました。

あなたの指示通り、テンガン山に生息するポケモンやその生態、およびその分布について

出題しました」

実はこの問題、かなり難問とっていい。

もともとテンガン山というのは山であるため人間が立ち入って調査が出来ないところも数多くある。

また、ジバコイルやダイノーズの例のように

テンガン山には少々特殊な、進化に影響する磁場が確認されており通常の場所での常識でこの問題を解いては間違ってしまうのだ。

それをわかっていた上で出題させたクナイはにんまりと笑う。

「そうですか。それで結果は？」

やはり、口に出せないほど悲惨な結果でしたか？」

「いえ」

試験官の答えは

「……満点、と言わざるをえません」

その瞬間、クナイの笑顔が凍りついた。

「何ですって……」

クナイの顔色が段々と青ざめていく。

そんな状態のクナイに試験官は答案を見せた。

「腕のいい書記官に筆記してもらったものです。

出題していて驚いたのですが、彼女はテンガン山に生息するポケモンの種類はもちろん、

その数まで言いました。確認をとると、最新の情報とは少しずつれているもののそれは2、3年前の資料です。

近年の傾向から考えると、今現在の数は彼女が言った通りになるだろうということですよ」

「な……」

渡された紙をめくりながらクナイは絶句する。

紙をめくればめくるほどその答案の多さに驚かされる。

しかも

「ちよつと、こんな生態ゴローンにあるの？」

「……実はあるんです。見ての通り、一般人はおるか我々学者でも知らないような生態まで彼女は事細かく話しました。特に……」

そう言って試験官はクナイがもつ紙のうち1枚を指さす。

「ここに書かれたヒンバスの生態についてなのですが。

知ってのとおり、ヒンバスは大変捕獲はおるか遭遇が極めて難しい

種類で

そのため生態などの研究は他の種類に比べて劣っています。

しかし、彼女は学会で知られていることはもちろん国に一人知っている人物がいるかどうか……ということまで知っていました」

「なんてこと……」

試験官が示した紙には、彼の言うとおりヒンバスの生態について事細かくぎっしりと書かれていた。

仮にも学会にこれを提出したら、大論争が起こりかねないという内容が。

「まるでずっと一緒に暮らしていたというようなレベルよ……。そんな、バカな……」

ミラはもともミロカロス。

ヒンバスの生態についてはっきり知っていてもおかしくはないのだがそんなことを彼らが知るわけがない。

「……お分かりいただけましたか」
「……………」

この瞬間、彼女にある考えが浮かんだ。

(……………あ)

思い立った次の瞬間には、再び教室へと走り出していた……。

Bannon! !

勢いよくドアが開かれた音に、教室にいた全員が音のした方を見る。ドアを開けはなったクナイはつかつかとミラに近寄り

「……………」

「え？あれ？なんですか？」

じーっとミラの顔を見つめる。

やがて一つため息をつくときクナイはマサヤを見た。

「マサヤ」

「はいっ！！」

何度も何度も怒られてきたため、クナイに名前を呼ばれるとマサヤはビシッと背筋を伸ばして返事をした。

「あなた、この女の子のこと、気に入ったって言ってたわよね……………」

予想外の姉の問いにマサヤは首をひねる。

「気に入ったってどうか……………きれいだし、かわいいし」

「そう……………なら！」

ここでクナイがミラに指を突き付けた。

「あなた！マサヤと結婚しなさい！！」

……は？

「ちょっと待て、どうしてそうなるんだよ！！」

僕は思わず抗議した。

そりゃそうだ、ミラはもともとポケモンなんだし僕のパートナーなんだし
結婚されちゃ困る！

「えーと、何ですか？」

事の重大さがいまいち理解できていないミラにクナイがたたみかける。

「あなたの解答を見たわ。……文句のつけようがない、完璧な解答よ。」

そんな頭脳を持つあなたなら、我がイリイ家に嫁ぐ資格があるわ。
いや、むしろ！学者を数多く輩出するこのクナイ家の、新たな有能な学者になりなさい！！」

ミラはまだ何が何だか分からずポカーンとしている。
まるで世間知らずのお嬢様じゃないか……。

「異論はないわね？」

「あるに決まってるでしょおがぁ!!」

僕は大声を張り上げる。

何だこの人、強引にもほどがある。

しかし、相手のほうも僕のことを疎ましいようだ。

見定めるような視線を向けると、こんなことを言い出した。

「あなた、顔を隠しているなんて不審な人ね。

まあいいわ、そんなに不満があるのなら、ここはひとつポケモンバトルで決めましょう?」

「ポケモンバトルだって……?」

僕の呟きにクナイは頷く。

「そうね、3対3でいいかしら。

私が勝ったら、その子はマサヤの嫁にするわよ。あなたには諦めてもらいます」

何をあきらめろっていうんだ……一緒に旅をすることをか? いや、ちよつと待て……

「そもそも、そんな勝負僕が乗る必要ないじゃないか。

君が勝ったらそりゃあ君にメリットがあるだろうけど僕が勝ったところでそんなものはない。ただの現状維持だ。だったら、そんなにスクなんて犯す必要ないだろう?」

「くっ……」

ここでクナイが唇をかむ。

どうやら、それもわかった上でのことだったようだ。

強引さだけじゃなくずる賢さまであるのかこの人は……。

「だったら、」

クナイが悔しそうに条件を持ち出した。

「私の家は学者一家だし、親は大学教授よ。

他にもまだまだいろいろんなパイプがある。だから、あなたが勝ったら何かあなたが知りたいこと、調べたいことを私達が全力で調べあげてその情報をあなたに提供することを約束するわ」

「それだけ？」

僕はあえてそこで冷たい視線を送る。

実は僕には、ギンガ団の時の経験からこういう駆け引きの時、相手が自分をうなずかせたいときは多少の条件は認めるということを知っていたのだ。

そして、それはどうやら今回のことにも当てはまったらしい。

「……一回とは言わないわ。あなたが何か調査依頼をするたび、より上質で手に入りにくいような情報まで調べて渡す……それならどう？」

悪くはないんだけどな……。

でも、万が一のことを考えるとここはやっぱり……

「その勝負、乗ったあー!!」

やっぱり……は？

僕は慌てて声のした横を見る。

そこではミラが得意そうな顔で立っていた。

「マークにあなたなんか負けるわけないんだから！」
「ミラー!!」

冗談じゃない。

僕はミラに撤回させようとした。

「ミラ、こんな条件のバトルなんて……」
「うっん、これはあなたの為なの」
「え？」

いつになく真剣な目をしたミラとその言葉に僕は驚いた。

「あの人の条件をのんで勝ったら……ツクサとか罰のことについて詳しいことが分かる。
そしたらマークが早く元の姿に戻れるでしょ？
それに、私は平気だよ。マークを信じているから」

……

僕は何も言えなかった。

何も言えない僕の代わりに、ミラがクナイと向き合った。

「私たちが、勝つから」
「そう……」

クナイはにっこりと笑う。

「勝負は明日の午後4時。楽しみにしているわ」

第16話 結婚しなさい！（後書き）

そして次回、バトルです。

第17話 勝負

翌日。

イリイ家の地下にある道場で、気合のこもった声が響いていた。

「せいっ！はあっ！！」

ポケモンたちと共に汗を流しているのはクナイだった。

やがていつもの朝の稽古が終わると、クナイは自分の手持ちであるポケモンたちを一行に並ばせた。

「今日は大事な日よ。何が何でも勝っ！いいわね！」

<オス！>

ひととき大きな声で返事したのはルカリオだ。

ルカリオは波導によって人と会話することが出来る珍しいポケモンだ。

「ルカリオ、あなたは大将よ。念には念を備えて一番最後に出てもらうわ。」

だから……決して気を抜かないように」

<オス！>

すると、気合を入れたクナイ達のもとに一人の女性が来た。

「あらあら、相変わらず気合が入っていますね」

「そう？ツツジ」

そこにいたのはホウエン地方のカナズミジムリーダーのツツジ。

実はクナイとツツジは一時期同級生だったのだ。

「あなたのポケモンは本当に心まで鍛えられていますね……。今日はジムリーダー試験に向けての練習試合ですか？」

「それだけではないのだけれど……その意味合いもあるわね」

クナイは現在ツツジと同じようにジムリーダーになるのが目標だ。そしてクナイは格闘タイプのエキスパートのジムリーダーを目指している。

もつとも、このシンオウ地方にはすでにスモモがいるのでもし試験に合格すればスモモと交代するか別の地方でジムリーダーをすることになる。

「今日は誰と対戦するのですか？」

「……弟のマサヤと結婚させる女性と一緒にいる男よ」

そう答えるクナイの目には気合が入っていた。

(この気合と、そしてバトルにおける頭脳……)。

今までのトウキなどの格闘タイプのジムリーダーの方々とは、一味違うタイプですね)

ツツジは冷静に友人の力を分析する。

「さて、試合は午後……」。

休憩がてらに作戦会議といきましょうか」

「そうですね」

二人は道場を出ると相手が出すポケモンの予測、および対策をじっくりと話し始めた……。

ちなみにその頃、マーキュリーたちはあまり何もしていなかった。余裕だというわけではない。下手に修業をしてバトルで本調子が出せなくては意味がないという考えからだ。だから、ウォーミングアップ程度しかしなかった。

そして、あっという間に時は過ぎ、とうとう試合時間を迎える。

「これより、クナイ対マーキュリーのポケモンバトルを行う！」

使用ポケモンは3体、交代は原則戦闘不能になるまで不可とする！」

審判をするのはツツジ。

フィールドはトレーナーズスクールの横にある空き地だ。

自信満々に腕を組んで立つクナイと、少し緊張した顔で立つミラ、およびその横にいた僕がフィールドの端と端で対峙する。

「試合……開始……！」

「先鋒はあなたよ、カポエラー！」

「エテぼう、スタート！」

最初のポケモンはクナイがカポエラー、僕がエテぼう、つまりエイ

パムだ。

「こうそくスピン！」

『カアポ！』

クナイの指示でカポエラーが頭の突起を軸に猛回転を始める。僕もエテぼうに指示をした。

「エテぼう、こうそくいどう！」

エテぼうは力を抜くと一気にスピードをあげる。そこへ回転を続けるカポエラーが突進してきた。

「一気に決めなさい！」

「エテぼう、かわして！」

少し距離があったので、エテぼうはその速さで回避する。

「そのまま“地面に”スピードスター！」

『うりゃあっ！』

もちろん、この指示には狙いがあった。

エテぼうはスピードスターを、カポエラーの回転の軸の辺りの地面を狙って放つ。

攻撃により地面が不安定になった上に一発が直接カポエラーにあたり

『カポツ……………』

カポエラーはバランスを崩し、その回転がなくなる。

そこに向かって……………

「でんごうせつか!」
『うりゃああっ!』

早さで威力を多少強めた攻撃は見事カポエラーに命中する。
しかし。

そこでクナイはにやりと笑ったのだ……。

「カポエラー、蹴りあげなさい!」
「えっ!?!」

横でミラが驚いた声をあげる。
僕だって驚いた。

『カポ!』
『わあっ!』

空中に蹴り上げられるエテぼう。
クナイの笑みはまだ残っている。
マズイ!

「エテぼう!“用心しろ”!」
「もらったわ……そのままスピンしてトリプルキック×3!」

はあ!?!?

カポエラーは回転し始めると地面を蹴った勢いでエテぼうのところまでジャンプし

『カポカポカポカポカポカポカポカポカポカポカ！！』
『うーうーうー！！』

エテぼうになんと合計9発もの蹴りを入れた。
そして10発目にエテぼうを地面にたたきつけた。

『う、ううん……』
「エイパム、戦闘不能！」

ここでツツジが手をあげて宣言した。
僕はエテぼうをボールに戻す。

「指示通りにしてくれてありがとう”。ゆっくり休んで

そして次に僕が出したのは……

「スタート！」
『フー』

フワンテのフーだ。

クナイは少し眉を寄せると次の指示をした。

「ゴーストタイプ……。ならばジャイロボールよ！」
『カポ……』
「え？」

指示を出したものの、カポエラーの動きが弱まっていることに気がつ

いて
クナイは初めてその余裕そうな表情が消えた。
もちろん、僕の作戦通りだ。

「一撃で決めよう！しっぺがえし！」
『フー！』

あくタイプの技なので効果はいまひとつだ。
でも……

『カポ！？』

ジャイロボールを仕掛けたカポエラーは逆に弾き飛ばされ、目を回してしまった。

「カポエラー、戦闘不能！」

ツツジがさつきとは逆の手をあげた。
クナイはというと驚いた顔で呟いた。

「確かに、しっぺ返しは相手が先に技を出すと威力が倍になる……。でも、効果はいまひとつだしそもそもどうしてあんなに早く体力が……」

「さつき、僕がエテぼくに“用心しろ”って言ったでしょ」

僕はここで種明かしをした。

「あれは合図さ。エテぼくに“どくどく”を使えっていう、ね」
「そういうことだったの……」

カポエラーが迫ったあの瞬間、エテぼうはどくどくを使った。しかしカポエラーにはトリプルキックを3回という指示が出ていたから、

その分どくどくがカポエラーの体力をむしばんでいたのだ。

この段階で残り2対2、勝負はまだ分からない。

「意外とやるわね……あなた」

「まあね」

「だから言ったじゃない！マークは強いって！」

ミラも元気そうに言い返す。

さあ……あと2体！

第17話 勝負（後書き）

まだまだバトルは続きます。

うまく書けているといいのですが……

第18話 負けられない

現在、僕がフリーを場に出した状態で2対2。
数の上では対等だ。

クナイが、2体目のポケモンを場に出す。

「中堅は……ニョロボン！」

「大きいのが来たね……」

ミラが心配したとおり、フワんテのフリーと比べ相手のニョロボンは明らかに大きかった。

だが、こんなのは僕は全く心配していない。

「ニョロボン、水はどう！」

ニョロボンが水で作られた波導を放つが、フリーは軽々とよける。
しかし、その間にクイナは次の手を打つ。

「ビルドアップです！」

ニョロボンが力を入れると、少しニョロボンの筋肉が強化される。
攻撃と防御が上がった……。

フリーのしつぺ返しを警戒しつつ攻撃に出るための一手だ。
僕もフリーに指示を出す。

「フリー！相手の攻撃に注意しろ！」

「それも何かの合図かしら？」

ニョロボン、一度心の目ですー！」

こころのめ。

次に使う技を絶対にあてる技……。

「来るぞ、フー！」

「ハイドロポンプ！」

ニヨロボンから放たれる大量の水。

……いいなあ、この前僕がやった時は威力不足だったから。なんて、そんなのんきに考えてる場合じゃない！

『フー！』

しっかりとダメージを与える戦術で来たのだろう、命中率がやや低いが威力のある

ハイドロポンプを心の目で確実にあてられた。

これは、もう出し惜しみしている場合じゃないな。

「フー、飛んで！」

「逃がしてはなりません！飛ぶ勢いでたきのぼりです！」

くっ、特殊の次は物理技……だが！

「もらった！」

「何ですって！」

僕のガッツポーズにまたしても顔色を変えるクナイ。

「フー、おどろかす！」

「えっ！？」

僕の指示を受けフリーはいきなり向きを変えてニヨロボンの目の前に急接近した。

『フリー!!』

『ボオ!?!』

驚いて手が止まるニヨロボン。

そのまま重力でニヨロボンの体は下へと動き始める。

……そう、僕はこれを待っていたのだ。

「フリー、そこから下にかぜおこしでたたきつけるオ!」

『フリー!!』

フリーが腕を動かすとそこに風が作り出される。

その風をフリーは下のニヨロボンに向かって放った。

『ボオオ!!』

「な、かぜおこしでしょ!?!」

ドオオン!!

大きな音と共にニヨロボンが地面にたたきつけられる。

「ニヨロボン、戦闘不能!」

「やったあ!」

僕の横でミラが喝采をあげる。

「もともと格闘タイプで攻撃が高いニヨロボンだ、絶対にたきのぼりを覚えさせていると思ったんだ。だからいかにもたきのぼりが使

えそうな状況を作ろうとフーを上を飛ばせた。

……ニヨロボンが空中に飛ぶためにね」

「……」

僕の言葉をクナイはじつと聞いていた。

なんか、僕って意外とお喋りだな。まあいいか。

「あとは、勢いを失って落ちていくニヨロボンにかぜおこしをたたきこめばいい。

落ちていく方向と同じだから、落ちていく勢いもかぜおこしの威力にプラスされる。

しかも、フーはかぜおこしの威力が異様に高いんだ」

これは、ブーケと戦ったときに気付いた（というか気付かされた）ことだ。

だってブーケを木にたたきつけるほどだったからね。

一方、審判をしていたツツジはマーキュリーの話聞いて考え込んでいた。

（あの人、技をただ出すのではなくより有効的に使おうとしている……。

見た目は怪しいですが戦術がすごいですね。しかも、今のポケモンはゴーストタイプに飛行タイプを兼ね備えたフワンテ。格闘タイプを使うクナイにとっては難儀な相手……）

しかし、心配したのはそこまで。
なぜかというと、クナイの最後のポケモンはツツジにはわかりきっていたのだ。

「大将。あなたに任せましたよ……ルカリオ！」

ルカリオか……。
僕は少し考える。

ルカリオは鋼タイプも持つうえ、技が多彩で何が起こるかわからない。
そんなことを考えていた時だった。

「ルカリオ。まずはそのフワんテをすぐ倒しなさい」
<オス！>

ルカリオは瞬時にフーの側面へ移動した。

『フー！？』

これにはフーも仰天したようで、そこからボーンラッシュをまともに受けてしまった。

「ルカリオ！一度距離をとって決めなさい！」
『フー！』

ルカリオが後ろにジャンプしたのを見てフーは距離を詰めようとし

たが……。

「離れて！フー！」

「あくのはどう！」

ルカリオから真っ黒な波導が放たれると、フーはもろにその攻撃を受けてしまった。

瞬間、その体が爆発する。

「特性ゆうばく。やはり、距離をとって正解でしたね。

いい技のタイミングでしたよ、ルカリオ」

<ハツ！>

「フワンテ、戦闘不能！」

仕方ない、次だ……。

そう思った瞬間、僕は最悪のことに気がついた。

……ミラは、擬人化している。

この勝負はミラの運命を決めるため、ミラを欠席扱いするわけにはいかないから

ミラには擬人化して出席してもらった。

つまり……残りの手持ちが、いない。

(しまった……)

ここでミラにポケモンに戻ってもらわなければいけない。

そんなことをしたらとんでもない騒ぎになってしまう。

もちろん、それは僕がゴルダックとしてフィールドに出ても同じだ。

(どうすればいいんだ、どうすれば……)

これがばれたら、確実にクナイは僕に不戦敗を言い渡す。
そうなってしまったら、ミラが……。
僕は横にいるミラをちらりと見た。

「？」

首を傾げて僕を見るミラ。

そんなミラを見てますます焦りが募る。

駄目だ。

失うわけにはいかない。

大事な仲間を……ミラを……

失うわけにはいかない……。

負けるわけには、いかない……！

ドクン。

その時、僕の胸に不思議な鼓動が感じられた。

<……お前は、俺を忘れたのか？>

ドクン。

声がある。

僕の中の禍々しい鼓動と共に。

<俺はしばらく自由に過ごした。そろそろお前の役に立たなくてはならない>

腰に手を当てると、すぐにそのボールが手にあたった。

「何をしているのですか？まさか、ここでルカリオに勝つのをあきらめ降参でもしますか？」

「そんなわけないだろ。むしろ、あきらめるのはそつちだ」「な……んですって！」

いいかげんじれてきたクナイの前で、僕は腰からボールを外しゆっくりと腕をあげる。

「プライドが強そうなあなただ。圧倒的に勝たなきゃならない」

そこまでしないと、ミラのことをあきらめはしないだろう。下手をすると、バトルのやり直しまでねじ込んできそうだ。

「だから、これで決める……。」

審判、見えないかもしれないけど……先に言っておきます」「は、はあ……」

審判であるツツジも不思議そうに首をかしげた。

<準備はいいぞ。あのルカリオぐらいなら……>

その声が、僕の声と重なる。

……“ 3秒だ”

「出でよ！ギルティ！！」

僕が叫んだその瞬間……。

目の前の地面が円状に真っ黒になり、そこから真っ赤な目をした影が現れた。

第18話 負けられない(後書き)

お久しぶりです。

こつも早くギルティを使うことになるとは……
でも、基本めつたに出ないのでまあいいか、と思っています。
バトルも次の話で完全に終わります。

第19話 圧倒的な勝利

1

「な!？」

「あれは……ポケモン？」

2

その影は一瞬で消える。

<消えた……?>

「何……?」

3。

<ぐおおおおおおおおおおおおおお!!>

ルカリオの悲鳴と共に、どこからともなく現れた影はルカリオに突撃し、そのまま消えてしまった。
そのまま地面に倒れるルカリオ。

……

その場にいた誰も、何も言えなかった。
最初に沈黙を破ったのは、審判であるツツジだった。

「る、ルカリオ、戦闘不能……。
よって、勝者は……マキユリーです」

ツツジも今自分が見た光景が信じられないのだろう、声が震えていた。

「やった」

ミラが呟く。

「やった……勝ったああー！！！！」

疲れて座り込んでしまった僕をよそにミラは大騒ぎして……ボロボロと泣き出した。

「ちょ、ちょっとミラー!？」

「うう、よかった……。マークと離れずに済んで……よかったよお
う……う」

まだ泣き続けるミラの頭を僕はなでてやる。

「……僕も、よかった。ミラを失わずに済んで」

「うう……うう」

ミラは顔をあげてマーキュリーの顔を見た。

「えっ」

その時、ミラの目に映ったのはいつも見慣れたゴルダックのマークユリーではなかった。

マフラーで口元を覆っているのではっきりとは分からなかったが……いつもと違い、肌が青ではない。

しかも、帽子からは水色の髪がこぼれ出ているように見えた。

「どうしたの？」

「え？あ、実は……あれ？」

首を傾げるマークユリーだが、ミラが一度瞬きをしたとたんその顔は元に戻っていた。

「どうしたのかな？」

ミラはさっきから急に奥の顔を見ては首をかしげてを繰り返している。

聞いてみても教えてくれないし。

そこへクナイがマサヤとツツジと共にやってきた。

「……私の完敗です。しかし、最後のあのポケモンは何だったのですか？」

「そうですね、私も知りたいです」

クナイとツツジが僕に尋ねたが僕は首を振った。

「教えることはできません。あいつは厳密には今手持ちというわけではないので……」

ただ、前は確かに手持ちだったし完全に逃がしたというわけではありません」

「それは……あんまり私の知りたい情報じゃないわね」

情報？

クナイがあきれた顔をしていたが僕はその言葉から今回の戦いの条件を思い出した。

「そうだ、さっそく調べてもらいたいことがあるんだけど」

「うっ……は、早いわね」

顔をゆがめるクナイだが、もともと相手がちだした条件だ。正直なところ罪悪感なんてかけらもない。

「ツユクサというトレーナーについて調べてほしい」

僕の言葉にクナイはますます怪訝な表情になった。

「わかりました……」。

「一応確認しますが、その情報、何に使うつもりですか？」

個人のプライバシーを調べることになるのだ、聞くのは当然だろう。とはいえ罰とか本当のことを洗いざらい話すわけにはいかない。

「その人に……聞きたいことがあるんです。」

そして、その人は今まで何をしてきたのか知りたいんです」

「そう……まあ、詳細までは聞かないわ。」

調査結果はしばらくしないと出ないから……どうすればいい？」

そこで僕はアドレスを教えた。

「このアドレスにデータを送ってください。そうすればパソコンを使ってみることが出来ますから」

「わかったわ」

「あと、あなたの連絡先も……」。

他にも何か知りたいことが出たら調べてもらうので

「うぐ……結構人使いあいわね、あなた」

「バトルの勝利による順当な報酬です」

こうして僕は便利な情報ルートを手に入れた。

「ちょっと、何その言い方!!」

クナイが何か言っているが、無視。

第19話 圧倒的な勝利（後書き）

これでVSクナイは終了です。

そしてぼちぼち、「敵」も出現させていく予定です。

第20話 次なる目的地と久しぶりの旧友

とりあえず、今日でコトブキシティを出ることにした。

「それじゃ、調査のほうよろしくお願いします」

「わかったわ……。まあ、気長に待っていなさい」

クナイの言葉に僕は頷く。

「行こ、マーク！」

「うん！」

マサヤやクナイ、ツツジ達に手を振ると、僕たちは町を出た。

次に目指すは……クロガネシティだ。

道中、ミラにはポケモンに戻ってもらい、ボールの中に入れる。

「えー、なんでー！」

「今回みたいにまたトラブルになったら困るでしょ？」

少しの間だから我慢して……」

最初は渋っていたミラだったが自分のわがままで今回のような事態に再びなって

苦勞をかけるわけにはいかないと思ったらしく、おとなしく戻ってくれた。

その代わりに、肩にはエイパムの姿のエテぼうがいます。

『どうしてクロガネシティなの？』

エテぼうの問いに僕は優しく答えた。

「クロガネシティにある炭鉱博物館では、化石の研究もおこなわれているんだ。

だから、こいつを復元してもらおうと思ったんだ」

そう言ってカバンからちらっと出したのはギンガハクタイビルの僕の引き出しから取り出したもののうちのひとつ。

『それ、化石だったの！？』

「そうだよ。まあ、僕には詳しくわかんないんだけどこれをくれた人がそうだと聞いたからさ。信頼できる人だし」

そこで僕は思いだした。

「そういえば、カルマとはずいぶんあってないな」

『カルマ？』

「この化石をくれた人さ。あいつはこんな化石になってしまったポケモンには興味がない。

自然の中で今現在活動しているポケモンに闘志を燃やすからね」

だからこそ、こんな珍しいものを僕にくれたんだ。

しかし、どんなポケモンかにもよるけどこれで僕の手持ちはギルティを含めると5体になる。

ううん、今のところ極端に偏っているってわけでもないけど

最後の1体は慎重に選ばないとなあ……。

『そういえば、クロガネゲートっていう洞窟を通るんだよね？』
「うっ……」

忘れてた。

いや、待てよ……

「そういえば、カルマって今どこにいるのかな？」

『なんで？』

「カルマは凄腕の捕獲専門家なんだよ。」

それこそバトルフロンティアとかポケモン協会とかのいわゆる公式な機関から依頼されるくらいだね。

だからあっちこっちシンオウ中を飛び回ってさ。

今、連絡取れるかな……？」

僕はバッグをこそそそと探るとポケギアを取り出した。

『マークそんなの持ってたっけ？』

持ってたんだなーこれが。

ただ……

「改造してあるやつだから、公的には禁止されているものなんだ。

だから普通のポケギアと電話したりラジオを聞いたりはできない」

『何だ、結構不便だねー。っていうか、そんな非合法なもの使っちゃいけません』

「しょうがないでしょ、裏を返すと“改造ポケギアと通話するには改造ポケギアを使うしかない”んだよ」

そうやって僕は登録された番号の中から「カルマ」という欄を選ぶ。

ピーピーピー　ピーピーピー

『変な呼びだし音だね』

「改造する前はまともだったんだけど……なんでかな？」

そんなことを話していると相手が電話に出た。

<こちらはPC対応センターです。現在申し訳ありませんが営業は中止しており

電話のみの対応となっております。ご用件は何でしょうか？>

この言葉で、何も知らない人がかけたら番号を間違えたと思うだろう。

しかし、このことはあらかじめ知っている。

「社長さんをお願いします」

<現在は退職されておりますが伝言は承ります。どちらさまでしょうか？>

「マーキュリーだよ。……改造ポケギアならこんな面倒なことをする必要はあるの？」

そのとたん、声のトーンと口調が一気に変化した。

<何やマーキュリーか？ひっさしぶりやなあ元気しottaか？

最後に会ったのはもう3ヶ月くらい前やったかな>

「それよりもっと前だった気がするけど」

<そうか？>

「たぶんね。それより、何だよPC対応センターって。

ポケモンセンター対応センター？」

< ちやうがな、ポケモンキャッチャー対応センターに決まるとるやん。

まだバリバリの現役やで？>

「相変わらずだなーカルマは」

しばらくの間僕たちは会話に花を咲かせていたがそこにエテぼうがちよんちよんと

尻尾で僕をつつく。

『ねえ、結局何で電話したの？』

そうだった。

僕は会話をそこそこで切り上げて本題に入った。

「本題に入るけど、今カルマどこにいる？

できれば、クログネシティにクログネゲート通らずにはいりたくてさ……。

僕は今コトブキシティからクログネシティへの途中の道にいるんだけど」

< ウチ？ウチはなあ……>

帰ってきた返答は

< あんたの目の前や>

「は？」

間抜けな声をあげた次の瞬間

「ばあっ！」

「うわあっ！！？」

何もなかったはずの目の前に、急にカルマが現れていた。

第20話 次なる目的地と久しぶりの旧友（後書き）

カルマは、マーキュリーが秘密を話せるほど信頼している人間はいないかと

思っただけ考えたキャラです。

二人がどう関係かは、次話で……

第21話 捕獲専門家、カルマ

「まあ飲みいや」

「ああ、ありがとう」

ここはクロガネシティにあるカルマのアジト。

カルマのポケモンに乗って飛んで来たんだけど、さすがにアジトっていういい方はどうかなあ……？

まあ本人がいいならそれでいいけどさ。

僕は差し出された飲み物を受け取るとマフラーを少しずらして飲んだ。

その様子をカルマはあくびをしながら見ていた。

「それにしても驚いたよ、まさかいきなり現れるなんて」

「せやろ？あんなことができたのもこいつのおかげなんや」

赤い帽子から茶髪が見えるカルマは、今は真っ黒なバイクスーツを着ていた。

そしてカルマは横にいた1体のポケモンをなでる。

『ゾロツ』

「ええ子やええ子や」

カルマがデレ顔でなでているのはゾロアーク。

何でも、この前仕事で行ってきたイツシュ地方で偶然であったらしい。

で、そのゾロアークの幻影を見せる能力に虜になったらしい。

「あいかわらずそついつの好きだよな……」

「ん？何がや？」

「いや、お前のポケモンは大きく二つに分類できる」

一つは、仕事用。

こいつはいろんな所をとびまわるポケモン捕獲家だから
空を飛ぶを覚えていたり相手を眠らせたりするポケモンなんか
これにあたる。

そしてもう一つというのが……

「相手を、騙すポケモン」

「あッ、やっぱばれとったか……」

そう言っただけへと苦笑いするカルマ。

「やっぱり、これは止められへんで」

「ほどほどにしとけよ。……あんまりやってたら、昔のお前の手口
と同一だと」

誰かが気づくかもしれない」

「……ウチは、そんなに愚かじゃあらへん」

そう言っただけカルマは帽子をとった。

『あッ……』

エテぼうが驚いた声をあげた。

何故なら、帽子の下からふあさつと長い茶髪がこぼれおちたからだ。

『カルマって……マルカだったの！？』

マルカ知ってたんだっただけ気づけよ、おい。

名前逆さまにただけじゃないか。

「そのエイパム、まだ進化してないんだね。
マーキュリーの実力だったら、もう進化してもおかしくないと思う
んだけどなあ」

「そうなんだけどさ」

カルマ……いや、マルカはすでに昔の口調に戻っている。
ミラそっくりの、口調に。

「じゃあそろそろ教えてくれないかな？

なにかあったんでしょ？それも、人に言えない何かが、さ」

「えっ……」

絶句した僕の前に座ってマルカは言った。

「わかるよ。これでも、あなたとは一番親しい人間だと自負してま
すから」

「かなわないなあ……」

仕方ない。

そう思った僕は一気に帽子とマフラーをとった。

「……あれ？」

マルカは一度首をかしげて

「えええええええええええええええええええええええええええええええつ!!」

実に自然な反応をしてくれた。

「散々だったね」

「まっただ」

全ての話を聞かせた僕は少し疲れた顔でそう言った。

そして今、僕の前には擬人化したミラとエテぼう（ついでにいつものままでフー）がいる。

話に信憑性を持たせるため、実際に擬人化してもらったのだ。

「でも、姿が変わったこと以外は正直うらやましいな」

「はあっ!？」

思わず僕は飛び起きた。

こんなことが、うらやましいだっ!？」

「なんで!かなり困ったのに……」

「そうかなあ?でもさ、自分のポケモンと話せるなんていいことだとは思わない?」

横では擬人化したミラとエテぼうがじつと僕を見ている。

うむむむむむむ……

マルカはゾロアークをなでながら続けた。

「私だって、この子の声を聞いてみたい。話してみたい。

それがあなたにはできるんだよ?贅沢だと思いなさい」

こんなマイナスのような罰に、プラスを見出す……。
やっぱり、こいつは変わってない。

「仕方がないやつだな。まったく……」
「まあね」

そういうとマルカは脱いでいた帽子をかぶって元のボーイッシュな姿に戻った。

そう、捕獲専門家、カルマに。

「とにかく、ウチは昔のことがばれるようなドジは踏まんで。安心せえや」

そういうと僕を振りかえる。

「さ、あんたにも何かやることがあるんじゃないか？」
「ああ。ありがとう」

そういうと僕はカルマに見送られてアジトを後にした。

「行っちゃった、か」

マーキュリーを見送った後カルマは再び帽子を脱いで壁に寄りかかって座る。

『ゾロ?』

「ううん、なんでもないんだ。でも、嬉しいじゃん」

膝を抱いて顔をうずめる。

「好きな人に秘密を教えてもらえるほど頼られたら、さあ……」
『ゾロオ……』

「ねえねえマーク」
「何？」

せっかくだからとエテぼうもミラも擬人化したままで歩いていると
ミラが聞いてきた。

「マルカさんって、どういう人なの？」

そこで“カルマ”じゃなくて“マルカ”と来たか……。
しょうがない、話しておくか。

「あいつは……元カノだ」
「はあっ!？」

ミラの顔から血の気が引いたが、なぜ？

「いつ!いつ付き合ってたの!」
「いつって、僕たちがギンガ団の時からだけど」
「ふーん……って“僕たち”？」

エテぼつはすでに知っているのにやにや笑いを浮かべている。
僕はゆっくりと、息を吐き出すように咳いた。

「あいつも……マルカも……ギンガ団だったんだ」

第21話 捕獲専門家、カルマ（後書き）

……正直に言います。

当初、マルカなる人物は存在せず、カルマはあくまで友人でした。

なんでこんなことになったのか……まあ面白いのですが。
次は、博物館でひと悶着です。

第22話 事件

「ギンガ団だったの!?二人とも!？」

「そうだよ。あ、言っていなかったっけ」

「言っていない!！」

不満げにするミラに僕は苦笑いを浮かべるしかない。

「ねえねえ、もっとその話詳しく聞かせてよ」

ちよつと状況があやしくなってきたので……

「ハイハイ、この話はもうおしまい」

「えー!なんであの人と別れたかとか聞きたいことがあるのに!」

やっぱりここは無理やりにも終わらせた方がよさそうだ。

だから僕はこの話を打ち切った。

「ほら、博物館行くよ!」

なんでなんでと言いつたミラを無視して僕は炭鉱博物館へと足を進めた。

マルカから（いや、カルマか？）もらった化石を復元してもらっためだ。

しかし

「おい！」

「な、なんでしよう……」

「ここには化石を復元するシステムがあるらしいじゃないか……それをよこせ！」

僕が博物館に入って約2秒後に起こった出来事です。なんてこった。

「そ、それはだめです……」

「ごちゃごちゃぬかすな！」

どうやらやつらの狙いは化石の復元システムのようだ。

なんでそんなもの欲しがるのかな？ここに来れば無料で復元してもらえるのに。

だが、相手……どうやら2人組のようだが、

「うつるさいなあー」

「むだに大声だしてるもんね〜」

擬人化したミラとエテぼうが雰囲気ぶち壊しの発言をしてしまった。

ああ、この擬人化コンビよ、この世間知らずが。

なんでここでそんなこと言っただよ。

普通、そんなこと言ったら……

「そこのお前！何言っただが……る……」

どうやらゴローンを連れていたようだが、近づいてきた一人がミラの顔を見て言葉を無くす。

まあ、きれいだからね……ミラは。

「誰ですか？あなた」

「あ、DORAのハガミっす」

余りにもデレっとした顔で自分の名前と組織名（？）までばらしてしまつたハガミに

ゴリキーを出していたひげの濃い男がまた大声を出す。

「ハガミ！！何組織名ばらしてんだ！！」

結果的にばらしたのはあんただ。

「ちよつと見てくださいよ、この女きれいつすよ。

どこかのモデルですかね〜ゴゴリさん」

「知るか！仕事をしろっ！」

そう言つてゴゴリはハガミの尻を蹴りあげた。

「はぐうっ！」

この光景、ギンガ団にいた頃もよく見たな……。

といつても、幹部のマーズさんが同じく幹部のサターンさんを蹴りあげていたんだだけだ。

おかしかつたけど仮にも幹部の前だから必死で笑いをかみ殺したのを覚えている。

その時一緒にマルカもいたんだけど、あとで聞いたらマルカも僕と同じだつたみたいだ。

「とにかく、システムをよこせ！さもなければこいつらでここの展示物をめちやくちやにするぞ！」

ゴゴリの大声で僕は現実に引き戻された。それを聞いた係のお姉さんの顔が青くなる。さすがに展示物を壊されると困るらしい。

「それがいやなら、システムだ」

顔色の変化にゴゴリも気付いたのだろう、にやりと笑ってシステムを催促する。

「マーク、やっつけようよ」

ミラが突然起こった顔で僕に言った。

その横ではいつの間にかエテぼうがポケモンに戻っている。

「私がエテぼう、マークがフーね」

そう言うと僕が止める間もなくミラは指を突き付けた。

「その悪党ども！システムがほしくば、私達とバトルして勝ちなさいー」

「ああ？」

ゴゴリは嫌そうな顔、ハガミはなぜか嬉しそうな顔をするがゴゴリも少し考えた後言った。

「いいだろう。ただし、お前達が負けてもシステムが渡されなければこの博物館はぶっ潰す。むろん、お前達が勝てばおとなしくこの場は出て行ってやるわ」

その時、自動ドアが開いて一人の小さな女が入ってきた。
桃色の髪を少しだけ伸ばしている。

「ジムリーダーがいる炭鉱の入り口、塞いできたよお。
んで、システムはあ？」

「どうやらこの女の人、こいつら（DORAとかいったっけ？）の
仲間のようだ。」

「ちょうどいい。リム、来い」

「ええー」

そして、博物館の前で僕とミラ、ゴゴリとリムがボールを構える。
ハガミが審判役をするようだ。

「んじゃ、2対2のダブルバトル。
当然交代なし、2体やられた時点で負け、ってことで」

そんなこの前のツツジとは全然違う雰囲気で、バトルの開始が告げ
られた。

「はい始め」

軽ッ！

第22話 事件（後書き）

DORAの登場です。

やはり、悪役というものはいるわけで……

第23話 バトル勃発

「行け、ゴリキー！」

「行けえイワークう」

相手が出してきたのはゴリキーとイワーク。

「エテぼう、いっけえ！」

「フー、スタート！」

対する僕たちはエテぼうとフー。

「こつそくいどう！」

ミラの声でエテぼうの動きが速くなる。

だが、ゴリキーもイワークもあまり速い方ではない。

「ゴリキー、エイパムにかわりだ」

「フー、おどろかす！」

フーがゴリキーをひるませた際にエテぼうが後ろに回る。

「スピードスター！」

『てえい！』

エテぼうが放ったスピードスターがゴリキーとイワークにあたる。

『ッゴー!?』

ゴリキーは思わずのけぞるがイワークは平然としていた。
そうだ、イワークはタイプのにも防御力的にも効かないんだ……

「いわなだれえ」

やる気のないリムの声と共に大量の岩が降り注ぐ。

『フー！？』

『うわあっ！？』

エテぼうたちが叫ぶ。

これで炭鉱の入り口をふさいだのだろう、すごい量だ。

しかし、エテぼうはともかくフーのダメージが思ったより大きい。
効果抜群だから仕方ないけど。

「ゴリキー、今のうちにエイパムにかわらわり！」

ゴゴリの声に僕はハツとした。

あくまでもエイパムを狙うつもりか。

なら、こうするか……

「フー、かぜおこし！」

『フーワー！』

その間に僕はこっそりミラに耳打ちをする。

「えっ……うん、わかった」

ミラが頷く。それを確認した僕は再びバトルのほうを向いた。

フーの思いがけない攻撃にゴリキーはたまらず吹き飛ばされる。

『ゴオツ！？』

「ゴオリキー！しっかりしろ！」

ゴオリが叫ぶが、すでにゴオリキーは目を回して倒れてしまった後だった。

ハガミが手をあげる。

「ああ、こりやダメっすね。ゴオリキー戦闘不能」

「ぐう……」

ゴオリキーをボールに戻すゴオリの顔は険しく、逆にリムのほうは「あーあ」という程度のものだった。とにかく、これで2対1。

数の上では有利だ。有利なんだけど……

「とっしいん」

『イワアアア！』

イワークが咆哮と共にエテぼつめがけて突進してくる。すかさず、ミラが叫んだ。

「エテぼつ、用心して！」

『オツケー！』

しかし完全によけきることはできず、たまらず吹っ飛ばされる。

『づうづうっ！』

エテぼつが叫び声をあげたところにイワークは再び突進しようとする構

える。

どうやら特性はいしあたまなので反動はないようだ。だがその時、フーがエテぼうの前に立ちふさがった。

『フー！』

「ゴーストタイプにはとっしん効かないねえ。がんせきふうじ」

(ゴメン、フー……)

心の中で僕は謝った。

そのまま叫ぶ。

「フー、イワークの頭へしっぺがえし！」

『イワアアッ！』

『フー！』

がんせきふうじを受ける中、イワークの頭のほうまで飛んだフーのしっぺ返しが炸裂するのだが、

『フ、ウウ』

……もうフーも限界だった。

そのままフーはイワークの頭の上に倒れこんでしまった。

「フワンテ戦闘不能。1対1っす」

対峙する両者。

しかしその瞬間、フーの体が光に包まれて……

「なっ！」

「ええ？」

「は？」

ドツカアアアアン！

フーが爆発した。

「ゴメンね、フー。頑丈なイワークにダメージを与えるためにどうしてもゆうばくは効果的だったんだ」

爆発した後、フワんテをボールに戻す。

残るはミラとエテぼうだけだ。

ふとミラを見ると、ミラは僕の視線に気づいて口を動かした。

（大丈夫、もう詰んだ、か）

結構言うなあと思いつつながら、僕はバトルの続きを見る。

確かにこのバトル、もう詰んだと言っていいかもしれない。

『イ……ワ……』

爆発を受け、イワークの体がぐらぐらし始める。

「イワーク、あとはあのエイパムだけだよ。いわなだれでとどめえ」

『イワアアアア』

それを聞いてミラも叫ぶ。

「お願いエテぼう！これだけは避けて！」

『無茶言わないでよ……』

といいつつも、エテぼつは高速移動による速さで何とかよけていく。だがすべてというわけでもなく、2、3個が命中する。

『ぐッ……』

「お願い……」

その時、“時間”が来た。

『イ、ワアアア……』

「あれ、イワークう？」

イワークは苦しそうの声をあげ、体がぐらぐらとし始める。そのままずしいんと音を立て、イワークは倒れてしまった。エテぼつもまたよろよろとしてはいたが、なんとか立っていた。

「あーこりやイワーク戦闘不能っすね。

よってエイパムの勝ちっす」

「やったー！」

ミラがぴよんぴよんとび跳ねる。

一方でゴゴリとリムは何が何だか分からないという顔をしていた。

「なんでだ……いくらあの爆発があったとはいえ、まだ体力があるはずじゃ……」

茫然としたゴゴリの声を聞いてミラが僕にウィンクした。

「だってよ、マーク。もうこれはマークのおかげだね」

僕がミラに耳打ちした事。

それはエテぼうに「用心しろ」と言うこと。

……つまりは、どくどくを命じるということだったのだ。

「どくどくの効果でどんどん大きくなる毒のダメージにはさすがにイワークといえど

耐えきれなかったみたいだね」

「その通りだね」

ミラの言葉に僕は頷く。

さて、これで一件落着……かな？

第23話 バトル勃発（後書き）

一話でまとめてしまいました。

少し物足りなかったような気がします。

第24話 助太刀

「納得できん！」

ゴゴリが当然のように騒ぎだした。

ああ、負けたら素直に出ていくって約束だったのに……

「このまま帰れるわけないだろうが！」

「でも負けたら帰るって……」

「うるさい！」

そのまま再び蹴られるハガミ。

ゴゴリはまた最初のように大きな声でどなり始めた。

「おい、お前、システムをよこせ……！」

「ええっ！」

やっと解放されたのだと思ったのだったが、係のお姉さんは再び困った顔になる。

やれやれ、このままじゃちがあかないな。

そんな風に考えていた時だった。

「おっさん、勝負に負けたくせにそれは大人げないで」

声が聞こえた瞬間、辺りが真っ暗になった。

「な、なんだ……！」

「わ、わからないっす……！」

パニックになったゴゴリとハガミの声が聞こえたが、パニックになったのは他の人も同じだった。

「何？何？」

「停電か？早く復旧させる！」

「あ、明かりがつかない……。ポケモンのフラッシュはどうだ！」

「駄目だ、フラッシュも効かない！どういふことなんだ！」

そんなパニックの中、冷静な人間がこの場には3人いた。

「フラッシュが効かない……。？」

同時に言ったのは僕と、そしてゴゴリ達の仲間のリムだった。

彼女もまた、この異常さに気がついたらしい。

フラッシュはポケモンが放った光であたりを照らすことが出来る技だ。

効く、効かないの問題ではない。

つまり、この暗闇は……

(……幻影だな。声からしても、たぶんこれはあいつのせいだろうなあ)

僕の予想は見事に当たった。

「マーキュリーも災難やったな。助太刀したる」

暗闇が一瞬のうちに晴れ、その代わりにいつの間にかカルマが僕の前にはいた。

その横には今まで暗闇の幻影を作り出していたであろうゾロアーク

もいる。

「なっ、お前どこにいた!？」

うろたえるゴゴリだがそれは仕方ないだろう。

カルマはゾロアークで暗闇を作った隙にここまで来たのだ。人の不意を突く。

それが大好きなのがカルマという人物なのだから。

「あんたら勝負に負けたんやろ? だったらこの場は去るって最初に自分約束したよな?」

「ぐう……」

「そりゃ、確かにしたっすけどねえ……」

ゴゴリとハガミは気まずそうな顔をする。

その横でリムはやはりどうでもいいような顔。

「別にまだ暴れたりんって言うなら、ウチが相手してやってもええけどなあ」

得意そうな顔で言うが、カルマの目が笑っていない。

何より、その手に持った別のボールからも並々ならぬオーラが出ていた。

「う……くそっ!」

とうとう観念したのだろう、悔しそつではあったがゴゴリはぎびすを返すと

外に走って出ていった。

「待ってくださいよ」

「……あーあ、めんどくさいなあ」

ゴゴリが別のポケモンを出してどこかへ行ってしまったのを見てそのあとをハガミ、リムが追いかけていった。

「ありがとな、カルマ」

「気にせんときいや。ウチとあんたの仲やる」

「まあね」

ここでミラが何か聞いたそうな視線をぐさぐさと僕に突き刺してくるのだが

とりあえず、無視。

「仲ってどういう仲なのよお……」

ミラがじとつと呟いたが、カルマの耳には入らなかったのだろう、カルマはこれといった反応はしなかった。

「そういえば、ウチ前にマーキュリーに化石やったなあ」

カルマの言葉で、僕もここへ来た本当の要件を思い出した。そう、化石を復元してもらいに来たんだ。

僕は係のお姉さんのもとに行くとして化石を取り出して渡した。

「この化石、復元してもらえませんか？」

「はい、わかりました。復元には時間がかかりますので少々お待ちください」

そう言っただけ化石を受け取ったお姉さんは奥の部屋へと入って行った。化石を渡した僕はカルマのほうを振りかえった。

「そういえば、あれどんなポケモンになるの？」

「それはその時のお楽しみや。ここで言っても面白くあらへんよ？じゃ、ウチはもう帰るわ。またな、マーキュリー」

カルマは笑って言うと言った手を振って出て行ってしまった。

今日、結構カルマに借りが出来たな……。

今度何か珍しいモンスターボールでも送っておこう。

第25話 新たな仲間は料理がお好き（前書き）

今回から、ちょっとあとがきに趣向を凝らしてみます。

第25話 新たな仲間は料理がお好き

それから約30分後

「お待たせしました。こちらがツメの化石から復元されたポケモン、アノプスになります」

「アノプス……ですか？」

僕が再び博物館を訪れると、台の上に一つのモンスターボールと見たことがないポケモンが乗っていた。

「ツメの化石はハウエン地方でも発見されたそうですが、シンオウ地方は地下通路があるため採掘が可能なんです。しかし、それでも簡単に出てくるものではないんですよ？」

お姉さんが化石について解説してくれた。

さらにお姉さんはそのポケモンについても解説してくれた。台の上に乗ったポケモンは2本の爪と体についた羽、そして飛び出た二つの丸い目が特徴的だった。

「アノプスはむかしエビポケモンで、太古のポケモンです。

昔の海に生息しており、8枚の羽をうねらせながら

2本の爪で獲物をとらえ食べていたそうです」

「へえ〜」

お姉さんの解説を聞いて僕は何度もうなずいていた。それほどよくわかる解説だったのだ。

「どうやらメスのようですが、何かニックネームをつけますか？」

「メスかぁ。だつたら……」

ニツクネームを考えて視線をさまよわせていた僕の目は、僕をずっと見ていた

アノプスの二つの丸い目を見て止まった。

「うん、決めた。名前は……」

「マル？」

「うん。そつだよ」

クログネシティで僕はアノプスにマルという名前をつけた。理由は言うまでもなく、その丸い目である。

そして今僕たちは擬人化したミラとエテぼうと共に夕食の準備をしている時だった。

（フーはというとバトルでのダメージが少し大きかったらしく今日はポケモンセンターで
ジョーイさんが預かることとなった）

「ねえねえ、せっかくだからここで擬人化してよ！」

「あ、それいい！賛成！」

エテぼうが提案するとミラも面白そうに目を輝かせて僕のほうを見た。

「早く！早く！」

そんなにせかさないでよ……。
僕は少し疲れを感じたが、とりあえず博物館で渡されたマルが入ったモンスターボールを握りしめた。

そしてボールが熱をおび、弾ける。

「ん……ここは……」

それがマルの第一声だった。

少しきよるきよるするとマルは僕のほうを見た。

「……あなたがボクのトレーナーですか？」

「うん、そうだよ。マーキュリーっていうんだ、よろしくね」

「よろしく願います……。でもまさかゴルダックがポケモントレーナーとは思いませんでした。」

ポケモンもポケモントレーナーになるって不思議な気分ですね」

驚きつつも時代が変わったことには気がついたのだろうか、うんうんとマルが頷いた。

いや、でもその……

「なんか違う！」

「何がですか？」

僕のつつこみにやはり首をかしげるマルだった。

僕はミラ、エテぼうの紹介に加えこれまで僕に起こったことを話した。

「なるほど……本当は人間なんですか。そう言えばボクも人間の姿になっていきますね。」

信じられないけど、本当みたいです」

そう言ってマルは再び鏡の前でじーっと自分の姿を見た。

マルの姿は10歳くらいの女の子だ。そして元の姿のなごりだろうか黒っぽい服には赤と白の羽が付いており、その丸い目はぱっちりとして大きかった。

グツグツグツグツグツグツグツグツグツ

「あっ、やばい！料理の途中だった！」

グツグツとお湯が沸いた音があまりに大きくなってきたので慌ててエテぼうが鍋にかけ寄った。ミラも慌てて炒めていた野菜などをひっくりかえすが
すでに一部は焦げてしまったようだ。

「りょうり……とはなんですか？」

不思議そうなマルの声。

そうか、昔は料理という概念がなかったのか……。

「料理っていうのはね……。簡単に言うと食べるものをよりおいしく、食べやすくする事だよ」

「そうなんですか。ボクも何か手伝いましょうか？」

そう聞いてきたので僕は包丁を使ってまな板の上で野菜を切つて見せた。

「こんな風にして野菜を切ってくれる？大きさはそんなに大きくなくでいいよ」

「わかりました」

そう言ったか言わないかその瞬間

タタッタッタッタッタッタッタッタッタッタ

不規則ではあるものの小気味いい音が連打するかのように聞こえてきた。

そう、マルが猛スピードで野菜を切っていたのだ。

「すごい……」

野菜を炒めていたミラとお湯に野菜やつくねを入れていたエテぼうがびっくりした顔でマルを見た。びっくりしたのは僕も同じだ。つて、んん？

「あれ、マル……」

「どうかしましたか？」

そのスピードだからかさすがに顔をあげはしなかったが、野菜をどんだん切りながらマルは返事をした。

あまりに早く手を動かしていたのでその手の先が見えない。

しかし僕は見てしまった。
包丁が横に置いたままであるのを……

「どうやって包丁を使わずに野菜を切っているんだ？」

そのとたん、彼女の手が止まる。

その手は……なぜかその手だけがアノプスのあの爪に戻っていた。
どうやら、擬人化した体を部分的に戻すことが出来ることをもう知っていたようだ。

そしてマルは口を開く。

「……ホウチヨウ？何ですかそれは？」

マルの言葉に僕を始めその場にいたマルを除く全員が言葉を失ったのは言うまでもない。

「おっ、おいしい！」

「大きさがちょうどよくて……」

「焼き加減も絶妙……」

そして食事となったのだが、マルに任せた料理はすさまじくおいしかった。

「喜んでいただけで嬉しいです」

マルはにっこりと笑った。

そしてその時が、彼女以外全員がマルに料理をすべて任せようと思
った瞬間だった。

第25話 新たな仲間は料理がお好き（後書き）

マル「えっと……これはなんですか？」

ミラ「いようー！マル、あとがきの世界へようこそー！」

マ「あとがきですか？」

ミ「あとがきだよ。なんか、自分の書き方だところについていづことができないことに

作者が気付いたみたいだね」

マ「ボクたちに、何をしろと？」

ミ「”次回予告”だってさ！」

マ「はあ……」

ミ「だってほら、せっかくかわいい女の子が二人もマークの仲間になったでしょ？」

これを利用せずにどうするんだー！だって」

マ「作者の方、こんなに長い毎回やる気ですか？」

ミ「うーん……ま、やるだけやらせてみようよ。書はないだろうし」

マ「はあ……」

ミ「てな訳で、次回、”さて、これからどうしようっ？”」

マ「次回もよっ、よろしくお願いします!!
でも、このタイトルなんですか？」

三「ねあ……」

第26話 ちて、これからどうしてよじっ。(前書き)

最後はちょっと……怖い方もいるかもしれません。

第26話 さて、これからどうしてよっ。

「根本からヤバいんだね……」

「うん」

ブーケには会った。

化石は復元した。

……ここにきて、早くも僕たちはこれからどうすればいいかわからなくなっていた。

「ジム戦に行こうと思ったら、バッジもらっちゃったしね……」

それは約10分前のこと。

「え……と、これは……」

「僕からのお礼だ。実際、君のバトルは見事だったと多くの人が話しているし」

君が僕とバトルしても君が勝つのはわかるんだ。

僕はまだ若輩者だからね……」

そう苦笑して僕の前に立っていたのはこのクログネシティのジムリーダー、ヒョウタ。

そしてなんと彼は部屋に来るなり僕にバッジをくれたのだ。

その反応が少し上の行の僕の言葉である。

「つまり、ここですることはもうない、と」
「そうなんだよ……」

ミラの的確な言葉に僕はさらにうなだれる。
せめてクナイから何か情報があればいいんだけど、あいにくまだ何の連絡もない。

(もつとも、あまり日がすぎていないから当然なんだけど)

「そう言えば……」

そこで口を開いたのはエテぼう。

「フーもいることだし、ハクタイシティに戻って2個目のバッジを手に入れに行くのはどうかな？」

「あ、なるほど！」

そういえば、そうだった。

「今は草タイプとは相性の悪い手持ちだから……」
これが前に僕が言った言葉。

だが今はフーとマル、2体も新しい仲間がいる。
うん、これならいける。

「よし、ハクタイシティに戻って、ジム戦やろう！」
「「「おー!!」「」」」

まずはポケモンセンターにお泊り中のフーをそろそろ迎えに行かな

くては……

「で、失敗したと?」

「も、申し訳ありません」

ここはある屋敷。

しかし決して、裏山が自慢のどこかの屋敷ではない。

真紅と金の糸で織られた豪華なじゅうたんに

シャンデリアが輝くその屋敷の部屋に二人の人物がいた。

一人は……マーキユリーたちと戦ったゴゴリ。

そしてもう一人、先ほどからゴゴリをにらみつけてやはり豪華なイスに座っている一人の老人。

洋風の屋敷であるにもかかわらず、その老人は紋付き袴の和服を着ている。

そして口にはパイプをくわえており煙が先ほどから出てきている。

文明がちや混ぜになったような、前の時代のイメージを感じるがゴゴリはそんなことを考える余裕はなかった。

「それで?お前はこう言うのか。」

誰ともわからんマフラーで顔を隠した男と若い女にポケモンバトルで負け、

化石復元システムを手に入れることなくのこのこ戻ってきた、と

「……その通りでござい」

「この馬鹿者がああああああああああああっつ!?!?!」

屋敷に年老いた男の怒号が響き渡る。

それはとても老人の声とは思えないほどの音量だった。

「申し訳ありません、カバチ様……」

カバチと呼ばれた老人はやはり不機嫌そうにパイプをふかす。

「謝ったところで貴様の失態は変わらん。

だがワシでもこのはらわたの煮えくりようだ。考えてもみる

もしこの報告を受けたのがワシではなく……そうじゃのう、ジユウ、
あるいは“あのお方”だったら……」

ジユウ、という名前にびくつとしたゴゴリは自分の手が震えている
ことに気がついた。

いや、手だけじゃない。

足も。歯も。

震えが収まるどころかさらに震えが増していた時

「私がかしましたか？」

「……ッ！」

ドアが開く音ともに聞こえたこの声。

声は後ろから聞こえてきたが、声の主はわかる、わかってしまっ…

…！

もうゴゴリは自分がかたがたと震えることを疑いはしなかった。

「ボスはたいそう怒っていますよ。あのバカがこのDORRAの名前を
簡単に口にしたそうですからねえ……」

声の主がゴゴリの横を通る。

ごくっ、という音がした。

ゴゴリが恐怖のあまり思わずつばを飲んだのだ。

間違いない、“あのバカ”とは……自分の部下、ハガミのことだ。

「ジュウ。……何かワシの部屋のものにさわる前に、手を拭け」

「これは失礼しました……」

カバチが投げたティッシュの箱を受け取るため、ゴゴリの横から手が伸びる。

その手はゴゴリの目の前で箱をつかんだ。

「……！」

「すみませんねえ、何かお話中のところ邪魔してしまって」

手をティッシュでふくと

「……Dead OR Alive。“生死問わず”……」

仕事のためには命をかける。そして、ルールを破ったものもまた然り。

処罰を受けてどうなるうとも生死問わず……。

この“DORA”はその言葉からきているのに、果たして何人がその本当の意味を理解しているのか不安になりましたよ」

軽いため息とともに箱をそのまま床に落とすと

声の主 ジュウはゴゴリのほうを一切見ずに後ろを向いて部屋を出ていった。

「……おい、大丈夫か」

「……」

大丈夫なわけがない。

声がしてから、ゴゴリは一度も顔をあげることが出来なかった。その額からは汗が滴り落ち、いくつもの汗が落ちた跡が豪華なじゅうたんにぼつぼつと残っている。

大丈夫なわけではない。

彼は聞いてしまったのだ。見てしまったのだ。

「処罰を受けてどうなるうとも生死問わず……」

そう言ったジュウの手は、箱をつかもうとしてゴゴリの目の前に伸びてきた手は

血に染まっていた。

第26話 ちて、これからどしてよじっ。(後書き)

マル「なんですかこれ!」

ミリ「ちょっと、その……あれね」

マ「怖いですよ……」

ミ「たぶん、あいつらとは戦うことになるのよね……。誰が相手するのかな……」

マ「フーがしますようにフーがしますようにフーがしますようにフーがしますようにフーがしますようにフーがしますように」

ミ「……あなたフーに恨みでもあるの?」

マ「いや、フーならゴーストタイプだから血が出ないかなーなんて……」

ミ「……」

マ「と、とにかく!」

次回、PENALTY、”出だしを挫かれるほどごんざりするものはない”!」

ミ「……この長いタイトルにもうんざりだけどね」

マ「そ、そんなこと言わないでください!……」

第27話 出だしを挫かれることほどぐんざりするものはない

結論から言おう。

僕たちは、ハクタイシティに向かわないことになった。

約10分前

「ヨスガシティ!？」

<そうよ>

ポケモンセンターに戻って僕は全快したフーを迎えに行き、そのまま出発しようとしたのだがジョーイさんに止められた。

電話が僕宛てにかかってきていたから、そのことを伝えてくれたのだ。

その相手というのが、情報収集を頼んでいたクナイだった。

<まずはツククサという人について話しておくわ。

……といっても、この人ある時期の記録がぼっかり抜けてるのよ>

「記録が抜けてる?」

<ええ。かつてはタタラ製鉄所で働いていたそうなんだけど

ある日突然失踪。失踪の前に何か事件があったらしくて、それが原因だろうと言われて

搜索したものの、見つからなかった。

それが2、3年後、突然また現れたらしいのよ>

2、3年後ということは……

僕は頭の中で整理する。

おそらく、失踪していたというのは罰でポケモンになっていた時期だろう。

<その後、ファイトエリアにあるバトルタワーで驚異の連勝記録を達成。

事実上、タワータイクーンのクロツグさんに次いでナンバー2となった>

「バトルタワー!?!」

なるほど、そこに行けば直接会えるかもしれない!

<でも、タワーにいることはほとんどないそうよ>

……僕の期待はわずか数秒で打ち砕かれてしまった。

じゃあ、どうしろと?!

<最近……というか、つい昨日、彼がある町で目撃されてるわ>

「どこ!?!」

<ヨスガシティ>

で、話が最初に戻る。

「どうしてヨスガシティに……?でも、今行っても会えるとは限らないんじゃないあ」

<それくらいわかるわよ。あなたバカでしょ?>

……一瞬、怒りのあまり本気で電話を切りそうになった。

しかし、情報を得るためだと励ます僕の理性がかかるうじてその手を

止めてくれる。

<彼がヨスガシティに現れることは、そう珍しいことじゃないらしいわ。>

<でも、彼の目的地は75%が同じ場所>

「そこはどこ？」

僕の問いにクナイは初めて困った顔を見せた。

<……なんていうのかしらね？あそこは。>

まあ、多くの人は“教会”と呼んでいるわね>

「教会……」

<そこにいる人に少し話を聞いて調べておいたわ。>

どうやら、ツククサがあっているのはラスカー神父みたいね>

神父。

なぜツククサはそのような人物とあっているのだろうか？

罰を受けたことによる、懺悔……？

もしくは、祈り……？

うーん、だめだ。

何か違う気がする。

<とりあえず、伝えておきたいことは伝えたわ。>

まあ、これは言うまでもないけれど、ツククサっていう人ポケモンバトルは相当強いみたいだからあなたじゃすぐ負けるわよ。

……私とのバトルの時に現れた、あの影と一緒にでもおそらく、ね>

「……………」

そのあと、僕は礼を言って電話を切った。

本当はDORAとかいう組織についても調べてもらいたかったのだが、ツユクサについて

これほど調べてもらったのにさらに追加、というのはいくらなんでも頼みすぎかと思ったのだ。

『マークにしては謙虚だったね』

「うるさいなあ」

ポケモンセンターを出てヨスガシティに向かう道中、肩に乗ったエテぼうが

僕をからかってきた。

『絶対にDORAについても調べてって言うと思ったのに』

「そこまで僕はしないよ。それにああいうのは

むやみに首を突っ込んでみるくなことにならないよ？」

ギンガ団時代、ギンガ団に“首を突っ込む”連中が先輩たちによって“ろくなことにならない”事を見てきた僕だ。

何か悪いこととしていそうなやつらにかかわっても、いいことがあるとは思えないし

むしろとんでもないことになりかねないのだ。

『あともう一個聞いていい？』

「何？」

『どうしてクロガネゲート通りたくなかったの？』

「あー、」

ちよつと返答に戸惑う。

『ただ通り抜けるだけならあんなに短いのに』

「いや、実はさあ……」

少し頭をかいて僕は言った。

「あそこ、たまにあいつがいるんだよ」

『あいつって……まさか……』

「うん。リットだよ」

リット。それは僕の友人だ。

友人なのだが……

『まさか、だってリットはハウエン地方にいるはずじゃ……』

「わかんないよ……だって僕らの間じゃ“絶対いない”と思ったところに奴がいる」が

合言葉だったから。実際、すぐ通り過ぎれると思ったクロガネゲートで何度であったことが……」

僕の言葉にエテぼうは黙りこむ。

「ねえねえ」

「うわっ！」

そこへいきなりミラがボールから出てきて（おまけに人間の姿で）僕の横に現れた。

なんでも、ボールの中で擬人化しようとするといつの間にかボールの外へ出てしまつらしい。それはそれで構わないんだけど……

「いきなり現れるのはやめてよ」
「ゴメンゴメン。で、そのリットっていう人誰？まさか……女の人？」

そう言うミラの顔が少し……何というか、不機嫌というか不安げと
いうか……

だが、この質問には答えられない。

「いや、男だよ」

「そう……じゃあさ、どうして」

ミラは僕の顔をじーっと見る。

「そんなに嫌そうな顔をしてるの？」

「……………」
「……………」

僕と彼を知るエテぼうは黙りこむ。

黙っていればやがてボールに戻ってくれるかと思っていたのだが
ミラは結局聞きだすまで戻ろうとしなかった。

「わかったわかった、話すよ……………」

げんなりして僕はあまり話したくないので一言で彼を説明する。
というか、彼の説明にはこの一言で十分だし、このどちらが欠けて
も彼の説明は成立しない。

「……………変態のシスコンだよ」

第27話 出だしを挫かれることほどつんざりするものはない (後書き)

ミラ「うげえ……」

マル「変態……ですか……」

ミ「ちよつと、PENALTYこれでいいの？」

マ「なんか不安になってきましたよ」

ミ「大方作者がキャラ設定に詰まったんでしょーねー」

マ「さすがに男を出す必要がありますからね。女ばかりだとそれはそれで」

ミ&マ「困る」

マ「次回、”前言撤回 変態の友人ほどつんざりするものはない”」

ミ「最近なんか長いのばかりね」

マ「つうん……」

第28話 前言撤回 変態の友人ほどんざりするものはない

「いつ……」

さすがのミラも僕の言葉に顔をこわばらせて後ずさりした。

「だから話したくなかったし会いたくもないんだよ。

出会ったが最後、妹の自慢話を延々と聞かされることになる……」

「どれくらい？」

おそろおそろ聞いたミラに僕は現実をたたきつける。

「僕で平均時間は約1時間。ただ、運が悪いことに1回リットの妹がジム戦に勝った日に

あいつと会っちゃって、その時は3時間近く自慢話された」

『長かったなあ……』

その時のことを思い出したのだろう、エテぼうが一瞬で船酔いをしたような

真っ青な顔になる。

ミラもひきつった顔で話を聞いていた。

「そ、そうなんだ……」

「俺があいつに会いたくない理由、わかってくれたか？」

ぶんぶんと頷くとこれ以上聞きたくはないとばかりにミラは珍しく自分から

ボールの中に戻っていった。

『リットに、会わずにすんだらいいけどね』
「あたりまえだ」

それさえなければいいやつなんだよな……。
おまけに、ポケモンもそれなりに強い。
あとさすがに初対面の人は誰でもびっくりするあれが……。いや、今
言うことでもないか。

「まあ、ぼちぼち山を越えようか」
『うん』

自転車で崩れる道を一気に上ると、そのまま僕は
テンガン山めがけ一気にペダルをこいだ……。

テンガン山を通り抜け、そこから少し橋をわたって道路を抜けた先
にその町はあった。

「きれいなところだね……」
『そうだね……』

たどり着いたのは少し日が落ちようとしていた夕方頃。
道に立つ街灯にはぼんやりとした明かりがとまり、人々の行き来が
少なくなつたような
まさに夕暮れという雰囲気が出ていた。

「えーと、なにになに……」

僕は近くに会った案内板を覗き込む。

「ポケモンセンターは少し行って角のあたりかな？
そして、えーとジムにコンテスト会場もあるのか……。そういえば
そうだったな」

そう、ここにはトレーナーが訪れる大きな施設が二つある。
一つは言うまでもなくポケモンジム。

ジムリーダーは確かゴーストタイプの使い手のメリッサだったかな？
まあいいや、今日は挑むこともないだろう。
こうして僕は宿を探し始めた。

……少し探したのち、一番安く済み、なおかつそれほど悪くないホテルを見つけたので
そこに泊まることにした。

通常、旅のトレーナーはポケモンセンターに附属している宿泊施設に泊まるのが定石だ。

しかし、そのためにはポケモントレーナーであることの証明になるトレーナーカードが必要なのだ。

もちろん、僕だってトレーナーカードは持っている。でも、今僕の顔は誰がどう見ても

ゴルダック。普段は顔を隠しているしカードの写真と比べることが出来ないのだ。

カードの持ち主だという証明が出来ないのだ。ちっくしょー！

「とりあえず今日はもう休んで……明日、どうする?」

「え?」

「どうということですか?」

料理をしていたマルと手伝っていたミラが首をかしげる。

「正直なことを言うと……明日は丸一日ゆっくりしたいんだよ。

ほら、最近バトルだった移動だったりで大変だったでしょ?」

リットのことを思い出した、というのが理由の1割に含まれるのは秘密だ。

いや、ホント、あれさえなければ……

しかも、それはあくまで知り合いのみに見せる姿だから初対面の間はそんなことに気付かず心を許してしまう……。あぁ、また思い出してしまった。

「汗びっしょりだよ?」

「ご、ゴメン、なんでもない」

首を振ってごまかすと僕は話を続けて心配そうなミラの言葉を止めた。

「ほら、ここコンテスト会場があるんだよ。

せっかくだから、ミラとマルの二人で見に行ってみたら?」

「わ、私は……どうしようかな……」

本当はホテル(でマーキュリーと一緒に)にいたいのが、ミロカロスとしてはやはり気になる。

「ボクは行きたいです」

一方で、マルははつきりと言った。

「コンテストというものが何かはわかりませんが……なんだか面白そうなので」

「じゃ、じゃあ私もいこうかな……」

それを聞いて僕はうん、と頷いた。

「そうか。僕は人が多い所はこの顔だからあんまり行きたくないから、」

君達だけでも楽しんでおいで」

「「はい」」

「じゃ、そろそろご飯かな？」

マルが作った夕食はやはり何も言うことがないほどおいしかった。

(このままじゃ、他の人の料理がおいしくなくなるかもしれないな……)

そんな不安を抱くほどだった。

『じゃ、おやすみー』

「おやすみ」

寝るとき、手持ちのポケモンはみんなボールから出すことにしている。

ミラ達はポケモンの姿になると、その辺に横になる。

ボクはゴルダックの顔をしてベッドに入った。

（あー、平和だ。かといって知り合いに会ってわけでもないしね
ー）

この考え方は、あとで考えると間違이었다。

“絶対ないと思ったところに奴がいる”

第28話 前言撤回 変態の友人ほどつんざりするものはない(後書き)

マル「コンテスト、ですか」

ミラ「やっぱりヨスガシティと言えばコンテストだからね！」

マ「え、じゃあボクたちもポケモンとしてコンテストに出るようになるんですか？」

ミ「さあ、どうでしょう？」

マ「無理です無理です！ボクは遠慮します！」

ミ「遠慮するなって」

マ「嫌なものは嫌なんです！」

ミ「ふ〜ん。まあ作者次第だけだね。

次回、PENALTY、”コンテスト会場での出会い”！」

マ「そういえば今度からマークがしばらくでないので第3者視点だそうです」

ミ「え！？そ、そこは私視点とかじゃないの！？」

マ「そう言われても……。」

それに、次回はボクがメインらしいですよ？」

ミ「なんですと！？」

第29話 コンテスト会場での出会い

「行ってきまーす!」

「行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい!」

マキユリーに見送られて、ミラとマルは二人でホテルを出た。向かう先はコンテスト会場である。

「コンテストって、具体的には何をするんですか?」

「そうだね、ポケモンバトルがポケモンの“強さ”を競っているのに対して、

コンテストはポケモンの“魅力”を競うものなんだよ」

「魅力?」

「かっこよさ、うつくしさ、かわいさ、かしこさ、たくましさ。

この5部門に分かれて、さらにその中でビジュアル、ダンス、えんぎの3つの総得点を競うんだ。見ている分にはとても楽しいよ?」

「え、えつと、5部門に3つの総得点で……」

マルは少し混乱してしまったようだ。

「まあ見てたら何となくわかるよ」

「そうですか……。もう一つ聞いていいですか?」

「どうぞ」

「どうしてこんなに詳しく知っているんですか?」

「!」

マルとしては特に変なことを聞いたつもりはないのだが、その質問を聞いた時

明らかにミラの顔色が変わった。

「え、えくと……ほら、パンフレットとか」

「そ、そうですね」

ミラのごまかし方はあまりにもわかりやすかったが、マルはあえてそれに乗った。

マルは感じたのだ。これは、ミラにはいけない質問だったのだと……。

少し二人の間に沈黙が訪れる。

「大きい……」

少し歩くと、二人の前には大きなドーム状の建物が現れた。これこそポケモンスーパーコンテスト会場である。

「ね、さっきの5部門の話覚えてる？」

「かつこよさとかのあれ、ですか？」

自信なさげにマルが言つとミラは嬉しそうにつなずいた。

「そつだよ！それでさ、マルは何が見たい？」

「ぼ、ボクですか？うーんと、えーつと……」

マルは頭を抱えて悩む。

どれにしようか、というかそもそももつってかつこよさとあと何だ

っけ……とか

そういう言葉がマルの頭の中をぐるぐる回る。必死に悩むマルを見てミラは苦笑して言った。

「じゃあさ、時間が早いものから見ていこうか。ただし同じ部門を見るのは避けて」

「はい、わかりました!」

ミラの提案にマルは笑顔で答えた。

……もうこれ以上頭を悩ませて済むのだから。

「どうやらまずはかつこよさの大会があるみたいだね」

「あ、今前のやつが終わったみたいですよ……?」

マルの視線の先……一つしかない出口から、前のコンテストを見終わった観客が

雪崩のようにどつとでてきていた……!

「うわわわわわー!」

「あ、マル!ど!」

大勢の人間にもみくちゃにされ、しかもいつのまにか混雑の中でミラはマルとはぐれてしまっていた。

「あーあ……はぐれちゃった……」

なんとか人ごみから逃れたミラは、仕方なく一人で席をとる。マルがわかりやすいよう、とった席は入口のそばだ。

「早く来ないかなー」

しかし……合流できたのは、かなり後になってからだっただ。

さて、こちらはマル。

「うっ……ひどい目にあっただ……」

ミラが席をとってからしばらくした後、ふらふらとした足取りでマルは人ごみから逃れた。

10歳くらいの女の子の姿をしたマルにとって、先ほどの人ごみはあまりに窮屈だったのだ。マルは相当ぐったりしていた。

ミラがいないことにはすでに気が付いており、きょろきょろとあたりを見回したが

ミラの姿はどこにもなかった。

「はぐれちゃいましたね……。これからどうやって探しましょうか……」

「だから違うって言うてるだろ！」

「？」

突如、叫び声があった。

好奇心に駆られたマルは声のした方へと駆け寄ってみた。

マルが足を止めたのはトイレの前。

人垣が群れる中で、マルは何とかその小さい体と先ほどの体験を活かして

前のほうへ行つて事態をよく見る。

そこでは、警備員が一人の人物をとりおさえていた。

「おとなしくしろ！」

「だから！オレは違う！」

取り押さえられた人物　18歳くらいのその顔は結構整っていて、

男とも女ともとれる顔をしている。

藍色の髪は短めで涼しげな髪型だった。

ジャケットにジーンズという実に活動的な服装で性格もやっぱり活動的なんだろうな、とマルは考える。

(それにしても、何かこの人したんでしょうか？)

マルの疑問はすぐ解消される。

「オレは！痴漢なんかじゃ！ないっ！」

なるほど、痴漢……。

だがマルは納得がいかなかった。

マルには痴漢というものをあまり詳しくは知らなかったが、知っている限り

この人は痴漢をするはずがなかった。

「嘘をつくな！じゃあなぜ堂々と女子トイレに入って出ようともしなかった！」

明らかにその……おかしいだろうが！」

警察、少し言いよどんで言葉を濁したな。

マルは思わずクスツとしてしまったが一方で取り押さえられた方は必死だった。

「おかしいか!」

「おかしいだろう!」

周りのヤジ馬からもだんだん「何こいつ……」とか

「男が女子トイレに……キモツ」とか言った言葉が聞こえてくる。その言葉が、マルを動かした。

「あの……」

おそるおそる、といったようにマルは警察に話しかけた。

「どうしたんだいお嬢ちゃん?悪いがおじさん今忙しくて……」

「その人、何にも悪くないですよ。むしろあなた達の勘違いです」「……は?」

野次馬も含め、その場にいた全員が驚いた顔でマルを見る。

「だってその人……」

マルは天気の話でもするような感じで言う。

「……女ですよ？」

何をばかな、という顔で警察はマルを見る。

それは野次馬も同じだ。

ただし……唯一、取り押さえられた人物がパアツと顔を輝かせた。

「お前……オレが女だって……わかるのか？」

「はい。あれ、もしかして男ですか？」

「違うよ、オレは女だよ！」

ええええええええええつ！！

警察と野次馬の驚きは廊下中に響き渡った。

「ありがとう、本当に助かったよ！」

メイトと名乗ったその（男と間違われた）女性はマルにお礼を言った。

あの後、警察と「男が女子トイレに入ってきた！」と大騒ぎした40代ぐらいの女性は

何度も何度も腹を立てたメイトに頭を下げていた。

腹を立てるのも当然だ、女が女子トイレに行って何が悪い。

「君の名前はなんだい？」

「ボクですか？マルと言います」

「いい名前だな」

今、メートとマルは共にコンテストの観客席へと歩いている。

「それにしても、どうしてオレが女だってわかったんだ？」

「え、だって……その、えと、胸があるじゃないですか」

少し顔を赤らめてマルは言ったが、一方でメートは苦笑していた。

「……胸があるなんて生まれて初めて言われた気がするぜ。」

マルは目がいいんだな」

ピンポンパンポーン

その時、放送でアナウンスが流れた。

<まもなく、かつこよさ部門コンテスト、ハイパーランクを始めます。>

>観覧を希望するお客様は観客席にご着席ください<

放送を聞いたメートは焦った顔でマルに言う。

「やっべ、始まっちゃっ……」。

そっだ、マル、オレと一緒に見ないか？知っている奴が出るんだよ」

“知っている奴”のところ少し口元がゆがんだがマルは気がつかなかった。

「えーと……」

マルとしては、連れにミラがいるから探したかったのだが……先ほ
ど、コンテストの観客はものすごくいたことを思い出し、時間もな
いうえにこの数の中でミラを探すのは大変だと判断した。

「うん、いいですよ」

「そうこなくっちゃ！」

爽やかに、かつ嬉しそうに言ったメートは笑顔を見せた。

第29話 コンテスト会場での出会い（後書き）

ミラ「そんな……私、はぐれて出てこなくなってる」

マル「ボクがメインですからね」

ミ「なんで！もともとはぐれたのはマルでしょう？」

マ「あははは……まあ、そうなんですけど」

ミ「しかも、なんかいい人と会ってるし！

マル、私を探すのやめてその人とコンテスト見ることになってるし
！」

マ「それは……いいわけできません」

ミ「いいもん！私だって、後で重要な人物と会おう（ことになってるらしい）から！」

マ（らしらって……）

ミ「じ、次回、PENALTY、”コンテスト、開幕”！」

マ「コンテスト、楽しみですー！」

第30話 コンテスト、開幕

「これよりウルトラランクのポケモンかつこよさコンテストを開始いたします！」

私は司会と審査員を務めますビックと申します！」

とうとうコンテストが始まった。

舞台の上には4人の出場者と、先ほどからスポットライトを受けしやべっている初老の男性　ビックがいる。

「これがコンテストなんですネ……」

「おいおい、まだ始まったとはいえないぜ？」

観客席では何かメートが係員と話した後、驚いた顔をした係員に案内され無事席を確保したメートと目をキラキラと輝かせたマルが一緒に座っていた。

ビックはあいさつもほどほどに出場選手の紹介に入る。

「エントリーナンバー1番、カズハルさんです！」

湧き上がる歓声と大量のカメラのフラッシュ。

そのあまりの盛り上がりようにマルは思わずびくつと肩を震わせた。

「す、すごいです……」

「まあ確かに客の盛り上がりはすごいよな。だからこそコンテストに出る奴らも

それにこたえてすごい演技を見せてくれる、ってわけだ」

メートがマルに話す頃にはビックの紹介も終了していた。

しかし

ワアアアアアアアア！！

「なんか、盛り上がりすぎていませんか？」

確かに、エントリーナンバー4番が紹介されたあたりから客のボルテージがさらに上がっている。

不思議そうなマルに、なぜかむすっとした顔でメートは言った。

「今回、あいつ……オレの知り合いではあるが、ふざけたやつなんだが……」

前評判がすごいんだ。だからこそこんなに客が盛り上がる」

「前評判がいい？」

「ああ、あいつはこのウルトラランクの常連なんだが

他のたくましき部門とかでも優秀な成績を出しているんだ」

「そうなんですか……」

その紹介にマルはステージにいるその人物をじっと見つめた。

遠目から見た人物（マルは名前を聞き損ねたのでとりあえず『すごい人』と呼ぶことにした）は小柄で、長い黒髪を右側でくくっていた。

左側はストレートのままだ。それがマルに違和感を持たせる。

（なるほど、“ふざけたやつ”とは、ああいうことなんですね）

マルはそう解釈したのだが、実際は髪型などささいなことだった……

< 第1次審査 ビジュアル >

「まずはビジュアル審査か。ここでポケモンたちがトレーナーによつてドレスアップした姿で登場させるんだ。ここではポケモンの見た目だけでなく、トレーナーのおしゃれのセンスも問われる」

「ううん……奥が深いですね」

マルが唸る。

1番、2番とポケモンが登場していき、ついに、4番となった

「来るぞ」

「4番！オニドリルのスピーン！」

ワアアアアアアアッ！！

スピーンというその名が放送されただけで早くも観客から歓声が上が
る。

それはまさに、観客がスピーンを評価している何よりの証。

そのことに初めてこの名を聞いた誰もが気づいていた。

そして、暗幕があがる。

「！！」

「気付いたか？」

驚きのあまり息をとめたマルにメイトがクツクツクと笑ってステ
ジを手で示す。

「あいつのスピーンは……色違いなんだよ」

マルだけではない。
その場にいた人は全員驚きで歓声を止めた。
通常、オニドリルの体の色は茶色である。
しかし、今ステージの上で翼を広げているその姿は若干黄色っぽく、
堂々としてその場にいた。
スピンの頭にはシルクハット、首には赤いリボンがつけられており、
さらにとがった貝殻のようなものがより“かつこよさ”を際立たせていた。

「あいかわらず、あいつのセンスはすさまじいねえ……」

「どうということですか？」

「どうもなにも、」

メートは再び手でステージを示した。

「このビジュアル審査はさっきも言った通りトレーナーのおしゃれのセンスを問われる。

そして、あいつはこの審査の受けがいいんだよ。さらに言うなら、あいつが今着ている衣装は手作りだ」

「な!？」

マルはもう一度ステージに視線を戻した。

4番のトレーナーが来ている衣装……それは、細部にまで丁寧に、かつ

豪華な装飾が施されたドレスだった。

「あれを、あの人が手作りで……?」

「しかも、ひとりでだ。」

まったく……あきれる他ないぜ」

「すごい……」

ステージの上では、4番のトレーナーが笑顔で手を振っている。その人なつっこそうな笑顔は誰もが好感を持つだろう。

「ふん、上つ面はいいからなーあいつ。」

近寄る人間は多いが、離れていく人間も同じくらい多い」

(それじゃあ全員離れていくんじゃない……)

マルはなぜメートがそんなことを言うのか不思議だったが、あえて何も言わなかった。

そして、ステージでは早くも第2次審査が始まるうとしていた。

<第2次審査 ダンス>

「うわ お……」

マルは特にコメントできなかった。

それほどまでに、スピンのダンスはきれいであり優雅であり威厳があつたのだ。

「優雅だけじゃなく、威厳があつて荘厳なところがポイントだよな
」。

“かっこよさ”部門に出ていることをちゃんと考えてる。たいていのやつらは

うまく踊ることしか考えてないからな」

「なるほど。それにしてもメートさん」

「うん？」

「どうしてそんなにコンテストに詳しいんですか？」

マルが聞くとメートは少し苦笑して答えた。

「こう見えて小さい頃は“女の子みたい”だったからな。コンテストで賞をとるのが夢だったんだ。

それで、この年になってもコンテストは好きなんだよ。さすがにオレがドレス着ると

似合わないしコンテスト出るより見る方が好きなんだけどな」

「へえ〜……じゃあ」

ついでに、とマルはもう一つ質問をする。

「コンテスト出たことはないんですか？」

「……はは、はははは」

なぜか帰ってきたのはうつろな笑いだった。

「メートさん？」

「いや、出たことはあるんだよ……1回だけ。

あの時は野心に燃えてて、ある人物と一緒に出てくれるって言うてたから全然緊張もなかつたんだけど……」

ハア、とメートは頭をおさえてため息をついた。

「そいつがむちゃくちゃすごくてき。オレを含め、その時の出場者は

第2次審査の時点で呆然としてたよ」

「それって……もしかして……」

話の流れから、その“ある人物”に思い当たったマルは口を開く。
そしてそれは、思った通りだった。

「ああ、今出てるあいつだよ。しかも……あいつの本領発揮は、第3次審査だったんだよなあ……」

昔を思い出したのだろう、いやそんな顔をして、頬杖をついていた
メートはステージを見つめていた。

第30話 コンテスト、開幕（後書き）

ミラ「わ、私が出てこない……」

マル「……………」

ミ「ずるい！ずるい！私も出たい！」

マ「心配しなくても、次は出れるらしいですよ？」

ミ「え、ほんと？」

マ「……たぶん」

ミ「たぶんって何さー！」

マ「次回、PENALTY、”その名前は”！」

ミ「誰の名前？」

マ「それをここで言ったら楽しみが減るんじゃないですか？」

第31話 その名前は

マルがメートの解説や話を聞きながらコンテストを見ていた時……
ミラは完全に忘れられていた。
そして、ミラがどうしていたかというところ……

「なんでいないの……」

ミラはフラフラとしながらマルを探していた。
観客席をもう何回も回った。
これで何周目になるだろうか。

「マルどこ〜」

一応今はダンス審査の真っ最中。
当然、かなりの迷惑行為ではあったのだが……彼女にその自覚はない。
だから、何人かの客がじろつとこっちを見てきた時もミラは一切気にせず
ただマルを探していた。

「つ、疲れた……」

少し歩いたところで、身体的というよりむしろ精神的に疲れてダウンしたミラは

とりあえず廊下に出て何か廊下で飲み物を買っことにした。

「どこに行ったのかなあ……………」

ダダダダダダダダ

ドゴーン！！

「あ痛あ！」

「どわっ！！！」

考え事をしていたら突如、前から走ってきた人と激突してしまったミラ。

ぶつかつた二人は頭をおさえて唸っていた。

「！大丈夫かお嬢さん？」

「ハア……………まあ……………」

頭を打つて少しフラフラしていたミラはうつろな声で答える。

「ごめんね、オジサンうつかりしてたよ……………」

そう謝つてきた相手は30代くらいだろうが、まあオジサンと言われるとそうなのかなあ……………というくらいの年のようで、薄い紺色の上着を着ていた。

首にはオレンジ色のスカーフが巻かれており、髪は黒だが若干白髪も混ざっており

サングラスをかけていた。

「おおっと！オジサン、今おっかない人から逃げてるんだった」

「ええ！それは一大事ですよ！」

いまだに意識がはっきりしていなかったミラは少し間の抜けた返事を
をする。

しかし、その反応に彼はにっこりと笑顔を見せた。

「じゃあさ、オジサン今から左に逃げるから、誰かに聞かれたら右
に行ったって話してもらえるかな？」

「了解しましたア……」

ビシッ！とフラフラしたミラが敬礼すると、「じゃあね」と言っ
て謎のオジサンは走って行った。

(ああ……びっくりしたな……)

サイコソーダを自動販売機で買って飲むと、ふらふらしていた意識
がはっきりしてきた。

のどを潤したミラはおいしそうにソーダを半分ほど飲んだあと腰か
けていたベンチから立ち上がると

「さ、またマルでも探しますか」

と元気よく歩き出そうと振り返って

ドシン！

「きゃー！」

みごと後ろにいた人と激突した。

「たた……あつ、すみませ……」

謝ろうとした時、ぞつと寒気を感じた。
なぜなら……ぶつかった相手は、先ほどぶつかったオジサンとは明らかに違う目をしていたのだ。

眉間はしわが寄り、鋭い眼光を持つこの男性はちよつと高級そうな黒に青で波のような筋が入ったコートを着ており、はるかに背が高かった。

太つてはいないが、決してやせてひよろつとしたわけではない、にもかかわらず
見ているだけで圧倒されそうな体格だった。

「おい」

「は、はい!!」

目の前にいた人物はミラを見下すような冷たい視線をして

「オレンジのスカーフをした男を、見なかったか？」

「あ……」

ここまで来るとわかる、彼がさっきのオジサンを探しているのだと。
ミラはとっさにオジサンが言った方向とは逆を指さして言った。

「あつ、その人ならその角を右に」

「そうか」

それだけ言つと男はやや急いだ様子でミラが指さした方向へと走つて行った。

姿が見えなくなつてからミラは大きく息を吐いた。

「あー、びっくりした……。そうだ、早く席にもどろ」

席に行く途中、ミラは「VIPルーム」と書かれたドアの前を通り過ぎる。

なんでも、そこは実力を持つと認定されたコンテスト参加者、またはその人物から正式に招待されたものしか入れないらしい。（一部例外もあるらしいが）

さすがにミラにはここに入る権限はないので、VIPルームではマールを探していない。

（ま、あの子だって入れないのは同じでしょ）

言いつつやっとな自分の席にたどりついて……

ウオオオオオオオオオオオオツツ！！

あまりの歓声に飛び上がった。

「な、何……？」

ステージを見ると、そこではすでに第3次審査が始まっていた。

<第3次審査 えんぎ>

「出ました！スピンの得意技、こうそくいどうからのつばめがえし
！！」

審査員をしているビックに代わる司会者は大きな声で実況し
観客のボルテージを上げることには貢献していた。

「いつもの手だよ、まったく」

「それって、どういうことですか？」

頬杖をつくメートに尋ねるマル。

「こつそくいどうをすると、次のえんぎの順番が1番目になる。

そして、つばめがえしは最初にアピールすると特別目立つ技なんだ。

あいつは昔からあのコンボが好きなんだよ」

「へえ……」

よくはわからないが、目の前の演技が素晴らしいことだけはわかる。
マルは目を輝かせて演技に見入っていた。

「あーっと、ここですべての演技が終了だあッ！！

では、審査員のビックさんより、結果発表が行われます！！」

審査員、ビックがステージの真ん中に立つ。

その後ろには4人の出場者が並んでおり、右端に4番のトレーナーが
ニッコリとした笑顔を浮かべて立っていた。

「それでは 発表します！」

「くそっ！いないじゃないか……」

ちょうどそのころ、オジサンを追いかけていたコートの中の男はイライラとした声をあげていた。

「まったく……私を擬人化させてまで、迷惑をかけるのか……！」

同時刻、コンテスト会場内の2つの場所で、同時に別の名前が叫ばれる。

「優勝は……4番、スピントリット選手……！」

「どこに行った……ツユクサアッ……！」

第31話 その名前は（後書き）

ミラ「そういえば前回から出てきたスピンって、実際に作者が
持ってるポケモンみたいね」

マル「色違いでコンテスト、実際にやってるってことですか？」

ミ「そうみたいね」

マ「というか、ツユクサって、あのおじさんだったんですか!？」

ミ「意外だよね」。

でも、一応原作では知らないってことだから

マ「ここで話すのはなし……ですか？」

ミ「そういうこと。まあ、これから少しずつわかるだろうし」

マ「次回、PENALTY、”リットとメート”」

ミ「名前の由来はリットルとメートルらしいよ？」

マ「へえ……」

第32話 リットとメート

ロビーは人であふれていた。

いや、ただあふれていただけではない。その人々はある一点に集中して集まっていた。

その中心には今回のコンテストの優勝者、リットがいた。

「あ、ミラー！」

「マル！どこ行ってたのよ！」

ロビーに戻ると、やっとはぐれていた二人は再会することが出来た。マルの横にいたメートはミラをみてマルに向かって聞いた。

「この女の子が、マルの連れかい？」

「そうですよ！今日はありがとうございました」

ペコリ、とマルが頭を下げるとメートは

やはり苦笑した後照れたように頭をかいた。

「おいおい、そんな大層なことはしてないよ。

だからそこまで頭をさげられても結構照れるんだよなあ……」

「わー照れてるー」

「いや、そこはからかうなよ！」

メートとマルが言い合うのを見てミラは自然と頬が緩んでいた。

(マルにしては意外だなあ。結構かつこいい人と仲良くなってる…。
でも、マークが一番…。だと思っけど)

最後の言葉は推量になってしまっ。

なにせ、マーキュリーの本当の顔はミラもまだ見たことはないのだ。

「むう……」

「どうしたの？ミラ」

「え？あ、いやなんでもないよ。」

それにしても……あの人ごみは何かな？」

「あー、あれな……」

メートが少し困ったような顔でちらりと人ごみのほうを見た。

「さっき優勝した、リットがインタビューを受けてるんだろ。」

マルには話したが、リットは結構コンテスト業界では名の知られた存在だからな」

「リット？」

その名前にはどこか聞きおぼえがあったのだが……

結局、ミラは思い出すことが出来なかつた。

「うーん……とりあえず、あっち行ってみよう？」

「いいですよ！」

「あー、いや、うん……」

マルは乗り気だったが、メートはどことなく嫌そうな顔をしていた。

「今回もみごとな演技でしたね！」

「このまま今日はマスターランクにも出るのでしょうか？」

「今のお気持ちを一言でお願いします！」

「ズバリ、その演技の秘訣は何でしょうか？」

たくさんインタビューアールやカメラマン、さらにはファンや野次馬で大勢の人間がリットの周りに集まっていた。

その中心にいるリットはにっこりとしてインタビューに答えていた。

「私は凄くありません。ポケモンがすごいのです。」

だから、彼らの演技を私はより映えるようサポートしているだけにすぎないんです。

ポケモンたちの演技にトレーナーも全力で応える。

それが大事だと思って、練習をがんばっています」

おおー、という歓声が周囲の人物から出る。

そんなとき、ふと、リットは人ごみの中にある顔を見つけた。

「あ！」

そういうとインタビューをほどほどで切り上げ、人をかき分けてその人物のもとに向かう。

「来てくれたんだね！メート！」

メートにかけよるとリットは抱きつこうとメートに向かって両手を

どこか恨めしそうにメートは呟いた。
マルとミラはその光景をぽかんとした顔で見っていたが、マルがあることに気がついた。

「えつと、今“妹”っていいましたよね？」
「……そうなんだよな」

いやそんな顔をして頭をかくメート。

「こいつ、オレの兄なんだよ」
「へえ、お兄様……！！？」

マルが突然目を見開いて口を手で押さえる。

「どうしたの？」

ミラはまだ気が付いていない。
マルはゆっくりと確認するようにリットに聞いた。

「あなたは……その……男、なのですか？」
「ん？そうだよ。私はメートを愛する兄であり男だが？」

ドレスを着た姿で手を腰にあてきっぱりと言い切った。

ええええええええええええええええつ！！？

「この変態シスコンがあッ！！」
「ぎゃふん！」

みんながまたしても驚きで叫ぶ中、リットはメートに膝蹴りをくら

い悲鳴をあげた。

第32話 リットとメート（後書き）

ミラ「まさか兄妹だったなんてね……」

マル「すると、メートも変態なんですか？男装しているし」

ミ「それは違うでしょ。

あれは、変態の兄が迫ってくるのに耐えかねて

少しずつ女らしさを捨てて行ったんじゃない？兄を遠ざけるた

めに」

マ「苦労してるんですね……」

ミ「まったくねえ……」

マ「次回、PENALTY、”コンテストの頃あったこと”」

ミ「やっとマーク視点が復活みたいね」

マ「じゃあ、しばらくボクたちの出番は……」

ミ「……まさか、お預け？」

第33話 コンテストの頃あったこと(前書き)

今回は短めです

第33話 コンテストの頃あったこと

「!?!」

『どうしたの?マーク』

「いや、ちよつとね……」

何だろう……急に背筋がゾクツときたんだけど、何があったんだ?なんかこう、なーにか忘れているような……

『本当に今から行くの?ミラ達が帰ってきたらどうするの?』

「まあ……怒られはしないでしょ」

今から僕たちは、ここヨスガシティにある教会に行く。
本当は明日にでも行くつもりだったんだけど……

「すみませーん、マーキュリーさんですよねー」

「え、あ、はい!」

ホテルでぐーたらしていた僕のもとに手紙が届けられたのはミラ達がコンテストに行つて少ししたところだった。

「これを渡すように頼まれましたね。では失礼します」
「どうも……」

封筒には何も書かれていない。

ただ、代わりに十字架の印の封ろつが押されていた。

「十字架……」

『ひょっとして、教会？』

エテぼうに促され、僕は封筒を開いた。

中には、二つに折られた便箋が一枚入っていた。

『読んで読んで！』

子供みたいにエテぼうがせつついた。

ああ、エテぼうの言葉がわかるってこういう時にはいいよねえ。

「はいはい、わかりました」

そんな幸せをかみしめながら僕は手紙を読み始めた。

<拝啓 マーキュリー様

はじめまして、ラスカーと申します。

急にこのようなものを受け取り驚いたかもしれません。

あなたのことはブーケから聞きました。

そして実を言うと、私もあなたと話がしたいのです。

急な話ですが、今日の昼に会えませんか？

無理でも連絡していただく必要はありません、私が急に頼んだのですからね。

では

ラスカー>

「驚いたなこりゃ……」
しばらく僕はその手紙を読み返していた。

まさか向こうからオファーがあるなんてね。
本当はミラ達もつれて行きたかったけど……まあいいか。

「よし、行こうか」
『うん！』

エテばうはいつもの通り俺の肩に乗る。
……最近肩が凝っているというのは、内緒だ。
んじゃ、行きますか！！
僕はホテルを出ると歩き始めた。
といつても、そんなに歩く必要はなかった。
教会は静かに町の端にたっているのだから。

第33話 コンテストの頃あったこと（後書き）

ミラ「そんなことがねえ……」

マル「ストーリーがまた動き始めましたね。
でも、ボクがメインの話が……っ！」

ミ「あなたの時代は終わったのよ」

マ「はううっ!?!」

ミ「次回、PENALTY、”祈る少女”」

マ「少女って……」

ミ「何よ、また女の子の新キャラ!?!」

マ「ミミラ、どうしてそこまで悶絶するんですか……!?!」

第34話 祈る少女

教会。

それはとても神々しく僕達の前に立っていた。

「なんか……緊張するな」

『そうだね……』

ただ入るだけなのだから、緊張するはずはないのだが。

『ほら、待ってるよラスカーさんが』

「お、おう」

エテぼうにせかされ、僕は教会へと入って行った。

うっわ……

思わず絶句してしまった。

静かだ。外のような音に囲まれた世界ではない。

奥の方にはステンドグラス。

おそらく、あの絵は形からしてテンガン山だろう。

『あれ、あそこに……』

「!?!」

エテぼうが口を開いたのとステンドグラスの前にひざまづいていた

人が
さつとこつちを見るのはほぼ同時だった。

「あ……驚かせてすみません」

とりあえず僕は謝ったの……だが

(……なんて目だ)

その目からは……生氣というものが、まるつきり感じられなかった。
短い茶髪をした女の人で、年は……18歳前後だろうか。
質素な服を着ていて、僕達を首を傾げた様子で見っていた。

「……………」

「え、えーと……………」

参ったな……。

この人、ただ僕を見ているだけで何もしゃべってくれない。
この状況、どうすればいいの……？

「どうしました、イブ。誰か来ているのですか？」

その時、深い声がした。

「おや、これはこれは……………」

奥の部屋からやってきたのは、黒いマントで全身を覆った人だった。
黒く大きな帽子を手にしており、その帽子には黒い羽がついている。
胸には銀の十字架をかけていた。

「来てくださったのですね、マーキュリーさん」
「どうも……」

僕はゆっくりと礼をした。

間違いない、この人が……ラスカー神父だ。

「あの……」

ん？今の細かい声は……？

「神父の……お知り合いですか？」

「そうだ」

ラスカーはイブと呼ばれた少女の方を向いて、返事をした。
なるほど、今の声はイブだったのか。

それにしても、なんて……弱々しい声なんだろう。

「どうかしたかね？」

「あ、いえ、なんでもありません！」

考え事をしていた僕はラスカーさんの声で現実を引き戻された。
まったく、こういうときって結構背筋が伸びちゃうよね。

「……………」

興味を失ったのか、イブは再び目を閉じると手を組んだ。

その先には淡い光を放つステンドグラス。

一体……何を祈っているんだろう……？

「マーキュリーさん、こちらへどうぞ」

僕はラスカーに呼ばれるまで、この祈る少女を見つめていた。

「まさかこんなに早くお会いできるとは思っていませんでした」

部屋に僕を案内すると、僕に席をすすめラスカーは僕の目の前に座るなり

そう言った。

まあ、僕だってまさかこんなに早く、しかもオファーをもらって会えるなんて思ってたけどさ。

「えっと、さっきの人は……」

とりあえずまずは無難(?)な話題からだ。

「イブのこと、ですか?」

「はい。あの目……生氣というものがまったく感じられませんでした。

一体彼女は……?」

「あまり他人のことを詮索するのは感心しませんな」

わ、早くも厳しいこと言われちゃった……!

「す、すみません!」

「……そこまで謝る必要もないと思うのですが。」

しかし、覚えておいてください。他人のことを無理に知ろうとしても、他人を傷つける結果になりかねないことを」

「はい……」

うう、神父さんがそんなこと言うとなんか説得力がある。

ラスカーは遠くを見つめぼつりと漏らした。

「……私も詳しいことは知りません。ただ、私が彼女に初めて会ったときから

彼女はあんな目をしていましたよ。

前に彼女から聞いたのですが、なんでも愛する人を亡くしたとか。

彼女の祈りは、きっとその相手に向けられているのでしょうか……」

……そうだったのか。

僕はまだ経験したことはないのだが、大切な人を失うというのは……
どれほどつらいことなのだろう……。

「……………」

押し黙った僕にラスカーさんは少し明るい声をかけた。

「さて、そのくらいでよろしいでしょうか？」

私にも話したいことがありますので」

「え？」

少しお待ちくださいとラスカーは席を立つと、カチャカチャとした音と共に

ティーカップとポットがのったお盆を持ってきた。

2つのカップにポットから紅茶を注ぐと、どうぞと僕にすすめた。

「さて、話というのはですね」

紅茶を少し飲むとラスカーは口を開いた。

「大きく二つ。まず一つは、あなたの体についてです。何のことは……もちろん、お分かりですね？」

罰のことを言っているのだろう。

そして、ラスカーの話が始まった……。

第34話 祈る少女（後書き）

ミラ「私、ふと思ったんだけどさ」

マル「どうしたんですか？」

ミ「もともとはジム戦をしてまわるのがマークの目的だったでしょ？
でも、今はツユクサのポケモンと会ってばかり」

マ「それはそうだけど……」

ボクは、これはこれでいいんじゃないかって思います。
過程次第では結果はいい方向に変わりますよ？」

ミ「それならいいんだけど……」

マ「それに、ジム戦よりもっと激しい戦いに巻き込まれることにな
るらしいよ？」

ミ「それはそれで問題ね……」

マ「次回、PENALTY、”ラスカーの頼み”」

ミ「頼みなんか聞かなくてもいいのに」

マ「助け合いは大事ですよ？」

第35話 ラスカーの頼み

「何から話せばいいのでしょうか……。」

私もまた、ツユクサというトレーナーのポケモンの一体なのですがね」

「ポケモン……あなたもですか」

「ドンカラスです。はは、あくタイプのポケモンが神父というのもおかしな話ですよ」

ラスカーはひとり笑うと再びカップに口をつけた。

「ブーケから聞いたのですが。……あなた、もう体の一部は人間に戻っているそうですね」

「え!？」

え、嘘、すでに戻ってるだつて!？

「しつぽがないでしょう。それに、気づいていないのなら教えてくださいがあなたの足はすでに青色が消えかかっています」

「気付かなかつた……」

自分の体なのに、全然気づいていなかった。

え、もとに戻るのって、なんかこう……劇的なイベントじゃないのかなあ？

「ふふ、嬉しさが顔に出ていますよ?」

ラスカーに指摘され、慌てて僕は表情を引き締めた。

指摘されたらなんか恥ずかしいじゃん。

「……とりあえず、まずはそれが1点」

「もう一つの話とは何ですか？」

僕が尋ねると、ラスカーは少し外の様子をうかがった後、おもむろに切り出した。

「先日、あなたはクログネシティにいましたよね？」

「は、はい」

あれ、なんで知っているのかな？

「知り合いがいましたね。とにかく、重要なのはそこではありません
ん。」

クログネシティにいた時にバトルをしたというのは本当ですか？」

「本当ですよ？でも、それがいつたい……？」

何だって言うんだ？

しかし、ラスカーにとっては重要なことだったらしい。

ふうー、と息を吐くと再び口を開いた。

「では、そのバトルの相手……何者だったか、覚えていますか？」

バトルの相手……って、あのゴゴリとかいう男とリムとかいう人か
な？

いや、より正確に言うなら……

「DORA、でしょうか？」

どうやら、それがラスカーが待っていた一言らしかった。

「……やはり、ご存知でしたか。その組織の名前を」

ラスカーはゆっくりと頷いた。

DORA……この前は正直かかわりたくなかったからクナイに調べてもらおうとは思わなかったけど、何か大事なことなのだろうか？

「ラスカーさん。DORAというのは、いったい……」

「……一言でいえば、犯罪組織です。」

カントー地方で言うロケット団とか、この辺で言うならギンガ団がそうですね」

ギンガ団、という言葉に一瞬キクツとする。

う、すみません、僕もとギンガ団です、ようするに元犯罪組織のメンバーです。

もちろん、これを口にするほど僕はバカではない。

「DORAは本来、その存在を秘密にしようとしています。」

したがって、ギンガ団といったようなやつらは同じ服装をしたりといった

比較的特徴的な面がありました、これはDORAには見られませんが、

……特徴的で悪かったですね。

しかし、存在を秘密にしようとして……

あのハガミとかいう男、ミラに聞かれてあっさりDORAという単語を口にしてたけど。

うん、たぶん、口が滑ったんだろうな。

「あなたにこの話をしたのは……他でもありません、DORAを壊

滅する手伝いをしてほしいのです」
「丁寧に断ります」

.....

あれ？僕、なんか変なこと言ったかな？
確かに僕自身驚くほど素早く即答しちゃったんだけど、おかしい？
だって、ラスカーの目が点になっている。
（。。。）みたいな？

「あ、あの」

約15秒後、正気を取り戻したラスカーは2、3度瞬きするとまた聞いてきた。

「なぜ、でしょうか？」

「だって……そういうのにかかわるとろくなことがないので」

なんとというか……あきれたような視線が痛い。

だって仕方ないじゃないか、体験からしてそうなんだから。

「仕方ありません……」

ラスカーはまだあきらめられないようで、僕にこんなことを言ってきた。

「……本来は言うつもりはなかったのですが、あなたに協力を依頼したのは、厳密には私じゃありません」

「……なんですと？
じゃあ、誰が？」

「ツククサです。ブーケからあなたのことを聞いて、会うことがあれば協力してもらおうよう頼んでくれと言われたのです」

「……
ツククサ。2、3年かかったとはいえ罰を受けたが元の人間の姿に戻ることが出来た人物。
その人が、僕に……？」

「なぜ、僕なんですか？」
「簡単なことです。あなたも、罰を受けた一人だからです」

「？」
いや、確かにそれはそうなんだけれども、なぜそれがDORAを壊滅させる手伝いの候補に挙がるのかな？
そこを僕はラスカーに聞いてみた。

「どうして、罰を受けた人物の助けがいるんですか？」
ラスカーの声は少し自信なさげだった。

「ツユクサの考えたことですから、私にも詳しくはわかりません。しかし、私にも一つだけ言えることがあります。DORAのボスはあなたやツユクサと同じ、罰を受けた人間なんです」

第35話 ラスカーの頼み（後書き）

ミラ「どんどん複雑になってきたわね……」

マル「作者としては、早くバトルをしたいそうですよ？
というわけで、次はバトルかな？」

ミ「」かな？」なのね……」

マ「予定は予定であって、絶対じゃないですから……」

ミ「次回、PENALTY、”不穩”」

マ「最近更新遅れ気味ですが、どうかご承知ください」

第36話 不穩

僕は教会を出た。

「今すぐには言いませんが……良い返事を期待しています」

一度はDORAの壊滅に協力するという話を断ったけれど、その後ラスカーが話した事実は僕の心に変なもやもやを残してしまっただ。

「DORAのボスはあなたと同じ罰を受けた人間です」

もちろん、まだ完全に元に戻ったわけではないだろうがそれでもやはり興味がある。というのも

(悪事を行っている人間の場合、どれくらい人間に戻るのだろうか)

それが気になって仕方がなかった。

ツクサは「ポケモンとの関わり」に何かを見出したらしいけど、ならば

悪人はどうなのか。

「難しいなあ……」

頭を抱えながら僕はとりあえずホテルに向かって歩き出す。

『難しいこと考えてもいいことないよ?』

「でもさ、罰を受けた人間ってそう多くはないはずでしょ?」

だったら、ある意味いい手掛かりを得るチャンスなんだよね……」
『やれやれ、ご苦労様です』

とか何とか話しているうちに、あと少しでホテルというところまで
きた。

「帰ったら……何しようか？」

『とりあえず夕食でも準備すれば？
もうそろそろ日が暮れそうだし』

「ああ……」

返事をして角を曲がった時、

「？」

あれ……ホテルの前で、なんか人が集まっている。

「なんなのあなた達！」

少女の声、そして次の瞬間、たくさんのポケモンが周りに現れた。
いや、今の声は……

「ミラ!?」

人が集まっているんじゃない、人に囲まれているんだ!!
僕の歩調は急に速くなった。

「これは……ピンチってやつかな？」

「何ふざけたこと言ってるんだよくそ兄貴」

ミラ、マル、リット、メートの4人は一度マーキュリーたちが滞在するホテルへやってきたわけだが、ホテルを目前にして彼らは複数
の人間に囲まれていた。

「……………」

「こりゃあ……大人しく開放する気もなさそうだね」

「なんなのあなた達！」

ミラが叫んだのと一斉にモンスターボールが投げられたくさんのポケモンたちが出てきたのはほぼ同時だった。

「ヒポポタス、とっしん！」

一人の男が叫ぶとヒポポタスが襲いながらもミラ達の方に突進を仕掛けた。

「!?!」

とっさにミラが手で頭を覆う。

「エテぼう、スピードスター！」

「ヒポ!？」

だが、横から飛んできたによりヒポポタスは横になぎ倒された。

「大丈夫か!？」

「マーク!!」

走ってきた人物の姿を見るとミラ、マルは喜びの声をあげた。

「エテぼう……ねえ」

ふうん、と笑みを浮かべた人物も、一人。

危ないところだった……。

ミラに向かって突進してきたヒポポタスをエテぼうのスピードスターで

止めたのはいいんだけど、どうやらそれであきらめてはくれないようだ。

まだポケモンもいるし……

「フローゼル！」

別の一人がフローゼルに指示をする。

「アクアジェットだ！」

「フロオ……!!」

水の勢いで一気に加速したフローゼルはその速さでエテぼうへ体当たりを放った。

『ぐううっ……』

「エテぼう!?!」

倒れたエテぼうに僕は声をあげた。

「がんばれ、エテぼう!」

その時、横でおとなしめの服装にスカートのどこか見たことがあるような人が口を開いた。

「エテぼう、か。やっぱり聞き違いじゃなかったみたいだね」

「~~~~!!masdjsふいdgsdかjsw!?!?」

声を聞いた途端、僕の思考は即座に機能暴走を起こし口から出る言葉も支離滅裂なものになってしまった。

なんで、なんで……こいつが……ッ!

「どうもー。みんな大好き、妹大好きのリットです」

僕に向かってにつこりと笑顔を向けるリット。

しまったこいつはこいついうやつだった、スカートだからって油断したよ

この変態がスカートをはいていることにはもはや何の疑念もないけれど

どうしてこいつに!

「はいはい、いろいろと話したいことはあるけど、まずは目の前の敵に集中しましょう」

僕には話したいことなんかないぞ……。

僕は決意した。

早くこのバトルを終わらせて一刻も早く逃げよう。

第36話 不穩（後書き）

ミラ「マーキュリーって、本当にリットのことを苦手なのね……」

マル「ボクには少しわかる気がします」

ミ「私も……」

マ「でも、襲ってきた連中はいったい何者なんでしょうっか？」

ミ「それは、まあ、予想はつくけどね……」

マ「？」

ミ「次回、PENALTY、”闘争”」

マ「作者さん、やっとバトルに入れましたね」

ミ「満足したでしょ。これからもっと大変になるのも知らないで……」

第37話 闘争

いかにしてこの場を離れ、逃亡するか……。

(最悪なことに)再会してしまったリットを前に僕はそう考えていた。

え、バトルを仕掛けて他の人たちはどうなのかって？

……はつきり言って問題ない。

「さて、久しぶりにマーキュリーにあったことだし、早くいろいろ話したいから……」

いいか、僕は決してお前と話したいことなんかないからな。

「……本気出しちゃおっかなぐん」

にやりとしたリットに周りにいた面々はなぜか戦慄を覚えた。

(まさか……“アイツ”を使うのか?)

あいつがとりだしたモンスターボールに僕は注意せずにはいられない。

もし“アイツ”を使うなら、巻き添えには注意しないと……。

「エレガントに、かわいらしく。

……参りましょう、チューン！」

「ピチュ！」

リットの投げたモンスターボールから現れたのは、ピチュー。

リットの「かわいさ」コンテスト担当のポケモンだ。

……よかった、“アイツ”ではないらしい。

「……は、何が来るかと思ったらピチューかよ!」

ハツハツハ!と周りからは馬鹿にしたような笑いがおこる。

……おいおい、知らないのかよリットの本モットーを……。

「立花闘争」

ぼそりと呟きやがった……。

そうなんだよな……。リットの本モットーは「立花闘争」。

いかなる味方にも花が立つかのように魅せ、

……いかなる敵にも容赦なく戦う。

「……チュー」

「フローゼル、もう一度アクアジェットだあ!」

「フロオ!」

再びフローゼルは水の勢いで今度はチューンへと襲いかかる。

「はっ、ピチューなんざ一撃だね!」

馬鹿にした声と

「フロオ!」

フローゼルの声が響いたが

「無駄だね」

フローゼルがチューンにあたったと思われた途端、
その姿が、消えた。

「今のは……みがりー!?」
「ピチュ!」

攻撃した身代わりに驚いていたフローゼルの横から、
突如現れたチューンは体当たりを放った。

「よし、チューン。そのまま天使のキツスです」

フローゼルに飛びついたチューンは

「チュ?」

フローゼルにかわいらしく、しかし激しいキスをした。

「~~~~!!」

フローゼルは混乱してフラフラとし始める。

「フ、フローゼル!?」

「ヒポポタス、あのピチューにすなじごくだ!」

「ヒポポ……!!」

げ、あのヒポポタス、まだ動けたのか!?
しかもチューンの方を向いてる……!!

「エテぼう、スピードスター!」

『はいさー!』

エテぼうの放ったスピードスターが、ヒポポタスを弾き飛ばした。

「ヒューー 私のチューンを助けてくれたのか？」

「助けたのはチューンだ！お前じゃない！」

冗談でも、僕はこいつを助けるとは言わない。

「ハハハ、相変わらずだねえ。

君が強情なものも、私が嫌われているのも、な」

嫌われなくなかったら、まずその変態癖とかようするに性格を改める。

僕は切実にそう言いたい。

「じゃあ、そろそろ終わらせちゃおうか。

君はそのヒポポタスを頼むよ。チューンとは相性が悪いからね」

へいへい……

「エテぼう、スピードスター×3!!」

『おっけえええ!!』

エテぼうが尻尾を3度ふるつ。

『ほい、ほい、ほい!!』

「ヒポポオ！」

大量のスピードスターをくらい、

これまでもすでにダメージを受けていたヒポポタスは耐えられな

かった。

「ようし！チューン、かわいらしく尻尾を振るんだ」
「チュチュ」

チューンが尻尾を振ると、混乱したままのフローゼルの防御力が下がる。

「フ、フローゼル！」

「たまにはかつこよく決めましょうか……」。

チューン！ボルテッカー、GO！」

「ピチュチュチュ！！」

チューンが走りだすと、その体が電気に包まれる。

その威力はどんどん増していった……！！

「ボルテッカー！？」

「そんなの覚えさせてたのか！？」

これは僕も知らなかった……。

ボルテッカーを覚えさせるには、えっと、確かでんきだまを持ったピカチュウがタマゴを産むことで生まれてきたポケモンが覚えてるんだよね……？

「チュウ！」

「ロー……！！」

ただでさえ防御がさげられているのに、
水タイプのフローゼルには電気タイプのボルテッカーは効果抜群だ。

「ち、ちくしょお……!!」

「逃げるぞ!あの方にも何か知られたら……」

他にもポケモンはいたのだが、手が届かないと見たのか
逃げてしまった。

「逃げちゃったねー」

「逃げちゃいましたねー」

ミラとマルは残念そうにそう言った。

「さあ!邪魔者もいなくなったことだし、存分に話をしようじゃないか……!!」

「断る!!」

やだよリットと話なんて!

それにしても……

「あの方にも何か知られたら……」

あの方って誰?

まさか……DORAとか?

「厄介なことになるかもな……」

僕はつい呟いていた……。

「……………」

ラスカーは教会の窓から外を見ていた。

コツッ…………コツッ…………

近づいてきた足音に気付くと、ラスカーは振り向いて足音の主を見た。

「おや…………どうしたのですか？もう帰ったのかと思いましたが…………イブ」

足音の主はイブだった。

「……………」

いつもの通り何も言わず、無言のままイブは右手をあげた。そして手に持っていた物を床に落とす。

コロココロン…………

「サンダース。グレイシア」

床に転がった2つのモンスターボールから現れたサンダースとグレイシアは

ラスカーの前後に周りに彼の逃げ場を封じた。

「こ、これは…………！？」

「あなたもツククサの手持ちだったのですね…………ラスカー神父」

「！！？」

それはイブに話したことはない。
だとしたら……

(マーキュリーさんとの会話を、聞かれていたということでしょうね……)

ラスカーはすぐにそう悟った。

(だったら……)

「あなた達がDORA討伐を狙っているのは大したことではありません」

実に普通に、イブはそう言った。

「やはりそれも聞いてしまいましたか……」

「はい。……もっとも、心配は不要です。」

それほど脆弱な組織でもありませんので」

……その言葉が何を意味するか理解するまで、少しかかった。
だが、理解したとたん、ラスカーの顔は苦悶に歪んだ。

「まさか……君は……」

「聞きたいことがあります。教えてください」

DORAの一員のイブは、ラスカーに詰め寄った。

「……2年前の出来事について、話していただきましょう」

第37話 闘争（後書き）

ミラ「まさかあの人もDORAだったなんて……」

マル「それだけDORAはいろんなところに潜んでいるってことで
すね」

ミ「これから私たちそんな人たちを相手にするんだ……」

マ「本気でやらなきゃ、勝てませんね」

ミ「次回、PENALTY、”同じ”」

マ「何と何が同じなんですか？」

ミ「それは次回のお楽しみですよ」

第38話 同じ

「むうつ!!」

ラスカーが手を広げると、その腕がたちまち黒い羽に覆われ、翼となる。

「逃がしませんよ……サンダース! グレイシア!」

イブが指示すると、サンダースとグレイシアがドンカラスに姿を変えたラスカーへと襲いかかる。

『む……うつ!!』

しかしラスカーが即座に飛び立ったのに対し、イブは的確に彼女のポケモンへと指示を出した。

「グレイシア、氷の壁で退路を断ちなさい」

「ヒヨオオオ!!」

グレイシアがふぶきを使って氷の壁を作り、ラスカーの退路を断つ。

『こしゃくな真似を……』

「サンダース、10万ボルトでたたき落として」

「シヤア!」

サンダースの体が光に覆われ、次の瞬間、猛烈な電撃がラスカーを襲った。

『ぐああああっ!!!』

「なぜ、私がこの2体を出したのか考えてみてください……。飛行タイプには電気タイプか氷タイプだと、相場が決まっているでしょう?」

イブは無表情のまま淡々と告げる。

彼女はこのような時になっても、その顔に表情が宿ることはなかった。

『それくらい、知っていますよ!!!』

だが、ラスカーが翼で風を放つと、

「シア!?!」

「グレイシア!?!」

その攻撃を受けたグレイシアがたった一回で戦闘不能になりイブの表情こそ変わらなかったものの、その声にはわずかな驚愕が混じっていた。

「そんな、たった一発だけで……」

『ねっぷうです。……ふう、わざわざイッシュに行つてまで覚えた甲斐がありましたよ』

ねっぷう。

それは炎タイプの技であり、ラスカーが使える唯一の対氷タイプの技だった。

「ねっぷうですか……。しかし、それではサンダーには

「一撃というわけにはいきませんか？」

イブの言う通り、サンダースは電気タイプだ。

氷タイプのグレイシアと違って、ねっぷうではそう簡単には倒せない。

一方で、サンダースはすでに一度10万ボルトをラスカーにあてている。

ラスカーが不利なのは言うまでもない。

「それじゃあ、オジサンが参加しちゃおっかな」

「ずいぶんとたいそうな再会だけど……まあいつか」

「誰ですか!？」

イブが後ろを振り返ると、教会の戸口には二人の人影が。

一人は紺色の上着にオレンジのスカーフ。

もう一人は長い金髪をしていて、紫色のうすい羽衣のようなベールをまとった幼顔の女性だった。

『これはこれは……嬉しい誤算とでも言いましょうか』

「オジサンは誤算なのかい？ 悲しいことを言うね、ラスカー」

「でもさでもさ、ルナ達が来たから、もー大丈夫だよ」

そして、スカーフを巻いた男はイブの方を見る。

「どうも。はじめまして、ツユクサと申します」

「ツユクサだと……ッ!」

その瞬間、初めてイブの表情が変わった。

『おや。あなたが驚いた顔になるのを、初めて見ましたよ……』

そこで力尽きたのか、ドサリ、と音を立ててラスカーは床に落ちて気を失った。

「んじゃ、ここからはオジサンたちに任せなさい」

気を失ったラスカーに優しい声をかけるとそのひとさし指がするどくなり、目が黄色くなった。だが。

『邪魔はさせない!!』

叫んだサンダースがイブとツユクサとの間に割り込んだ。そのサンダースを見て

「ルナ」

たった一言だけ口にした。

「わかったわかった!」

ルナが右手に集中すると、その手が青白い何かに包まれ

『え?え?』

おなじようにサンダースも包まれる。

「ほい!」

『きゃあああああ!』

そのままルナが右手を振ると、同じ方向へサンダースは猛スピードで吹っ飛ばされ、

ドガアアーン！！

壁にたたきつけられて気を失った。

「……………」

沈黙したイブは倒れているサンダースとグレイシアをモンスターポールに戻した。

そしてまっすぐツククサを見る。

「お疲れ様、二人とも…………」。

今のは、サイコネシスですか？ずいぶんと強力でしたね」

そのまま二人に背を向ける。

「ねえねえ、お姉さんも戦わないの？」

「…………？」

いぶかしげな顔をしたイブにさらにルナは言った。

「だってだってお姉さんルナと同じでしょ」

「……………！！」

一度目を見開いたが、それでも挑発には応じずイブは教会から出ていった。

「残念残念、帰っちゃった」

「……………」

足元のガレキを蹴ったルナに対し、ツユクサは黙ったままイブの後ろ姿を見つめていた。

第38話 同じ（後書き）

ミラ「また変な新キャラが……」

マル「どうやらツユクサと一緒にいるみたいですね」

ミ「もっとも、出会ったのは割と最近らしいよ？」

マ「そうなんですか……」

でも、それこの場で言っちゃっていいんですか？

ミ「大丈夫よ、たぶん」

マ「たぶんって……」

ミ「次回、PENALTY、”リットの秘密”」

マ「リット……ですか？」

ミ「どうせまた、しょうもないことでしょ？」

マ「そうでしょうか……？」

案外、重要なことかもしれませんよ……？」

第39話 リットの実験

襲撃者を退けた僕たちは、一度僕が借りた部屋でとりあえず会議を行った。

「それでね、もうコンテストに来てくれたとわかった時は本当にうれしかったよ、さすがは私の妹だ、そのかわいらしいお嬢さんにコンテストを解説できるほどになっているなんてね」

……しばらくはリットが妹^{メイト}について語るのを嫌というほど（というか本気でそう言いたかった）聞かなければならなかったが。

「……………」

「……………」

僕の横でミラとマルがうんざりした顔になっている。

うつろな目になっているマルに対し、ミラは目で「ポケモンになるからモンスターボールに戻してくれ」と訴えていた。

……「ごめん、そうしてやりたいのは山々だけど、さすがにリットとメイトの前では戻せないんだ……………」。

「ねえ、聞いているのかいマーキュリー？」

「誰も聞いていないと断言してやる」

それはこの世の真理だ。

「しょうがないなあ……………」。

じゃあ、もういいよ、君の話をしてくれ。

……さっきの襲撃者についても、何か知っているんだろ？」

……さて、どうしたものか。

メートのことは僕はよく知らない。だけど、リットのことなら

(不本意だが)よく知っている。

コンテスト……そして、バトルにおいて、すぐれた才能を持っている奴だ。

なら、話しておくのもいいかもしれない……。

「わかった」

「ん？」

不思議そうな声をしたリットに僕はもう一度言ってやった。

「わかった、話すよ……」

僕はとりあえずDORAについて話した。

クロガネシティでのこと、さっきラスカーから聞いたこと……。

全てを聞いた後、それまで黙っていたメートが初めて口を開いた。

「だいたいのはわかったぜ……」。

「ただだよ、お前……本当に、そのヤバそうな組織と戦っているのか？」

正直、オレならお断りだな」

「もちろん最初は僕も断ったさ。

「ただ……こつしてミラ達も襲われたのなら、僕はもう何もせずにはいられないんだ」

そこでリットが身を乗り出す。

「もしかして、私のことが心配なのかい？」

「いや、おまえは“達”に含まない」

「そんなさびしいこと言うなよ、ホントは心配なんだろう？」

「全力で否定する」

またコイツは……

本気で会話なんかしようとは思えん。

「まあ私は君に協力しても構わないよ。

もつとも、君にその気があるのなら、ね」

……………。

協力してくれるのはありがたい。うん。

ただ、その場合ツククサにもそれを伝える必要がある、ってことだよね？

それだけじゃない、それ以前に協力するなら……

「だから、何か私に教えとかないといけないことがあるんじゃないかい？」

リットが探るような目をする。

その視線はマフラーなどで顔を隠している僕の方に向けられていた。

……………マズイ。

僕がポケモンになっていることに気が付いているのか……………？

そう思った時、リットはさらに問題発言をした。

「悪い。メート、少し席をはずしていてくれないか？」

「……………！」

異常事態だー！

このシスコンが、近寄るならまだしも妹であるメートを席から外すなんて……

「お、おう……わかった」

メートにもこの異常さがわかったのだろう、首をかしげながらも大人しく部屋を出ていった。

「……………」

「……さすがに、驚くだろうね。」

それはそうさ、この私が愛する妹を部屋から追い出したんだからね」

本当に僕は驚いたよ。

なにせ、それはコイキングがはねるだけでカイリユを倒すようなものだ。

「そう言えば、君は私がこれくらいになってから私と出会ったんだっただね……………」

今、リットは長ズボンに青のパーカーという服装をしている。

「君は気づいたかな？私は一度として、君の前で半袖の服を着たことがない」

僕は今までの過去を振り返ってみる。

(うっ、一部思い出したくもない拷問のような過去が……………)
だけど間違いない、リットの言うとおりだ。

「そもそも、マーキュリーとはよくクロガネゲートで会ったけど……………」

気にしたことはなかったのかい？どうしていつもあんなところにいるんだ、と」

……言われてみると、そうだ。

“絶対いないと思ったところに奴がいる”

それがリットについて言われていることだった。

「確かに……おまえはよく、人目がつかないところによくいた」
「そうだろう？」

だからこそ、絶対いないと思ったんだけどね。

リットを上着を脱ぐとモンスターボールを取り出した。

「それはね、不審がられるからなんだよ。

……ポケモンが人間になって、こんな人間と会話をしていたら」
持っていたモンスターボールのうち、2つを指ではじく。

「そうは思わないかい？」

パアン！パアン！

「あーあ、話しちゃったな」

「べ、別にいいんじゃない？私は、構わないし……」

嘘、だろ……。

僕の目の前には急に現れた2人の人間。

一人は赤い蝶ネクタイをした茶髪の男で、目の色が少し……なんと
いうか、薄黄色に見える。しかも、美形だ。

もう一人は小さい女の子。金髪だが一部の毛先は黒く、

服も黄色と黒がメインだ。

「まさか、この2人は……」

「そう。気がついたかい？」

ミラが驚いた顔をする。

マルも同じだ。

「コンテストに出ていたスピント……」

「バトルした、チューン？」

「正解だ」

さらに上の服を脱ぎ捨てたリットが言った。

「お前……!!」

「どうだ？この姿は。」

だから安心して、お前もマフラーだの帽子だの脱いでくれないか」

服を脱いだリットの上半身は白い毛で覆われ、
肩や腹、そして腕には黄色い渦巻のようなものがあつた。

「私はゴウカザルだ。君は、何なのかな？」

少し楽しそうに、リットは笑つた。

第39話 リットンの秘密（後書き）

マル「ええーっ！そうだったんですかあっ！？」

ミラ「これは想像してなかったわね……」

マ「少し予告すると、次で詳しい経過が明らかにされると思われます」

ミ「なんで”思われます”なのよ」

マ「そこはほら、最近ろくに更新できない作者の都合ですよ」

ミ「なるほどね……」

マ「次回、PENALTY、”過去の兄妹に何があったのか”」

ミ「って、そんな次回予告していいの？」

マ「予告した以上は更新しよう……とのことです」

ミ「はあ……」

第40話 過去の兄妹に何があったのか

「私がこうなったのは、確か15歳のころかな？」

「15!!」

なんてこった、そんなに早くからポケモンにひどいことをしていたのか!?

「ちょ、ちょっと待ってくれ、早まるな!

勘違いするな、私は特に何もやってない!」

「じゃあなんでだよ」

慌てた顔をするリットに僕は冷たい視線を向ける。

「じゃあ、何が理由だ？」

あと、もう服を着てもいいんじゃないか？」

「ん、ああ……」

いそいそと服を着るとリットは真剣な目をして続ける。

「本来なら、私じゃなくてメートのはずだったんだ……」

「なんだって!？」

ということとは、つまり？

「私とメートは、もともとはヨスガシティの出身なんだ。

つまりは、ここは故郷、ということになる」

「それがどうしたんだ？」

ここが故郷……。

それは僕も知らなかったことだ。
けど、それがいったいどういう関係があるっていうんだ？

「ある日、私たちは224番道路へ出かけた。リツシ湖の方へ行くつもりでな。

最初は軽いピクニック気分だった、だが偶然、メートが見つけてしまったんだ。

普段は何もなかったはずの場所に、道が出来ているのをな……」

224番道路？

それに、その話、どこかで聞いたことがある……

そうだ、その話は、確か！

「かくれいずみへのみち、か？」

「知っているのか？」

わずかに驚いた表情。

確かに、今までその話を他人から聞いたことはなかっただろうが……

「偶然、僕は知っているんだよ。

その道が第4の湖、おくりのいずみに通じていることも」

「そうか、だったら話は早いな……」

一度大きく息を吸うリット。

そして、さらに続きを話してくれた。

「まあお前も察しがついている通り、私とメートはおくりのいずみに、さらに言うなら

もどりのどろくつに迷い込んでしまったんだ」

「もどりのどろくつ!？」

そこは空間のねじれた洞窟。

戻ることは簡単にできても、先に進むことは相当難しい。
いや、そもそもできるのか？

「私はすぐに迷ったから入口に戻ったんだけどな。

事もあるうちに、メートは……そこで一人の男に出会った」

「男？」

「ああ、私も詳しいことはわからないんだが。

彼とメートは、メートの話ではどうやら最短ルートで奥にたどりついたらしい。

そして、“怒りにふれた”」

怒りにふれた？

一体どういうことだ？そして、“何”に？

「わからない……」

ただリットは首を振るだけだ。

「だが、迷った私が洞窟の外に出ると、湖には3匹のポケモンが浮いていた。

君なら、その3匹とは何か、わかるね？」

「ああ」

湖、3匹、ポケモン……

ユクシー、アグノム、エムリットに間違いない。

「その3匹にテレポートで別の洞窟に連れて行かれた。

そしてそこには眠っているようだったが1匹のポケモンとメートがいた。

そしてユクシー達は言ったよ。

『このポケモンはあのポケモンの怒りを買ってしまった人間だ。

だから、罰として姿をポケモンに変えた。本来ならばこの女の子もそこで私は待ったをかけた。今でこそあんなボーイッシュになってしまったが、

当時はそれはそれはかわいらしくて髪も今の私くらい長くて……」

「ちよっと待った、話がずれているというか普段のお前の方に戻って行ってるぞ」

まじめな話をするときくらい、マシになっていると思ったのに……やっぱりというか、なんとというか……。

「おっとすまない。

まあ、そのあとは簡単だ。

私は、妹の代わりに自分がその罰を受けると申し出た。

そして、ゴウカザルの姿になったというわけさ」

「そうか……」

こいつはこいつで、妹のために自分を犠牲にしたというわけか。

確かに、重度のシスコンとしては当然、か。

「当時は私も、ここまで妹を溺愛していたわけじゃないんだけどね」

「なにい!?!」

ゆゆしき発言だ。

そんなこと、想像すら不可能だ……! !

「想像してごらん。妹が気がついた時、そばにいるのは兄ではなく

1体のゴウカザル。

私達の親は忙しいがためにあまり世話をしてくれなかったからね、頼るべき相手がいない妹としてはとても心細かっただろう」

その気持ちは、僕にも痛いほどよくわかる……。同じだ、あの頃の僕と……。

「どうしたんだい？マーキュリー」

「あ、ごめん。先を続けてくれるかい？」

いけない、つい昔を思い出してしまった。

「まあ続けるよ。」

とにかく、私は人間として一緒にいることはかなわなくなった。

だから、その代わりメイトが一人立ちできるくらい成長するまでは一緒にいてやった。

妹は私より5つ下で、その時は10歳だったから。

兄として一緒にいられなかったせいだろうね、妹への愛情がそれはそれは膨れ上がってしまったのさ」

そうか……

こうして、シスコンは生まれたのか。

第40話 過去の兄妹に何があったのか（後書き）

ミラ「今回はリットの過去話、というところかしら」

マル「マークにとっては予期せぬ味方、というところでしょうか？」

ミ「私は願っただけだね……」

マ「せめて、メートくらい常識的なら……」

ミ「次回、PENALTY、”同じことでも、人によって違って見えるものだ”」

マ「ボクとしてはマークの過去も気になります」

ミ「そうよね……特に、あのマルかって人のことか……ッ！」

マ（ミラからどす黒いオーラが見えるのは、気のせいでしょうか…
…？）

第41話 同じことでも、人によって違って見えるものだ

「私の話はそんなところだ。

ま、ドラマチックと言えばそうだったろう?」

「一つだけ聞いていいか?

そのこと、メートは……知っているのか?」

この話をする前にメートを部屋から出した時点で、予想は付いているんだけどね……。

「教えていないさ。

私としても、妹が成長する間何もやってなかったわけじゃない。

最初はゴウカザルの姿だとういにもならないのでね。見栄えのいいスピントかを人間の姿に変えて、コンテストに出てみたんだ。

いや、結構楽しかったよ。元は人間だからどうやればうまく魅せられるかわかったし。

少し練習しただけでいくつか賞は取れたよ」

リットはそう言って笑って見せた。

……今ほど、こいつの笑顔が苦しそうに見えたことはない。

ポケモンとしてコンテストに出ている間、妹に兄として接することが出来ず、

きつとつらい思いをしてきたのだろう。

「妹が成長したころには、私も多少人間の姿は取り戻すことが出来た。

もつとも、今ほどじゃないから服とかで体中を隠さないといけなかったけどね」

「一つウインク。」

「私の話はそんなところだ」

「まさか、お前もだっただなんてね……」

僕はゆっくりと帽子を脱ぐとマフラーも外した。

「これが、まあ僕の姿だよ」

「なるほど、君はゴルダックか。」

「だけど、顔が戻らないのはつらいね……」

「うっ、それを言うなよ……」

あああ、僕だつてせめて顔が元に戻ればどんなにいいか！
せめて、顔さえ戻れば……

「マーキュリー？顔から魂が飛んで行ってたよ？」

「はっ!？」

いけないいけない、一体僕は何を？

「今度は君の番だ。」

君がつかんでいることも、さっき君が話していたDORAのことも、
詳しく聞かせてほしい」

むう……

だが、確かラスカーは言っていたな。

「DORAのボスもポケモンにされた人間だ」と。

だから、同じポケモンになった人間である僕が必要だ、と。

「それなら、いいか」

ゴウカザルになったリットだって、連れて行ってもいいだろう。それに、こいつが戦力になるのは僕がよくわかっている。

「わかった……話す」

僕は、すべてを話すことにした……。

「あ、いた!」

外に出たメートを追いかけてきたのはマル。

「ん? もう話は終わったのか?」

「まあ……多少は」

頷いて見せたマルはメートに聞いた。

「あの、メートのお兄さんですが……」

生まれてから、ずっと一緒にいたんですか?」

「は?なんでそんな質問するんだ?」

ぼかんとした表情のメートに、マルは慌てて言い繕った。

「あ、いや、なんでもないです!」

まさかりットから全て聞きました、というわけにもいかない。

もしそんなことを言えば、先ほどのリットの話が何だったのか聞いてくるだろう。

「メートは……お兄さんのこと、どう思っていますか？」

「は？あのバカ兄貴のことか？」

マルはゆっくりと、言葉を選びながら質問していく。

「そうです。あのお兄さん、昔からああだったんですか？」

「んー、まあそうでもないな。」

オレが子供のころはむしろ、今と違っておとなしくて冷静なやつだったんだよ。

それがどうして、あんな派手好きの女装好きの変態になったのかね？」

あとシスコンか、とさらにメートは兄の欠点を追加する。

「たぶん、あの頃おかしくなったんだろうな……」

「あの頃？」

少し遠い目をしたメート。

「あれはオレが小さい頃かな。」

オレはある湖で兄貴とはぐれた。そのとき、一緒にいた男の人がこっちだぞ、って前を歩いていたのを覚えているよ」

これはリットの話にも少し出てきたことだ。

あえて口は挟まず、マルは黙ったままメートの話を聞く。

「その辺の記憶はあいまいなんだ。ただ、そのあと兄貴が失踪して

親が大パニックになったのは覚えている。何があつたの、って何度も親に聞かれたよ」

ハハ、とメートは口をあけて笑う。

今、二人は噴水の前にあるベンチに並んで座っているのだが、小さい子供が噴水の中にウパーを入れ、水を掛け合っているのを見てふとメートが穏やかな表情になる。その表情を見てマルはやっぱりこの人は女だ、それも、とてもきれいな人だと考えていた。

「兄貴と入れ替わりに、1体のゴウカザルがオレの前によく姿を見せるようになった。

メラってオレは呼んでただけだな、俺はあのゴウカザルをゲットしたくて仕方がなかった。それくらい仲良くしていたからな」

それはきつとリットのことだ。

当時のメートは、まさか人間がポケモンになるなんて考えたことはなかったのだろう。

（もつとも、ボクだってまさか目覚めた途端人間になるなんて思っ
てなかったけど……）

メートとマル、二人ともが考え込んで会話が中断する。

「だけどな、いなくなっていた兄貴が、ある日ひょっこり現れたんだ。

それも、知らない間に雑誌に載るぐらい有名なポケモンのコーディネーターになっていた。

まあ何に驚いたって、確かに顔がもともと良かったからって、女装して現れてさ、

しかもそれが似合っていたことなんだよな……」

「……………」

なんとも言えないような表情を浮かべるメートに、
マルはかける言葉が思い浮かばなかった。

第41話 同じことでも、人によって違って見えるものだ(後書き)

ミラ「最近、感想書いてもらえなくて悩んでるわね、あの筆者」

マル「もちろん、ボク達も気にはなりますが……」

ミ「というわけでー」

マ「感想、お待ちしています……」

ミ「こうしたほうがいい、というご指摘でも大歓迎！」

マ「よ、よろしくお願いします……」

ミ「次回、PENALTY、”役者はそろった？”」

第42話 役者はそろった？

ひとまず、僕はメートがいない隙にミラをポケモンに戻した。

「そうか、この子はミロカロスだったのか。

確かに、そういえばワンピースの模様がミロカロスの尻尾みたいだったね」

ふむふむ、とリットが分析するような目で見る。

「それにしても……」

ミロカロスとなったミラを見るリットの目は普段と少し違っていた。

「なかなかきれいなミロカロスじゃないか。

うつくしさコンテストにミロカロスは多いけど、このミロカロスなら十分優勝は狙えるんじゃないかな？」

『えっ、本当ですか？』

コンテスト上位者のリットにそう言われ、ミラが嬉しそうな声をあげる。

「ああ、私が保証しよう」

『やった！やったあー!!』

ミラ、僕は一度もコンテストに出ると言っただつもりはないんだけど

……

『マーク！コンテスト、がんばろうね！』

だから誰も出るとは言っていないのに。

「話を戻そう、マーキュリー。」

DORAのことを教えてくれたのは助かった、私も協力しよう。

だから、とりあえず……そのラスカーというドンカラスのところへ行かないか？」

リットが僕にそう提案してきた。

確かにそうだ、ラスカーのもとに行つて……

気は進まないけど、僕も協力するか……。

「それじゃ、マルを呼んでくるか」

「私もメートを呼んでくるか」

僕はミラをボールに戻すとリットと共に部屋を出た。

「それじゃ、行こうか」

部屋を出てホテルからも出ると、そこではメートとマルが何やら難しい顔をして腕組みをして考え込んでいた。

「……えっと、どうしたの」

僕はおそろおそろ二人に声をかける。

「世界の神秘について考えていた」

「時代を超えた不思議について考えていました」

……この二人、仲は良いみたいだけど一体何を話していたんだろう？
かなり気になって仕方がない。

「はいはい、そんな難しい顔をして考え込んでいたって楽しくないよ？」

もっとシンプルに考えていいんじゃないかな？」

いやリットよ、世界の神秘がどうのこうのと考えることに異議はないのか？

「私は妹のことを考えるときは、他に一切何も考えないっ！」

「森へ帰れ！」

一瞬でメートのとび蹴りがリットの顔面に炸裂する。

「め、目が！？目があゝ！！！」

目をおさえてのたうちまわるリット。

うっむ、自業自得とは言え、さすがになんか哀れに思えてくる……。

「ま、お前が悪いもんな」

「そうですね」

だが、結局のところ仕方がないことだ。

「ひどいよマーキユリー！？私を見捨てる気かい！？」

そんなこと言われてもなあ……。

だって、どう考えてもお前の発言が悪いだろ。

「まったく……このバカ兄貴が。」

それより、二人での話は終わったのか？」

「あ、ああ」

そういえば、リットはDORAとの戦いに参加するとしても……
メートはどうするのかな？

「とりあえず……メートは、帰るんだ」

「は!？」

またもや爆弾発言。

またもや、妹を遠ざけようとするシスコンにはありえない発言を。

「これから私とマーキュリーは戦いに身を投じることになる。
お前には危険だ。だから、帰るんだ」

厳しい言葉を投げかけるリット。
なるほど、こいつはこいつなりに妹の身を案じているのか。

「戦いって、DORAのことか？」

だったらオレだって協力するよ、それに問題はないだろう?」

いや、おそらく厳しいだろう。

僕だって詳しいことを知っているわけではないが、僕がリットにも
協力を頼んだのは

リットが僕と同じように「罰」を受けた人間であり、ラスカーは「
罰」を受けたという理由で僕に協力を依頼していたからだ。

「駄目だ。帰れ」

「くっ……このバカ兄貴！」

一切主張を捻じ曲げないリットに、とうとうメートの方が折れた。

「あとで後悔しても、遅いからな!!」

そう叫ぶと、メートは身をひるがえしてどこかへ走って行ってしまった。

「悪いね。でも、愛する妹のためだ」

リットが軽く僕に頭を下げた。

「さあ、とりあえずどうする?」

「教会に行こう。ラスカーにもう一度会わなきゃ」

まずはそこからだ。

ラスカーに、返事をしないとね……。

二人から少し離れた場所です。

「ふん、オレがそう簡単にあきらめると思ったのかよ」

建物の陰に隠れているのはメートだった。

メートは腰からモンスターボールを取り出すと、ボタンを押して大

きくした。

「バカ兄貴が。絶対何か隠してるだろ。いきなり失踪したと思ったら、急に帰ってきて、女装好きになったくせに」

長袖しか着ないっておかしいだろ。

オレの目はごまかせないよ……妹だからな」

二人に気付かれないよう、そろりそろりとメートは後をつけていった。

「これは……」

「何が起こったんだ……？」

何かなんだかさっぱり分からない。

ついさっき訪れたばかりの教会は、いつのまにかひびが入りボロボロになって

一部は崩れかけていた。

第42話 役者はそろった？（後書き）

ミラ「38話とかを読んでいけば、どういふことかはわかるわよね」

マル「でも、教会を壊すつて、天罰が下るんじゃないですか？」

ミ「……さあ？」

マ「そこでどうして”さあ”なんですか？」

もつとほかにはコメントあると思うんですけど」

ミ「だって、この段階では私たち本編では何が起こったか知らないんだから

コメントしたらまずいでしょ」

マ「そういうものなんですかね……」

ミ「そういうものなのよ」

マ「次回、PENALTY、”物事は思うように進まない”」

ミ「そういえば、メートがあとをつけたりしてるしね……」

マ「それがどういふ影響をもたらすのかは……神のみそ汁、ってやつですね」

ミ「……みそ汁？」

第43話 物事は思うように進まない

「ダメだ、ラスカーもいない」

とりあえず、僕たちはボロボロになった教会へと入ってラスカーの姿を探していた。

しかし、彼の姿はどこにも見当たらない。

やはりどこかへ避難してしまったのだろうか？

「マーキュリー、どうする？」

「どうしようかな……」

弱った。

僕にとってツククサとのつながりはラスカーしかない。

そのラスカーと連絡が取れないとなると……

「ん？」

いやちょっと待て。

本当にラスカー“だけ”か？

「そつだ！」

「どうしたんだ？」

突然声をあげた僕にリットは驚いた顔を見せる。

「思い出したんだ、確かにラスカーとの連絡は取れないけど

だからといってツククサとのコンタクトを望めないわけじゃない」

「何を言ってる……ん、ああ、そういうことか？」

「どづいつことですか?」

何気に人間の姿のままついて来ていたマルだけが分からなかったよ
うだ。

「君と会う前だけど、僕は一度他のツユクサのポケモンに出会って
いるんだ」

「へ?.....あ!」

「やっとわかった?」

閃いたように目を輝かせたマルに僕は笑いかける。

「そう、ロズレイドのブーケだよ」

ラスカーは僕の話はブーケから聞いたと言っていた。
それはつまり、ブーケはラスカーの連絡先を知っていたということ
になる。

(それは今さっき行ってきた教会かもしれないけど)
ならば、ツユクサの連絡先を知っているかもしれないと考えても何
の違和感もない。

「それじゃ、とりあえずポケモンセンターに向かおうか」

「わかった」

「了解です」

リットとマルを連れ、僕はポケモンセンターへと足をすすめた。

「ツユクサ？その人物がカギを握っているのか？」

マーキュリーたちの話を盗み聞きしていたメートはいぶかしげな表情になる。

「だいたい、ラスカーってこの町の教会にいる神父様のことだよな？その人がどうやらツユクサって人と何か関係があるってというのはまだわかる。

「ただど……ブーケはロズレイドって言うてたから、ポケモンなんだろう？」

「どうしてポケモンに会えば、人の連絡先がわかるんだ？まさか……」

まさかポケモンと会話できるわけじゃあるまいし。

最後の言葉は口に出すことなく、メートは尾行を続けた。

一方、同時刻。

「どつやら、イブの部下達はしくじったようじゃの」

いまいましそうな顔でヨスガシティを歩いていた老人が一人いた。

「ツユクサに出会うわけにはいかんが……」

イブの部下が仕留めそこなったという、例の若造……何といったか？あやつはワシみずから、手を下してやるう」

少し考えたのち

「そうか……そういえば、マーキュリーという名じゃったな」

ふっと笑みを浮かべた老人。

新たなDORAからの刺客が、マーキュリーへと迫っていた。

「へっくしょい！」

「風邪かい？」

「いや、ただのくしゃみだよ……たぶん」

少し悪寒も伴ったのだが……たいしたことはないだろう。

いま、僕とリットはようやくポケモンセンターについたところだ。

「さて、電話をかけるとするか」

「番号はわかるのかい？」

少し心配そうな声を出したリットに僕は笑顔を見せる。

「心配ないよ、ソノタウンのフラワーショップにかければいいのさ」

世の中にはタウ ページという便利なものがあるのだから。目的の番号を見つけると、僕は電話をかける。

Calling……

<はい、「いろとりどり」です>

「こんにちは、あの、ブーケさんはいらっしやいますか？」

<……申し訳ありません、ブーケは本日は休みをとっております。

私達でできることが何かあれば、承りますが……>

「あ、じゃあ、マーキュリーから連絡があつたと伝えておいてください」

<はい、かしこまりました>

ガチャン、ツー、ツー、ツー……

「……もしかして、これで……」

「手がかりゼロ、だ」

はあああ、と僕とリットが同時にため息をついたので

周りにいた何人ががいぶかしげな表情でこっちを見てきた。

はい、すみません。

「……」

そして老人はとうとう、マーキュリーたちのいるポケモンセンターに到着した。

第43話 物事は思うように進まない(後書き)

ミラ「更新遅れて」

マル「申し訳ありませんでした」

ミ「話の中でも結構大変みたいね……いろいろと」

マ「そうですね……いろいろと」

ミ「最近、ポケモンとしての側面が薄れてるんじゃないかって
嘆いてたわね、そういえば」

マ「でも、あくまで世界観はポケモンだしまるっきり出してないわ
けどもない

し……」

ミ「難しいわね、その辺」

マ「次回、PENALTY、” 疲れたんだ、明日にしてくれ”」

ミ「……なんとというか、その……」

マ「悲痛なタイトルですね……」

第44話 疲れたんだ、明日にしてくれ

「どうしよう……」

「とりあえず、今日はもう帰らないか？」

「私はもうくたくただよ……」

そんな会話をしながら、テンションの低い僕ら二人はポケモンセンターから出た。

「それにしても、今日はいろいろあったな……」

ラスカーに会い、リットと再会して、話をしたらとんでもないことが分かって……。

「これ以上はもうう何も起こってほしくないよ」

「ところが、そういうわけにもいかんのじゃ」

え！？

慌てて振り向くと、つい先ほど出てきたポケモンセンターの壁に一人のおじいさんがよりかかっていた。

パイプをくわえて、和服を着ていたおじいさんは「どっこいしょ」と寄りかかっていた体を起こし、僕をじつと見た。

「ほお、お主らもか。その体は」

「な！？」

お主“ら”！？

僕はまだ顔を隠しているから、そうだとわかったのかもしれない。

けど、どうしてリットまで「罰」を受けた人間だとわかったんだ！？

見ただけじゃリットはわかるわけないのに!

「それに関しては説明拒否じゃ。」

別にいいじゃろう? お主らはここで……」

ここで、目の前の老人は二つのモンスターボールを手に持つ。

「……散るのだから」

投げられたモンスターボール。

そこから出てきたのはノクタスとガブリアスだった。

「くっそ……」

また!? また? また? きたに巻き込まれるの!?

今日はもう……疲れているのに……。

「マーキュリー。僕達もいくよ!」

「……おう」

リットがモンスターボールを投げたので、仕方なく僕も投げる。

「エレガントに、かっこよく。」

……参りましょう、スピソ!」

リットが出したのはオニドリルのスピソ……飛行タイプか。

たっしたら、僕は……

「ミラ、スタート!」

僕が出したのはミロカロスのミラだ。

「ほう、ミロカロスか……。確かになかなかのミロカロスだが、ノクタスがこちらにはいるのだぞ？」

それはわかっている。

けど、水タイプだからといって草タイプに勝ち目がないわけじゃない！

「一応名乗っておこうかのう……。」

ワシはカバチ。DORAで4幹部の一角を担っておる」

ふーん……。は？

「「幹部!?!」」

「なんじゃ、一拍置いてその反応か」

幹部ってことは……。もしかして、強いんじゃないかね？

「そろそろ始めようかの、これ以上は時間の無駄じゃ。」

ノクタス、ミロカロスにニードルアームだ」

「そんなもの……。」

『読み通り!』

ノクタスがミラを狙ってくることなんか、こっちはとっくにお見通しなんだよ！

「それでこそ、スピンが活躍するのさ」

ミラに接近してきたノクタスに、陰からスピンが迫る。

「つばめがえし！」

「ノオツ!?!」

翼を広げたスピンからノクタスは逃れようとしたが、つばめがえしは避けることが出来ない技だ。なので、よけることはできずノクタスはダメージを受けてしまう。

「フン……ならばガブリアス、先にあのオニドリルをしとめる」

「そうはいくか！ミラ、ガブリアスに冷凍ビーム！」

『はああっ!』

冷凍ビームが放たれたのを見て慌ててガブリアスはミラやスピンから距離をとる。

「冷凍ビームか……」

地面、ドラゴンタイプのガブリアスにとって氷タイプの技である冷凍ビームは
もっとも避けなくてはならない技だ。

「貴様、それがあつたからノクタスがいたにもかかわらずそのミロカロスを出したのじゃな？」

「それが何か？」

僕は思わずにやりとする。

僕はタイプのこと考えるからね。

まさか、何の理由もなくミラを出したわけないでしょう。

「フン、なめくさりおって……」

カバチが鼻を鳴らす。

……あれ？

ここで僕は気づいたことがあった。

カバチは僕らと出会った時から、ずっとパイプをふかしていた。そこまではいい。

ただ、その時パイプから出ていた煙は真っ白だったのに……
なんか、今の煙……若干茶色っぽくないか？

「おいマーキュリー、あの煙……」

「わかつてる」

何をする気だ？あの爺さん。

「ノクタス、ガブリアス。“アレ”をやるぞ」

『おおおっ！』

『待ってましたあ！』

罰を受けているから、僕はポケモンの言っていることがわかるんだけど……

あのポケモンたち、今間違いないと歓喜した。

「ハアアアア」

カバチが一度パイプを口から外して息をはくとともに、大量の煙が吐き出される。

いや、これ煙じゃ……ない？

「これ、砂じゃないか!？」

リットが慌てた声を出す。

「何じゃ、やっと気付いたか」

そうだ、指摘されて見ると確かにわかる。

あれは、砂だ！！

「どんどんいくぞ」

煙と共に吐き出されたりパイプから出てきた砂は空気中に舞う。しかも、だんだんと風が強くなってきて……

「な、なんだあ！！」

「マーキュリー、これはやばいぞ！」

リットが慌ててポケモンの方を指さした。

『いてっ』

『いたあ！』

カバチのポケモンは平気そうだが、スピントミラは顔をしかめている。
る。

もはや視界を奪うほどのこの砂の量、間違いない！

「これは……すなあらしだ！！」

でも、なんでカバチが！？

第44話 疲れたんだ、明日にしてくれ（後書き）

ミラ「まさか、こんなに時間がかかるとはね……」

マル「申し訳ないです……」

ミ「こんな感じで、超！不定期更新となってしまうんだけど」

マ「どうかご了承ください」

ミ「次回、PENALTY、”砂嵐の脅威”」

マ「ボクたち最近、謝ってばかりですね……」

ミ「でも、ここまで不定期だとね……」

第45話 砂嵐の脅威（前書き）

お久しぶりです。

更新してない間も、読んでくれた方がいらっしやることに感謝です。

これからもしばらくこの超不定期状態が続きますが、どうかよろしく願いします……

第45話 砂嵐の脅威

突然の砂嵐に、かなり視界が奪われる。

だけど、問題はあのカバチって言うおじいさんがパイプからこの砂嵐を起こした(と思う)

事だ……。

どうなってんだ？

「こら、マーキュリー！ぼさつとしている場合じゃないよ！」

リットが僕に厳しい声を飛ばす。

「僕達のポケモンはオニドリルとミロカロス……あまり砂嵐に対して相性がいいとは言えない。それに対して、あいつのポケモンは何だった……？」

カバチのポケモン？

えっと、確かノクタスとガブリアス……

「あ」

そうだったあああああああ！！

『いて、ちょっとこれはまずいぞ……』

『アイタツ！ちょっと、マーク、どうにかしてえ』

スピンとミラの悲鳴が聞こえる。

でも、そんな場合じゃなかったんだ……！

「ミラ、急いでこっちに戻ってこい！」
『うん、うん』
「遅いわ」

だが、すでにミラの背後にはカバチから指示を受けたノクタスが影のように立っていた。

「ニードルアーム!!」
「ノオオオオ！」

ノクタスが手を振り上げ、そして

『きゃああああ!』
「ミラ!?!」

その攻撃はミラにヒットする。急所にこそ当たらなかったようだが効果は抜群だ。まずい……。

「くそ、スピン、ノクタスにつばめがえし！」
「ニイイ！」

スピンの翼を広げノクタスの方へ飛ぶがノクタスはすぐに砂へと紛れてしまった。

「思い出したかい? マーキュリー」
「ああ……」

そう、ノクタスとガブリアス……どちらも「すながくれ」という特性を持つポケモンだ。

すながくれは天気が砂嵐の時、回避率があがるという特性だ。

「話をしている暇があるのか？」

「し、しまった！」

スピンがきよろきよろしているところへガブリアスが後ろから襲いかかる。

「ドラゴンクロー、だ」

「ガアアアブ！」

『ぐはっ！』

悲鳴をあげてスピンが倒れる。

『あいたたた……はあ、はあ』

ミラ……？

少しつらそうなミラの声に僕は疑問符を浮かべたが、考えればなんてことはない。

「そつだ……」

ミラはさっきのニードルアームで相当のダメージを負っている。それに加え、今までの砂嵐によるダメージが蓄積されている。

「これ以上は危ないな……」

僕は腰からモンスターボールをはずすと砂嵐の中、ミラを呼んだ。

こつも砂嵐が激しいと、ミロカロスがどこにいるやらわからない……。

「聞こえるか、ミラ!?」

『聞こえるよ!……あ痛』

あ、またダメージ受けたな……

「ふん、ノクタス、ミロカロスにとどめを刺してやれ」

カバチの声でした。

やっべ、調子に乗ってる場合じゃない……。

「ミラ!うずを描くようにふぶきだあ!」

『ああああ!』

僕の声を含図に、僕の右前方12メートルのところまでふぶきの渦が起こる。

この意味、それは……

「しまった……ガブリアス!!ノクタス!」

カバチが声を荒げた。僕の計略に気付いたのかな?

もつとも、その声が逆に……2体のポケモンを呼ぶことになる!

「ガブ?ガ……ギャアアアン!」

ガブリアス、頭を出して見事ふぶきにクリーンヒット。

頭だから、いわゆる「急所にあたった」ってやつだ。

そしてもう一つ……その渦は、ミラの位置を知らせる手がかりとなる!

「戻れ！ミラ！」

モンスターボールから放たれた赤い光がミラを包む。そのままミラはモンスターボールに戻っていった。よし、これでもうダメージを受けることはないだろう。

「そして……頼むよ！」

砂嵐で相手が来るなら、こっちだって対策は必要だ。

砂嵐でダメージを受けないのは特性で砂嵐関係を持つポケモンかいわ、はがね、じめんタイプのポケモン。僕がもっているのは、こいつだけだ！

「マル！」

投げられたモンスターボールから出てきたマルはアノプス。いわ、むしタイプのポケモンだ。

「さあ、続きと行こうか！」

ノクタス相手に、マルはむしろ有利だ。これなら……勝てる！！

「ふん、ガキが……」

ガブリアスをボールに戻したカバチはいまいましたそうに吐き捨てる。

「だったら、直にワシが相手をしてやるっ……！！！」

……何ですと？

第45話 砂嵐の脅威（後書き）

ミラ「マルに出番とられたあ……………」

マル「ボクは初バトルですよ！？いいじゃないですか！」

ミ「マルの担当はバトルじゃなくて料理でしょ？」

マ「んなっ…………じゃあ、ミラは何なんですか？」

ミ「……………」

マ「……………」

ミ「……………ヒロイン？」

マ「バトルじゃないじゃないですか！しかもヒロインって！」

ミ「次回、P N A L T Y、”お前は、何だ”」

マ「あなたが何なんですかあっ！」

ミ（マルが荒れるなんて、珍しい……………）

第46話 お前は、何だ

「ワシが自ら手を出すのは、いつ以来かのう……」

何やら感傷に浸りだした目の前の爺さん。

いや、そんなこと言ってる場合じゃないんだけど……。

「いくぞ、小僧」

カバチがにやりと笑うと、その体が

「は!？」

「どづいうことだ!？」

砂に沈んだ。

いや、人間が砂に沈むってどづいうことよ!

「マーキュリー、いったいどづいうことなんだ!？」

わかるわけないでしょうがああああアアアア!

『ふん、そんな油断していいのか?』

『ふえ?』

マルが変な声を出したが……

「!」

「マル、そこを離れるオ!」

『遅いわあ!』

ゴゴゴゴゴゴ……

地鳴りがしたと思った次の瞬間、マルの足元に突然ぱっくりと穴が開いた。

そこからカバチの音がする。

『おおおっ！』

「戻れ、マル！」

とっさに叫んだ僕の声にマルは慌てて離れる。

そして

ドオオン！

『チツ、はずしたか』

「んな！？」

何かが。

何かが、マルがさっきいた場所をガブリとその口で噛み砕いた。

「……………おいおい」

砂嵐のせいでシルエットしか見えなかった。

でも、あれは人間じゃなかった……。

巨大なアゴ。体から砂を撒き散らすその巨体。

『ノクタス、やれ』

「後ろだ、マーキュリー！」

ん？

「ノオオオ！」

「おおおお！？」

砂嵐の中から、再び現れるノクタス。

くそ、こんなに神出鬼没じゃたまったもんじゃない！

「マル、むかえうつぞ！」

「はい！」

「ノクタス、とどめを刺してやれい！」

「ノオオ！」

ノクタスがこぶしを振り上げ、マルの方に向かって飛んだ。だが、その勢いが命取りだ！

「マル！カウンターの要領でシザークロスだ！！」

「わかりましたああ！」

マルの爪に力が凝集されていく。

「いかん、ノクタス……」

「遅いぜええッ！」

ノクタスがこぶしを振りおろすより早く、飛び上がったマルの爪がノクタスを切り裂いた。

むしタイプのシザークロスは、草タイプには効果抜群だ！

「ノ、オオ……」

カッと目を見開き、倒れるノクタス。
起き上がるうとはしたものの、すでにその力はなくノクタスは気絶してしまった。

『チツ』

砂嵐の中からモンスターボールの光がノクタスに伸びると、
ノクタスも同じような光になり、消える。

『さすがにこれ以上は時間的に無理か……。』

ここは退散しよう。また会った時は……』

「……………」

砂の中に潜んでいたカバチはそう言い残し、
ドシン、ドシンという音と共に何か砂から少しだけ姿を見せる。
しかし、また砂の中へ戻ってしまった。

「あ、砂嵐が……………」

「……………」

静かになったかと思えば、砂嵐が段々とその勢いを失っていく。
だけど…………砂嵐が晴れた時、すでにカバチの姿はなかった。

「逃げられたか……………」

「ああ、そうみたいだ」

リットと僕はそれから何も言うことができない。

確かに、カバチは去った。

だけど、数の上ではダブルバトルだったとはいえ、僕たちは砂嵐と

「いう相手のフィールドに振り回されてすぐには対応できず、なんとか相手にダメージこそ与えたものの」

「相手の手の内が見切れたわけではない。それに……カバチは、ポケモンを1体ずつしか動かさなかった。それだけ、余裕があったということだったのか……？」

「とりあえず、戻れ」

「リットも僕もポケモンをモンスターボールに戻す。」

「あれが、DORAの幹部か……」

「そのどっしりとした構えこそ、まさに上に立つ者の風格というべきか。」

「だが、今回の戦いで分からないことも増えた。」

「あの影……あれはどう見ても、人間じゃなくてポケモンだった」

「リットの呟きに僕は首を縦に振る。」

「あんな人間がいるわけないからね。」

「やっぱり、カバチも僕達と同じなのか……？」

「お前は一体、何なんだ……？」

「せっかく砂嵐が晴れたというのに、僕達の心には暗雲が立ち込めている。」

「後味の悪い、敗北だった。」

第46話 お前は、何だ（後書き）

ミラ「敵もポケモン、か……」

マル「人間とごっちゃだから、少しわかりにくいですかね？」

ミ「でも、そういう話だし」

マ「近々、キャラ設定のページを作った方がいいのでしょうか？」

ミ「せっかくなので」

マ「読者の皆さんの意見次第で決めようと思います」

ミ「次回、PENALTY、”話し合いは大事”」

マ「皆様の意見、待っています！」

第47話 話し合いは大事

< あー、それはそれは >

「なんだその反応はっ!」

カバチが去った後、僕とリットはひとまず別れ、ホテルに戻った。次の日、ツユクサから連絡だと聞いて、ポケモンセンターに飛んで来たんだけど……。

< いやね、オジサン達教会から避難してたんだけど、

まさかそんなことがあるなんてね!」。

あ、ちなみにラスカー神父は怪我してたけど何とか無事だよ >

「そこまですごいでもいいみたいね雰囲気出されても腹が立つだけなんです」

< いや、だって所詮他人事だし? >

「あ!?!」

今、電話をたたきつけて切るのをこらえた僕を誰かほめてほしい。

< それはともかくさ、実は君にはその街から行ってほしいところがあるんだ >

またか?

また僕は誰かの都合でどこかに行かなきゃいけないのか……。まあ、仕方がない。

「それで?どこに行けばいいんですか?」

< 君に向かって欲しいのはね >

ツユクサが告げた場所は……

<トバリシティ>

そこはかつて、僕のあこがれる人がいた場所だった。

<実を言うと、僕たちは今その町に避難しているんだけどさ。……って、聞いているかい？マーキュリー？>

ツユクサの言葉が、急に耳に入らなくなった。
僕の意識が、過去のあの日に飛ぶ。

『……………!!……………!!』

『しめんなさい！しめんなさい、しめんなさい……………』

『君のその力で、世界を変えてみようとは思わないか？』

「……………」
<マーキュリー？おいマーキュリー！>
「……………」

ツククサが僕を呼ぶ声で、僕は過去から引き戻された。

<どうしたマーキュリー？なんかぼんやりしてたけど、何かあったのか？>

「あ、いや……なんでもない」

そう言えば、ツククサは僕の過去は知らないんだっただな……。無理に話すことでもないけど。

「ま、とにかくトバリシティに行けばいいんですね」
<うん。そこに着いたらまた連絡してくれ。じゃ>

少し首を傾げた様子はあったが、ツククサはまあいいかとばかりに電話を切った。

まったく、あの人は意外と人に対する礼儀がなっていないんじゃないか？

連絡先聞いてないから、後で連絡もへったくれもないし。

トバリシティ シルフカンパニーシンオウ支社

「これでもダメなのですか、社長！」

「む、うう……」

ここ、トバリシティにあるシルフカンパニーシンオウ支社はシンオウ地方の各ショップにとって、重要な商品の仕入れ先である。当然、シルフカンパニー側としても商品については日々、向上しようとする研究や企画会議が行われている。今も、その会議中なのであるが……。

「言わせていただきますが、社長、いくらなんでも昔のものにこだわりすぎです！」

「そうですね、確かに昔からのものを後世に伝えていく必要もありますが、改良できるものは改良すべきです！」

つい先ほど、社長に却下された企画の資料を机にたたきつけて数名の重役が怒鳴る。

「百歩譲って、本社が作成したマスターボールの販売を拒否したことは

追求しません。ですが、キズぐすりの改良など、できることをしないのはなぜですか！」

そうだそうだ！と、まわりの人々も抗議の声をあげる。

だが、それに対し社長ははげ上がった頭をおさえ、ただ唸るばかりだ。

「じ、じゃが……」

「そんな陳腐な企画書が通るわけない、と言っているのです」

「なんだと!」

一人の発言に、そこにいた多くの者が非難の目を向ける。

「何を言い出すのかね、君!」

「そうだ、いくらなんでも若いからといって調子に乗りすぎではないのか!」

「それを言うなら、年をとっている自分達の方が優れている、と言うあなた方も

調子に乗っているではありませんか?」

比較的年をとったものが多い重役の中で目立つその若者は眼鏡を手でずり上げると鋭い眼光を重役たちに向けた。

「私の目には、あなた方の企画書はすいぶんとくだらなく映るのですよ。」

例えば、これ」

そうやって先ほどたたきつけられた資料を取り上げる。

「このマーケティングは調査対象者が偏りすぎです。」

こんな調査で出た結果では、実際市場に品物を出した時大きな計算違いが生じることですよ」

「く……」

ポイントと資料を投げ捨てると

その青年……ジュウは横にいた車いすの男に声をかける。

「そう思いませんか? ガル経営部長」

第47話 話し合いは大事（後書き）

ミラ「まためんどくさいことに……」

マル「それを言っでは終わりですよ」

ミ「しかも、2か月ぶりの更新って……」

マ「いつか、ペースが速くなる……はずですよ」

ミ「はず、なんだ」

マ「しょうがないですよ。そういう時期なんですから」

ミ「次回、PENALTY、”フー、飛びたい”」

マ「こんなとろとろ更新でも、読んでくださる皆様に感謝です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4618p/>

PENALTY ニンゲンがキミでポケモンがボクで

2011年12月10日02時48分発行